PL
791
.6
T7
1926

Yoshida, Kenkō
Teishitsu gyobutsu
Tsurezuregusa

East Asiat Studi

CALL NO:
PL
791
.6
T7
1926

EAS

AUTHOR:
Yoshida,

TITLE:
Teishitsu gyobutsu...

VOL:

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/teishitsugyobuts00yosh

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

帝室御物 徒然艸

（附 活字本徒然艸）

與謝野寛
正宗敦夫
與謝野晶子

編纂
校訂

LIBRARY
MAR 28 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
791
.6
T7
1926

徒然草解題

一、茲に「日本古典全集」第二期の書目へ、僧兼好《ケンカウ》（一二八三「弘安六年」）——一三五〇「觀應元年」）の隨筆集である「徒然草《ツレヅレグサ》」を採錄するに當り、帝室の御物にして、烏丸光廣《カラスマルミツヒロ》（一五七九「天正七年」——一六三八「寛永十五年」）の自筆に成る貴重の一本を撮影し、其儘印行する事を許可されたのは、我我の幸である。先づ此事に就いて宮內省に感謝する。

一、「徒然草」は固より上下二卷に分れてゐる。即ち本書の中の「花は盛りに月は隈《クマ》無きをのみ見るものかは」と書き出したる一章以下が下卷である。土肥經平《トヒツネヒラ》は其著「春湊浪話」に於て、上卷は建武三年（一三三六）以前に書かれ、下卷は其後に書かれたものと推定してゐる。爾後寫本として傳はつた「徒然草」に數種の異本を生じたのは已むを得ない。此「光廣自筆本」も其等の異本の一である。「徒然草」が初めて板行されたのは、德川初期に於ける角倉素庵《スミノクラソアン》（一五七〇「元龜元年」——一六三二「寛永九年」）の私版、謂ゆる「嵯峨本」を始めとするのであるが、後に出でた北村季吟（一六二四「寛永元年」——一七〇五「寶永二年」）の「徒然草分段抄」から、「徒然草」の本文の每章に「一段」、「二段」と云ふ風の段數を書き添へる事となり、今日も流布してゐる諸本は、すべて右の「季吟本」に據つて段數を加へる習慣を存してゐる。併し段數の無いのが兼好の書いた儘の姿であつて、此「光廣本」にも「嵯峨本」にも段數は書

かれて居ない。

一、此「光廣自筆本」を板行する事に由つて、「徒然草」の異本が一種新たに世に出るのであるが、元來「徒然草」の異本は「流布本」に比べて多くの異同が有るので無く、文字の末に極めて些少の增減を見るのみである。主として是れは書道に於ても名の有つた光廣の筆蹟を見、兼ねて板本以前の傳寫本の「徒然草」が如何なる姿のものであるかを見るのに好い。

一、猶讀者の爲めに活字版の「徒然草」を附錄とした。此底本には、「徒然草分段抄」系統の「流布本」を避けて、與謝野寛所藏の正德二年（一七一二）刊行の木版「徒然草」を用ひた。「分段抄」より少しく後れて出た本であるが、是れも「流布本」に對して一の異本である。本文は「流布本」に比べて概して善いと思はれるが、惜しいかな、板刻の際の脫落と明かに考へられる所が數箇所ある。全體に亙り「流布本」と對照して、「　」此印(シルシ)の中に脫落を補ひ、また彼に有つて是れに無き字句の中、有つた方が善からうと思ふものをも加へた。即ち本書に於て［才］と書いたのは、すべて「流布本」の方を「異本」として見たのである。實は共に掲げた「光廣自筆本」とも對照して置きたいと思つたが、編者に於て其時を得なかつたのは遺憾である。

一、此活字版に漢字と假名遣との誤つてゐるものは悉く訂正した。また「日本古典全集」の發行趣旨の如く、假名書(カナガキ)の所に漢字を增加し、會話と書名とには「　」此印(シルシ)を加へた。題簽は底本から撮影した。底本

の本文に有る段數の記載は、板本以前の舊に復して之を省いた。

一、著者兼好は卜部氏、在俗の名は兼好である。後村上天皇の觀應元年四月四日（或は二月十五日、或は二月十八日）に生れた。家は世世神職に任ぜられた卜部氏の旁流である。父治部少輔兼顯に三男が有つて、長子は大僧正にして「神風和記」の著者たる慈遍、次子は民部大輔兼雄、末子は兼好である。兼好は十七八歳にして宮廷の瀧口に補せられ、次いで六位藏人を經て近衞の左兵衞尉に任ぜられた。その官歷は卑かつたが、早くより内外の學問を修め、有職故實に通じ、殊に歌人として知られた。その歌集（兼好法師集）の詞書や歌で想像すると、歌は當時の名家冷泉爲世（一二五〇「建長二年」——一三三八「延元三年」）を僧頓阿（一三〇二「正安三年」——一三八四「元中元年」）等と共に師としたらしい。兼好が後宇多法皇に愛せられて仙洞へ出入したのは固より歌人としてで有つた。歌人が官位の高下に由らずして宮廷と公卿の間に尊敬せられ、自由に文雅の交を爲し得る事は、古く奈良朝以前よりの慣習であるから、今日の語を以てすれば藝術家として當時の貴人社會に愛重せられた一人である。兼好は青年時代に於て戀愛の閲歷を有したであらう。伊賀ノ權ノ守橘成忠の女と戀をしたが、事顯れて父成忠の爲めに妨げられ破鏡に終つたと云ふ說も有る。その歌集は多く晩年の作を存したるが爲めに、代作と題詠以外の戀歌としては、次の數首を傳ふるに過ぎない。

人に物云ひ初めて

通ふべき心ならねば言の葉を然りとも分かで人や聞くらん
　秋の夜、鷄の鳴くまで人と物語して、歸りて
有明の月ぞ夜深き別れつるゆふつげ鳥や空音なりけん
　冷淡く成りゆく人に
今更に變る契と思ふまではかなく人を賴みつるかな
　冬の夜、荒れたる所の簀子に尻掛けて、木高き松の木の間より隈無く洩りたる月を見て、曉まで物語りし侍りける人に
思ひ出づや軒の葱に霜冴えて松の葉分の月を見し夜は
　人に後れて、佛事など營むに
知るべして跡問ふ甲斐も無きものは誰も涙に迷ふなりけり
　亡き人を弔らひて
後れゐて跡問ふ法の勤めこそ今ははかなき名殘なりけれ
夜もすがら雨も涙も降るものを何ど歸り來ぬ別れなるらん
是等の僅かなる歌より兼好の戀の事蹟を揣摩する事は難いが、とにかく是等の歌は一人の戀人か二人の戀人かに就て、その戀の初を歌ひ、破れたるを歌ひ、また其戀人の死を歌つたものである事は想像せられ

る。塚本哲三氏が其力作である「徒然草の研究」に於て、「深草に通ひし頃、暁、碪を、衣打つ夜寒の袖や露けからん曉臥の深草の里」と云ふ一首を舉げられたのに、兼好と歌の讀み方を異にせられてゐる。それは東人の許に通うたと云ふ意味で歌では無い。兼好と東國の理由かであつたか、四十歳以前に東國へ旅行した。其れは後年出家して再度の東國旅行をした時、

武藏國金澤と云ふ所に、昔住みし家の甚く荒れたるに泊まりて、月明き夜

古里の淺茅が庭の露の上に床は草葉と宿る月かな

と歌つてゐるからである。兼好の出家したのは四十二三歳の頃であらうと云はれる。四十二歳は兼好が文雅の上に親しく仕へまつた後宇多法皇の六月に崩ぜられた年である。「吉野拾遺」に、出家して數年後の兼好が紀伊の玉津島神社に詣でた時の事、著者松翁が吉野に訪ねて對話した記事が有る。其初めに、

兼好法師が玉津島に詣で給へるとて、尋ねまゐらせしに、往時遠く契りける中なりければ、いと嬉しくて、昔今の物語しけるに、故法皇の和歌の道に深く思し入らせ、御情の淺からせ給はで、かしこき御影と成らせ給ひし悲しさのままに、世に長らへて、經べき心地さへ有らざりけらし「せめての道る方無さに御後の世をもと思ひ給ふるままに、斯かる姿と成り侍れども、露の命の消え難くて、斯からん世を目のあたりに見ることよ」と袖を絞られけるに云云。

と書いてゐるのを思ふと、兼好の出家は法皇に永訣し奉つた哀傷が一つの重要な誘因となつたであらう。

是れは既に世の「徒然草」研究者達が云ふ所であつて、我我も同感するのであるが、我我は別に今一つの誘因が有りはしなかつたかと想像する。「歌集」を讀むと、兼好は後二條天皇の皇子にして、後醍醐天皇の皇太子である邦良親王にも愛重されてゐる。即ち「歌集」に「先坊」と有るのが邦良親王である。親王は後宇多法皇の崩御に後ること二年（一三二六・嘉暦元年・三月）に薨ぜられた。その哀傷に堪へずして多くの官人が同時に出家した。兼好の出家も此時に行れたのでは無かつたか。「歌集」に由ると、

　本意にも有らで年月經ぬる事を

憂きながら有れば過ぎ行く世の中を經難きものと何思ひけん

習ひぞと思ひなしてや慰さまん我身一つに憂き世ならねば

と詠んでゐるから、その出家は法皇崩御の年では無く、二年を經たかも知れない。それから二年後に邦良親王の薨去に遇ひ、重ね重ねの哀傷と我身の寄るべ無さとに、いよいよ出家の志を決行したかも知れない。

　世の中あくがるる頃、山里に稻刈るを見て

世の中を秋（厭）田刈るまで成りぬれば露も我身も置き所無し

　世を背かんと思ひ立ちし頃、秋の夕暮に

背きては如何なる方に眺めまし秋の夕も憂き世にぞ憂き

と云ふ一首は、とにかく其頃の作である。出家に際し、俗名の兼好を其儘音讀して法名とした。僧と成つて以後の兼好は、「徒然草」に出る如く、初め叡山の横川に住み、その西麓の修學院に住み、其れより信濃に行脚して、木曾に暫く草庵を結んで住んだ。「吉野拾遺」に次の歌が有る。

一年木曾の御坂の邊りに流浪し侍りし時、山の立ちずまひ、河の清き流に心留まり侍りしかば、此處にぞ思ひ留まりぬべき所にこそ侍れとて、

思ひ立つ木曾の麻衣淺くのみ染めて止むべき袖の色かは

と詠じて、庵を引き結びて暫し住みしに、國の守の鷹狩に人數多具し給ひて山深き庵の邊までいまして狩し給ふ樣のあさましく罪深かりければ、

此處もまた憂き世なりけり外ならば思ひしままの山里もがな

と捨てて侍りし。其れより何方に心を留むべくもあらずと思ひ取りて、故里に立歸りて侍れば、世の中の亂れける程に、唯だ和歌を作ひとして心を澄まし侍らんより外は有らじと思ひ侍るにこそ。

木曾より京へ歸つた兼好は、歌を以て貴人社會に尊敬されながら、一時は洛西の雙が岡に草庵を結び、其れを終焉の地と定めて住んだ事も有つた。彼れが後の徳川時代の文人に「雙が岡の粹法師」などと云はれるのは是れが爲めである。「歌集」に、

雙が岡に無常所設けて、片端に櫻を植ゑさすとて

契り置く花とならびの岡の邊にあはれ幾世の春を過ぐさん

山里の住まひも漸う年經ぬる事を

寂しさも習ひにけりな山里に訪ひ來る人の厭はるるまで

右の歌の「習ひ」に「雙が岡」の「ならひ」が懸けてあるから、是れも同じ草庵の作であらう。さうして決して寺院の遁世者で無く、「厭はるるまで」の訪客が絶えない。その日常生活も一衣一鉢の窮乏した境遇に住つたので無く、父祖より傳へられた遺産に由り、簡素ながらも居を隨處に營み、童子をも使用し、意に任せて旅行にも出で得たのである。また彼れは洛東吉田の感神院にも關係して居た。是れに由つて「吉田の兼好」とも稱せられる。兼好が「よねたまへ、ぜにもほし（米賜へ、錢も欲し）」と云ふ語を句の首尾に於て、頓阿の許へ、

夜も涼し寢覺の假庵手枕も眞袖も秋に隔て無き風

と云ふ歌を贈り、頓阿もまた「よねはなし、ぜにすこし（米は無し、錢少し）」と云ふ語を句の首尾に置き、錢を添へて、

夜も憂し妬く我が夫子果ては來ず等閑にだに暫し訪ひませ

と云ふ歌を返したのは其頃の逸話である。兼好はまた「歌集」に由ると、但馬の溫泉へ旅行したり、大和の初瀬に詣でて紅葉を賞したり、再度の東國旅行を企てて、相摸の武藏に暫く杖を留めたりした。彼れは

其れより京に歸つて、南北兩朝の世變に逢ひ、親しくした君臣の二方に分裂したのを目睹して、果も無き哀痛に打たれた。此事は前に引いた「吉野拾遺」の文中に「斯からん世を目の邊りに見ることよと袖を絞られける」と云ふ一節に於ても知られるが、「家集」に、「世の中、有りしにもあらず移り變りて」、「世の中危ふきに聞えしも、程無く立ち直りしかば」、「友だちの來て、世の有りにくき事など語るを聞きて」などの詞書が散見し、

月に向ひて思ひ續けし

風さそふ竹の端山の秋の月のどかに澄める世こそ知らるれ

と云ふ歌などが有るのは、此哀痛の一端を洩したのである。但し「徒然草」に、建武三年以前に成つた上卷にはともかく、下卷に此哀痛の跡の全く見えないのは、「枕草紙」の作者が藤原伊周一家の非運を叙するに忍びなかつたのと相似た心理であらうか。兼好が晩年に伊賀國に赴き、國見山の麓、田井の庄に草庵を結んで住んだのは、北朝の曆應三年、南朝の興國元年、（一三四〇）に伊賀守橘成忠に招かれたのだと傳へられる。其れに因つて想ふと、成忠が其女と兼好との戀を妨げたと云ふのは誤で、其女は早く死別したのであらう。前に擧げた兼好の哀傷の歌は其女の喪に籠つて居た時の作で無からうか。兼好が伊賀の草庵に於ける歌は「家集」に見當らない。強いて云はば、

何事も程あらじと思へば

憂き事も暫しばかりの世の中を幾程厭ふ我身なるらん

何方にも又行き隠れなばやと思ひたから、今は身を心に任せたれば、なかなか事足りて過ぎ行く。

背く身はさすがに安きあらましに猶山深き宿も急がず

と云ふ類の歌が其れで有らうか。斯くて兼好は足掛十一年の間伊賀に住んで、北朝の観應元年（南朝の正平五年、一三五〇）に六十九歳を以て彼地に歿した。北朝の崇光天皇は兼好に權大僧都を追贈し給ひ、また其墓を田井の庄に築かしめられたと傳へられる。

一、さて「徒然草」及び「兼好法師集」の編纂の由來に就いて、「崑玉集」は次の如くに書いてゐる。

兼好法師の「徒然草」は、其世には知る者無かりしを、童命松丸、今川了俊の許に仕へ在りしに、「兼好若しや作物や有る」と問はれしに、「書き捨てられし藻塩草、多くは庵の壁を貼られて候ふ。此處にも形見にもと貯へ申し候ふ」と語りければ、「其れ尋ねさせよ」とて、吉田の感神院へは命松丸を遣はし、伊賀の草庵へは、從者伊與太郎光貞と云ふ者、歌の志ありとて、歌の集は伊賀の草庵にて漸う五十枚ばかり集め、「徒然草」は吉田にて多く壁に貼られ、或は經卷などを寫せる物の裏に書き有りしを取りて來ぬ。其れを了俊、命松丸など取り揃へ、命松丸の許に有りしをも、また二條の侍從の方に詠み交されしなどをも求め集め、歌の集一冊とし、また草紙「徒然草」二冊とせり。

右の文中の今川了俊（一三二五「正中二年」——一四二〇「應永廿七年」）は名は貞世、駿河の國守にし

て足利氏に仕へ、後に薙染して了俊と號した。武將を以て文筆を善くし、和歌、連歌を作り、「今川壁書」、「落書抄」、「落書露顯」、「今川雙紙」、「九州合戰記」、「言塵集抄」、「難太平記」、「道ゆきぶり」等の著が有る。また命松丸は兼好が出家の後、京に於て召使つた二童（一人は寂寞童）の一人である。此「崑玉集」の記事は「徒然草」の編纂に關する唯一の根據であつて、了俊と命松丸の協力に成つたのは事實であらうが、「徒然草」の本文には、自ら脈絡の通ずる所があつて、壁に貼られたりしたものを寄せ集めたとは想はれない。わざと書を神祕奇珍にする後人の誇張が加はつては居ないであらうか。士肥經平が「上卷は萬里小路の內裏を今の內裏と書きたり。この內裏は建武三年正月に燒失せしかば、建武三年より以前に書きたること明かなり。また下卷は藤原公明を大納言と有り。是れは建武三年五月に大納言に補任ありし人なれば、此下卷は建武三年の夏より後に書きしことと知られたり」と云つたのは一應首肯されるが、同じ人が、上卷は雙ケ岡にて書き、下卷は伊賀の山莊に於て書いたと云つたのは、金子元臣氏も云はれた如く「さし過ぐしたる議論」である。伊賀に於て書いた痕跡は少しも無い。唯だ出家後、南朝の元弘、建武、延元に跨る八九年間の中の、建武を中心とした前後の二三年、兼好が五十一歲から五十三歲ぐらゐの間に書いたものであらうと直感される。

一、兼好の時代は武人が權力を擅にし、皇室の式微は勿論、道德、學問、藝術、經濟、何れの方面より見るも衰世であり亂世であつて、積極的創新の氣力を闕いて居たから、兼好ばかりで無く、當時の貴人及び

知識階級の思想が保守的、消極的、厭世的に傾くのは已むを得ない時代思潮であつた。兼好が「徒然草」に「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは」と云ひ、閑寂簡素の中に優艶高雅の姿を自ら求めて、其れを意に味はうとした心持は十分に首肯されよう。同じく隠者である「方丈記」に比べて「徒然草」は餘りなる「くよくよ」した色調であらう。兼好は積極的で無い時代の習として仕方が無いと見て行けるが、兼好がとしての精神は、すこぶる積極的で、ここに至つて一貫してゐるといへる。兼好、兼好とする者、古代趣味、並に平安朝中期の文藝趣味時代の精神に憧れた。しかし又これを當時の時代に復興し得ないのを見て、其れをはかなみ、時代に適した消極的な、出世間の精神に安住しようとした。當に當時に東町時代的の趣味と傾向とを有つてゐる點は此に言ひ盡される外は無かつたのであらうと思はれる。大正、昭和の時代と同じく、文藝の變化が、時代的思潮と精神とを有する上に、自己の個人的文化を大に見る時であると見做さなければ、中世の思潮に動くも、出世間主義と共に、あまりに宗としない。

一、兼好は、平安朝末の傳統、消極的な趣味の多いのに拘はらず、實質として一派の文學を成し得たのは、尠くとも其の南北朝時代に掛けての著しい特質と云ふべく、其の當時の有識者も少しく觸れた如く、其の當時平安朝文藝に立つて當時の簡素にして而も高雅なる文であると、室町時代に入り「徒然草」の評價は低くなり、江戸時代、殊に元禄頃に至つて漸く其の文藝的價値を評價せられ、其の頃から「大臣然草」、更に近世の「徒然草」、「花月草紙」等「徒然草」を模倣した作品を幾つも見出し得る程で

へるべきものとして、愛好の對象と[illegible]にせよ、人間に背を向け、閑寂清樂を喜び、[illegible]「徒然草」は[illegible]愛讀せられるであらう。

一、[illegible]國學、漢、佛、老、莊[illegible]「徒然草」に[illegible]も多大の[illegible]ろう、[illegible]にせよ、すべて[illegible]著された[illegible]あ[illegible]は[illegible]識の[illegible]人間の[illegible]る如きは彼れの眞實であり、しかも彼れが[illegible]難し[illegible]たつて、[illegible]

一、[illegible]

り見れば共に凡庸なる保守的作家たる事は其師の冷泉爲世に等しい。恐らく他の二人も同樣であつたであらう。當時には歌人政治家として異材を有した藤原爲兼（タメカネ）（――一三三二「元弘二年」）が有り、同じく藤原定家（サダイヘ）（一一六二「應保二年」――一二四一「仁治二年」）の後裔として歌學の統を承け、新說を唱道して爲世の保守派に對抗した。其政界に於ける失脚に引いて其歌風を廣くするに至らずして止んだが、伏見、後伏見、花園父子の三天皇は彼れの歌を愛重せられ、特に花園天皇は御自撰の「風雅和歌集」の序に於て彼れの歌風を張揚し、また「宸記」に於て屢彼れに對し近代無雙の歌人と激賞せられた。然るに保守的な兼好は爲兼の歌學に由つて毫も動く所が無かつた。但し兼好には何れをも容るる趣味上の雅量と批評眼が有つたらしく、「歌集」に出ると、爲兼の家の歌會にも加はつてゐる。

一、兼好の長所は、何よりも趣味の廣くして纖細なる所に在る。其れは前人の開拓したる所の趣味を一身に集めたので、特に兼好に由つて發見されたと云ふ新味には乏しいが、其れだけに何人にも同感される普遍性、中庸性の趣味である。併し「徒然草」には往往詩人の敏感よりして發見された趣味も無いとは云はれない。郊外へ出て廣い所で見ると雲の動く氣色が早く感ぜられると云ふやうな、誰にも氣が附き相で閑却してゐる事を、折折兼好は敎へてくれるのである。いろいろの人事に氣が附くのは老境の人の通性であるが、兼好は其れに就いて特に趣味を感じ、詩を其中に見出さうとしてゐる。「徒然草」一卷は其意味で隨筆集と云ふよりも散文詩集と云ふべきである。

一、兼好が足利尊氏の執事高師直の爲めに、鹽谷高貞の妻に送る艶書を代筆したと云ふ說があり、此事に由つて非難される。但し家中の賴山陽は長崎丸山の娼家に寄食して艶詩を附けさせられたと云ふ。時の權家で東國育ちの野人である師直の依頼を斥けかねて、出家詩人の輕く興ずる心持から、或は兼好が是れを引受けたかも知れない。さりながら、先人の研究に由れば、師直が其妻を得ん爲めに高貞を殺さうとし、高貞が妻と共に京より出雲に出奔した時、兼好は既に伊賀に移つて居たと云はれるから、無稽虚妄の說たるは明かである。

一、御物の「徒然草」の書寫者たる光廣は、德川初期の堂上文人である。姓は藤原、日野氏の庶流、父光宣は従一位准大臣。光廣は早く細川幽齋（藤孝、一五三四「天文三年」——一六一〇「慶長十五年」）に歌を學び、古今傳授を受け、また父よりも家の歌學の秘傳を傳へて能書の名を得た。慶長五年（一六〇〇）師の幽齋が石田氏に味方し、德川氏に抗して、丹波の田邊城を死守したる時、宗家門人に相傳したる「古今傳授」の箱傳を八條の宮智仁親王に奉り、また後陽成天皇に「廿一代集」を獻じたが、同時に弟子たる光廣に「草紙十二帖」を遺つてゐる。此時朝廷に於て、神道、歌道の秘訣奧旨の斷絶するに至る事を憂ひ、勅命を以て其圍城を幽齋に諭されたが、其勅使として使命を果したのは廿二歳の右大辨光廣であつた。後、慶長十四年、光廣卅一歳の七月、後宮の女房との間に起つた風紀事件に由り、大炊御門賴國、猪隈教利、花山院忠長、飛鳥井雅賢、難波宗勝、中御門宗信、德大寺實久等の諸臣と共に罪に坐し、各遠

島の刑に處せられたが、光廣と資久とは特に罪の輕きを以て宥免せられた。其れより官も昇進して正二位權大納言に至り、寛永十五年七月十三日、六十歳にして歿した。諡號は法雲院。博識多能なる資質の人で、和歌、狂歌、俳諧、書畫の外、「竹齋」「仁勢物語」其他の文學的著作を遺した。また家に父祖傳來の書を多く藏し、洒落奇行の人として逸話にも富んでゐる。今の伯爵烏丸氏は其後裔である。

徒れ〳〵草　上

徒れ〳〵なるまゝに日くらし
すゞりにむかひて心にうつりゆく
よしなし事をそこはかとなく書
つくれはあやしうこそものくるお
しけれいてや此世にむまれてはねか
はしかるへき事こそおほかめれ御
門の御位はいともかしこし竹の園ふの
末葉まて人間の種ならぬそやん
ことなき一の人の御有様はさらなりたゝ人も舎
人なと給はるきはゝゆゝしと見ゆ

むまごまでハはふれにたれどなほなま
めかしそれより下つかたハほどにつけつゝ
時にあひしたりがほなるもみづ
からハいみじと思ふらめどいとくち
おし
法師ばかりうらやましからぬものハ
あらじ人にハ木のはしのやうに
思はるゝよと清少納言がかけるもげに
さることぞかしいきほひまうにのゝ
しりたるにつけていみじとはみえず
増賀ひじりのいひけんやうに名きゝ
ぐるしく仏の御をしへにたがふらん
とぞおぼゆるひたふるの世すて人ハ中
々あらまほしきかたもありなん
人ハかたちありさまのすぐれたらんこそ
あらまほしかるべけれものうちいひ
たる聞にくからず愛敬ありてこと
ば多からぬこそあかずむかはまほし
けれめでたしと見る人の心
おとりせらるゝ本性見えんこそ

に如し　ちるべくもあらざらむ花をさそ
れつきしくぬにも賢より賢ひとつの
うつさばうつるものかはられはやら
で知人もなくまぬがれぬまじくかくすも
親のゆくはげある人ともちかよりて。
およずけさせるおひたちがたき
あかぬまことはおもふし学文のさは
文和歌管絃の道又手跡などのたぐ
人の読むところのみしるべくなし。
ゑまでつゞかずぞありがたき事なお

○

めし／＼て猶手をりつゝおしうまる
ものゝふにあらぬものにはよくしれ
いましくひとかたの政をも
わきまへ民の撫国をそこなはしむるをもさる
ほよろづの事をよく治めしていみ
じ。思ひ合すべき事をまゐらする人こそうら
てみなふところあるく見ゆれ衣冠・車馬
車にいたるまで。すでに生れたるひくく用
ゐ。華麗をもとむる事はれしとぞ
九条殿の遺誡にも侍る順徳院乃禁

中頃よりも都へのぼりておもひや
けの御すがた物ハなよらかなるさまして
よし みだりあしくもなく候き
○若きおとこいみじくも色このみけん男
ハいとほうぐしく〳〵色好危険当世を
あくちぞへ〳〵〳〵のおもひ素より
はぢかましおもひあり〳〵親の心のうちの
そしりをもたゝむかひしあなしあらん
さきざきに思ひみだれはうち〳〵泣がちに
おもひ夜ごとに〳〵おりしくあかせ
とてかくるゝにゝはひゝとのをはあく
でめぐりやかくすおもひはまたいかにおもう
あくまかしらの宿のなさけあき
○後若世の事いかにわすれずも恋の道
うらみうらみのまくろまくし
○不幸に逢ひてそゞめる人のかなしくゝ
ろしきち涙をおもひきりて思ひとうち
るにはあとでこれらなるを門にしこ
めぐまつりしもなくしなしとしる
けるあくにあらすかし顕基中納言

のいれんん飯に昔月罷まくてかへん
るうさと覚へぬへし
○ かうもりのやんごとなきうらみをおもしろく
て尊敬するかたんすも手とつふ物の
くるまん。お中書王九条左大臣殿も
御へり。廉義公も手孫おいぬぬえよく
国光左大臣みなぞう孫んるまなかへれ
伝ふ。来孫きまくれ在へるいまろ米手也ゝ
ずせ孫の尊乃出孫まいうろ。重陽
太子の御墓なかまくつるを孫なふ時も。
あくを承りのしこそいて手孫あらく
ともし思ふやや伝かはるや
○ あはし野の露をゆる。時なく。省高山
芸畑ち市くそのみ住まゐるあつひ
あるかいるし物おあはきもあつれん。無
はかなき本すいみし人ん。前ある物
を見るれんばかなくし さいなし。まず
おふのゆふべをまち。夜のおもおも秋を
たくぬもそでろし。はくくぐと一夜
なくくまおいをとすま去とあるうのど

けしや。あかずをしと思はば千年を過
ぐすとも一夜の夢の心ちこそせめ。すみはてぬ
世にみにくき姿をまちえて何
かはせん。命ながければはぢおほし。
ながくとも四十にたらぬほどにてしなんこそ
めやすかるべけれ。そのほど過ぬればかたちを
はづる心もなく人にいでまじらはん事を
おもひ、夕の日に子孫を愛して、さかゆく末を
見んまでの命をあらまし、ひたすら
世をむさぼる心のみふかく、物のあはれ
もしらずなりゆくなんあさまし
○世の人の心をまどはす事色欲にはしかず。
人の心はおろかなる物かな。にほひなどは
かりのものなるに、しばらく衣裳に
薫物すと知りながら、えならぬにほひには
必ず心ときめきする物也。久米の
仙人の物あらふ女のはぎの白きを見て通を
うしなひけんは、まことに手あしはだ
へなどのきよらに肥あぶらづきたらんは

かけ色なくとみださまあらんかし

○世ハ錢金までにくらん毒し人のゆめにつ
べかりし人の哀やいハなけれバものいはざる
なりけれにこそむかしにはあるまじ
こゝろふしれてうちあふれずとも人の心な
おのとりくずへくめぐらうちとけざりしまま
渡はあやをむすび——とも思ひしら
まことに替へくもあくぬかたふかき心まゝへ
——のふハたゞ名どおもふハゆへあるか。
京よりハ妻若菜遊ぶが根ゆるく

源氏ばかりハ蕃の樂欲おほし——といふ
ぞ落歌話——つへ一言とゆる
とそかのおもひ破れつゝゆめが老のく
ぞ老るるものちから智あるも思ひける
もらおもほうしてみゆる。ほれハあめの髪
またちなきハ細工ハ大象もようくつまで
がきぬめりハ気なるらしいふるく泥まみる
終ありは秋来ぬ。のち——すゝむといふ
つかへ侍るみづからいましめつゝおそる
べくつ——おハ戒いはまたてや

○家居のつき〴〵しくあらまほしき
こそかりのやとりとは思へと興ある
物なれよき人ののとやかにすみなし
たる所はさし入たる月の色もひときは
しみ〴〵とみゆるそかし今めかし
くきらゝかならねと木たち物ふりて
わさとならぬ庭の草も心あるさまに
すのこすいかいのたよりおかしくうち
ある調度もむかしおほえてやすらか
なるこそ心にくしとは見ゆれおほく

のたくみの心をつくしてみかきたて唐
の大和のめつらしくえならぬ調度と
もならへおき前栽の草木まても心のま
まならすつくりなせるは見るめもくる
しくいとわひしさてもやは長らへ
住へきまた時のまの烟ともなりなんとそ
うち見るよりおもはるゝ大かたは家居
にこそことさまはおしはからるれ
後徳大寺大臣の寝殿に鳶ゐさせし
とて縄をはられたりけるを西行か見て

て鶯のなくくんに何ともなきるしかる
べき比も此頃はいつはりかすみにてそのく
たいよりくはいかなるやらん陵小路
女のおりしまする小路どの辨のいつぞ
御紬はひらきかなしのはかなさめし
嵐ひぞくれ帰しに深川の鳥の哀れ
あくの我もふ様なりけれは覚しら
あしわ百舌とて古人のかなし
こうさていみじくこそは覚へしか。
海老も中の何も帰ゆくへの伝なん

○神無月の比。栗毬のいと哀にて
ある時里のぶつ文の節に伝し言に
ある昔のおもうはかにふみ行きてはおもろ
くまみあし蘆花の菊の葉に
うつろひの翳の春くあまで後の
まるるふ秋あし。闌伽棚の蓼の葉
あぞおもしろ。稀との臣をも人
のあれはあるべし。とてもあかれ
よしあしは道に見る都の庭の
みなりきの松の枝むかく

るがまはりをきびしくかこひたりしこそすこしことさめて此木なからましかばとおぼえしか

○おなじ心ならん人としめやかに物語してをかしき事も世のはかなき事もうらなくいひなぐさまんこそうれしかるべきにさる人あるまじければつゆたがはざらんとむかひゐたらんはひとりある心ちやせん。たがひにいはんほどの事をばげにときくかひあるものからいささかたがふ所もあらん人こそ我はさやはおもふなどあらそひにくみさるからさぞともうちかたらはばつれづれなぐさまめとおもへどげにはすこしかこつかたも我とひとしからざらん人は大かたのよしなしごといはんほどこそあらめまめやかの心の友にははるかにへだたる所のありぬべきぞわびしきや

ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞこよなうなぐさむ

かざれる。文は文選のあはれなる巻々。
白氏文集。老子のことば。南華の篇。
此国の博士どもの書る物も。いにし
へのハあはれなる事おほかり
○和歌こそなほおかしき物なれ。あやし
のしづ山がつのしわざもいひ出つれば
おもしろく。おそろしき猪のしゝも
ふす猪の床といへばやさしくなりぬ。
この比の歌は一ふしおかしくいひかなへ
たりと見ゆるはあれど。ふるき歌どもの
やうにいかにぞやことばのほかに。あはれにけ
しきおぼゆるハなし。貫之が糸によ
る物ならなくにといへるハ。古今集
の中の歌くづとかやいひつたへたれ
ど今の世の人のよみぬべきことがらとハ
みえず。其世の歌には。すがた言葉此
たぐひのみおほし。此歌に限りてかく
いひたてられたるも知がたし。源氏
物語には物とはなしにとぞかける。
新古今には残る松さへ峰にさびし

きゝ八つ上をすりふかきかはせしにほ
こしらげうちかりけるを見ゆらん。
けれどもかうるも。最様判のはよろし
まよし沙汰あつて。後宴仕度す
遊し修下されたるよし。御文給
記すはつくり。歌のとのいすし
へりゅゝふ好ずてふるとあれども、さ
や今もよみあへるかとし羽二の桃も。
むかしの人何よめるは時くに。おなじ物
そうあるは。やまとすなかりして。

海のきよの舟ろ　あやしきものかくみゆ。
深草御前の野　曲れ、らら際に飛ひ。
あれは吉ろうかなかわ　昔の人は
さびはうりいりてそれにやくさむ。
○落ひみし　愈出に程るへし　や
いつくまあれ。吉野し　猶ふちたつるに飛る
めさむるいちとれぬおれなにこそうしこ
でんあかぎ。あきまびこる一ぷ。沙里なずかいはゝ
やすきれるすのそぞあおかゝら都へしよか
もとふまて文やる。その中ゝの事　後回

事わするななどいひやるこそをかしけれ。
さやうの所にてこそ萬に心づかひせらるれ。
もちたる調度までよきはよく。
能ある人かたちよき人も。常よりはをかしと
こそみゆれ。寺社などにしのびて
こもりたるもをかし

○神樂こそなまめかしくおもしろけれ。
おほかたものゝねには笛篳篥。
常にきゝたきは琵琶和琴

○山寺にかきこもりて佛につかうまつる
こそつれづれもなく心のにごりも
きよまる心ちすれ

○人はおのれをつゞまやかにし。おごりを
退けて財をもたず。世をむさぼらざらん
ぞいみじかるべき。むかしよりかしこき
人のとめるはまれなり。唐土に許由といひ
つる人は。さらに身にしたがへる貯へも
なくて水をも手してさゝげて飲
けるを見て。なりひさこといふ物を人の
えさせたりければ。ある時木の枝にかけ

くちなるが風にやつれてあはれなる事なれど
うしのおもしろさはまことにいまゝのあはれ
かげさびしくて此ごろのみおもほゆ。いかばかりかおかしき
うち添しかりたる時雨は冬の月に袁
あはれて一葉つゝあかりけるを夕まぐれ
またひとしほおもむきおほゆるこそその
人のこゝろざしみじくおもへばさびしき
しのびやかに世すまひなるべしとおぼえて
の人はいかにもつらからめ

○萩のうつりかはる露ものなり

萩すゝきものゝあはれは秋ぞまされと
人ごとにいふめれどいかにもはづかしく。
今一きはこゝろうごくは春の景色
にこそあめれ。鳥の声などもことにのどかなるを
おに萬ずのどやかなる日影に
垣根の草もえいづるころより漸やゝ春ふかく
霞わたりてなにもやうくをかし
ふつかごろあれおもしろき風うち
つゞきてちるあはれたくしもちかき
野の青葉はまかりはやでもかつこつみたらい

ばのこずゑやます。もとらばなほなるは
すゞし夏は。また林のうちにぞいすし
へ稚子もたちてかこひしうらまれ
りぞく。紅く山路深きことほどす。暑熱お
つう暑さ深きしるしすゞしきにそ
ゐもそく薄くし。雁江の比。桑乃比。そ
葉の梢添しばし萩りゆくまでことぞ
かあなかきせ人の蕊しさまざまとぞ
ひおおもくれし一つきにはける物なれ。
五月あやめやく比。早苗ところ。水鶏
のたゝくおとにあはれのほの月の比
あやしき夜にゆふがほの白くみえて。
蚊遣火もえあがるあやしきやさ六月彼
又おり。七夕まつりあまのかはらあらし
しれやうく秋雲になるかど。一しお
まてところ。萩の下葉色づくまでわ
さ田のかおもおもかげよりあつめらるるは
秋のみぞあはれなる。又野分の風のあしたにぞ
おかしくまいりて色ばみみな落氏
物語。桃華子なるそのみかまき神

どもおかしき事又と侍るいとゝしく
すゝめおもしろくすゝいのちはかなき
くもゝかゝる雲にまかせて遊び
たまふよしさらにいまはなつかしの鳥羽
の人の思ふべき事もあらじさて冬枯
のくさ花秋はおもしろく ところ
すくなき竹の葉ちる萩咲ちかき
まかりて霜にしろしろきを見すかせり
もよの畑の色つゆもおほし夕顔の庭
の茂みて人とゝろいろさまあるなる。

又ふくあはれなる。遠近よしきものに
しつゝ見ゆる人も聞き月のさむけくす
めるせりあやまのやうにそ。いかにそ我ら
宿に住むよそ鳥の巣やつゝむ春ぞ夜ふ
やんごとなき事ども しとゝ。ま
のいとむさき宿の傍にもおし おと
すなほくさすらいの一歳や。山瀬のま
めぐるつゝもの。春の松のほど
たつのなにかくうきこ。秋ごま
もして。東寺まゐるまで人の心にかたく 此

かれハ河のハあはれおもしろく。月影ハけ
此風のみこそ人ハげにけしくめでたし。岩に
くだけてきよくしるくをちこち波おそくし
岩ある時をもあれば、あるは滝
湘江の東に流れける難人のあらうためにや書
こともおもむけずといふ詩歌も書しこ
ろ哉なむしる錦繡に山澤にあそび
て魚鳥を見けむための字に入りたるも
なく心かきこ中のにほひがよくて
きくれどもあやしげなるへもし

○まことふる世のこそ古りし
やうハ先生はいやしくこそ昔ゆくもの
のあはれとかくみのつくれるうつる
しきうつハ物も古代の海とぞ相りしと
見ゆ古き文の詞もどぞ書およぶべき
なみし。紫だにふる集もにおもしろう
ころもかはりてゆくやまざとに、すこしへい
車もおほかた見ゆるげにおとこそしも
を今やうの人いかにもてあそぶよもあけむ
とうふ豆腐蒟蒻ぞおとりて侍るぞなき

たらあし——きろくやうとうやいきん最勝講
仏聴する三日あるまいつゝきのうとこそいふ
なりうるとりふくらおし——とぞいふある
人おいらもへ——御——

○およろハくる末の世とハいへどまだ丸屋が
神はびくるある在ニ殺生きづかずめでたれば
しのな[illegible]葉[illegible]御。何服。何[illegible]
いみしともまこゆへ——。あやし何に
すまあかり帰き小節。小枝街。言も／
まやゆめくとく——あう直こゆきの体すあ
の後とどとやふあうりみし——人ゞ様。ゑ
御仲我をばういにもし——とうとむやいふ。
みめでたし。上にお使すてるあこえばゞ
ほどハ安。あの諸司の下人どもの。ちらい
どもにお進る就もおの——。さりか定とき
花もまどろうしここに[illegible]居魚るある
おこりし人遠西侍にの錦何あまどさめてゝは
く優なる物なりとぞ。御馬大坂志信
はおおもくれ[illegible]

○前日の晩宮すおし——ますすあかさす

こそ。やさしく。面白き事のかぎりとは
覚えしか。経仏などいみて。なかご。染
紙などいふなるもおかし。すべて神の
社こそ。すてがたくなまめかしき物
なれや。物ふりたる森のけしきもたゞ
ならぬに。玉がきしわたして。榊に
ゆふかけたるなど。いみじからぬかは。
ことにおかしきは。伊勢　賀茂　春
日　平野　住吉　三輪　貴布祢
吉田　大原野　松尾　梅宮

飛鳥川の淵瀬。常ならぬ世にし
あれば。時うつり事さり。たのしびかなし
びゆきかひて。花やかなりしあたり
も人すまぬのらとなり。かはらぬすみかは
人あらたまりぬ。桃李ものいはねば。誰
とゝもにか昔をかたらん。まして
見ぬいにしへのやんごとなかりけん
跡のみぞ。いとはかなき。京極殿・法成寺
など見るこそ。志とゞまり。事変じに
けるさまは。あはれなれ。御堂殿の作りみ

がしせ詠て。座圓おやまをうりし。霊は
ぞうのゝ。清水のこうしろゝ。無乃る
あまて。乃楽すゝとおげしをさし時い
うるさん世尊も。かげわあもはてんとは
あおしてんや。大門念佛堂すぢちう
くやぞてまし〳〵りと一心知乃長南門に据れ
金堂その一ちゝふれあしゝる寺ま
て。見さつるかずもきし。無量壽院
ばかずをるかゝとて残り、ゝる。お六の弘
丸湛けゝふゝくてあるびおりしまい。
行於右闇えの類兼りがく あざ
やゝうし兄ありあまきまれ。法堂
本ども、ほど侍ふめかゝ是もみ、いつかて
らあらんかながわれ名残ぶるあまこいと。
あのづゝうりーずへげるまのゝる。まあれ
どゝ清ぶろなしまる人も那し。申れば
菓子。見はらん無まで をおもれなま菓
てん三絶けりみよるへく名残
○
風も澄あへずうつろふ。人のいまむろし。
おきおし逢月をおもへば。あかし

こやしこゝの露ともろともに黄精は好
ものから。食物のおもふまゝゆく末のひ
こそしるなれ人はわかるゝよりもおもはれてぞ
常しなへ地もれさきは白露のみそのすん
なるかなしかりし。野路のちまたにたかふれ
んぞなさけふ人もなさけかりし。
堀川院御百首に深草の野中に
むかし見しいまは盧根は荒て人なし
ほどよりかすがの薹のみしてさびし
きくしまはる事侍かりん
御園ゆづりの若菜おこなひて。朝
萬葉の侍にやさしき其野をかけて茂
限なういふものかは新院のおほせにや秋
て若菜よまはれけるとや
夜もおほやけのみやつこようすして
坊主なぞなぞちからしくこの世のこと
一こきろかずの上て御幸ありける人
もなかりぞさびしけきこえてかるおろし
みな人まるもあるもありけれぬべき
御園の年けふ表なる事はあるべし。

隠居の御所の内さへ。板敷などはげあ
しらつ様をめぐりて。都のもうすあく
くしし〳〵涙洞寝などもあらうらん。
諸人は気のはうずく太刀。手持ちまでしも
やうまじるる様、——泉

○ しづ〳〵思へば又みづまたもすし〳〵かくの
恋しさのこずもんかなど。人まづまわ
て後。ながききかりそめに。なすと聞ゆ
なき空より立たくや残しなうどしと
且つ夏吉などやりきつる中に。なさ人
のうの命しひ勝の家はげひく承り也
参るなう。たゞあのちゝちまするとしも
ある人の文ださへ〳〵ぬれてばかりなる
おもいつの命とせらんとおもふに。表書
ずつし。身なれし見定などもいもな
かくてのけらびらし——曲なる

○ 人のあはれはとばかり出しをいなし。中陰
若狭ゟ山里などにうつろひて。後ある
くさばおふすあまりあはれぬ〳〵。後話
かゞはおやとあみあへらい給へやくしら

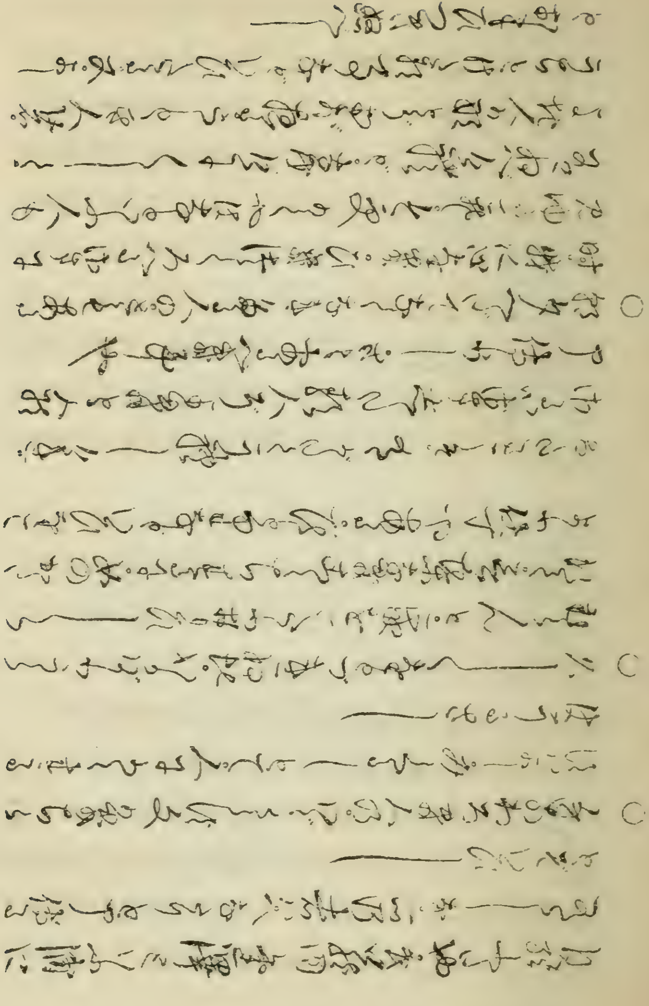
かずおほやくるゝながらずうものゝ音にぬ。
そのかいは情なうくちびるはいふさ
もなく醉ふしこゝにあとびまゝ志たくや。
ちかくすればあつまぬもの知らずて
えかてぞ更にゝな——あるうはおもひ
かる嵐の——らくのこゝはあまのしこ
跡の庭あいはなる事ぞ舎ぞ見るしそゝめ
ばかのさかす何かはとの人の心は恋つる
こゝろおゆき道月へて露わ出かく
すまはめぐもと。去来ハはこす陳しと

いでことあればさはいへど恵まばはかなし
笑ふぬすよしなしごといひてうち
もわらひぬらはらうと北山の中すむ
ゆめて。ゆるべ来はのわすれずつれはゞお
どなし平都繁華昔もの——末来あわ
うづみく。夕の嵐表の月のみぞこと
あふさす つあわ恵る。恋いでく——のふ
人あしんおとこそおしぬるもえ又ずず明く
うちそでやつくふるりの里おまぐい表
さかいおゝふ。ゆるハ跡こふかざもこしね

なりて。去のはしらるけりなかにも物あはれ也。
こゝ猪お谷がまで出羽のぬれしが。あはれなる
ぐさまの濃にあらして物のうくれしよりさ
げし見ぬ身なう。妻戸なども書こて
なましあやて。月見るらしきやかそ
うきこもらおしのば。らら哥しらら
かのし。跡すぐゆかる人へあかはばけりので
れしゝん。うやうのうつにらど絵夕の
いづれまるゝへし。そり漢人おぞなく
うせみりもとも字様なし

○ その西裏にはり出けれて。うらの蝶のよ
まえをうら進むるう。いづくも縁まし
もてまでは進幸ありあちらく成花
ま芸雄の隠は覧して深雅のくし
ぐるの窓に。まちくあちらもまそてぞなて
し。仲ら襟なふみしうかくり。
是は文う我みて。求まておちなき志り
られば。あやまりすまくあなばききすなゆ

○ 甲も家にあらし目のやうなれがちいさき
くにのうは。あまうあがにしそいどで見る



○名利につかはれて、しづかなるいとまな
く、一生をくるしむるこそ、おろかなれ。
財おほければ、身をまもるにまどし。害
をかひ、累をまねくなかだちなり。身
のゝちには、金をして北斗をさゝふ
とも、人のためにぞわづらはるべき。
おろかなる人の目をよろこばしむるたの
しみ、又あぢきなし。大きなる車、
肥たる馬、金玉のかざりも、心あらん
人は、うたておろかなりとぞ見るべき。
金は山にすてゝ、玉は淵になぐべし。利に
まどふは、すぐれておろかなる人也。うづ
もれぬ名を、ながき世に残さんこそ、
あらまほしかるべけれ。位たかくやん
ごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふ
べき。おろかにつたなき人も、家に生れ、時
にあへば、高き位にのぼり、おごりをきはむ
るもあり。いみじかりし賢人聖人、
みづからいやしき位にをり、時にあは
ずしてやみぬる、又おほし。ひとへにたか

りやつさ使ふのがむも。次ゟ至るのあつ。
智恵とハいふこゝろをつくしまどハしさる
學ぶものゝ一にわすれし緣なほつく〳〵思へ
ハおのれを害するハ人のやどするこゝろや。
おむるんぞしる人。其ゟ世にもあまる事じ。
つゝくへきのんぐ文てしみやらで去べし
禮ハ世のはぢ。禮まりのしらぬさんらず
なおつけん。寒いハ又瞰の本やかまん乃
情乃名のこうてあるゝ益事し。是ても
服あも次になるや。ゝとし去ぬく。

音やもとの賢を躬ある人乃為ににげ。
智恵出ゝハ偽あり。才能ハ煩悩甚増
ものるせぞうらんてや学びて去るゝ深
の智ずあるげ。けりきを智とりやべ
言う不可ハ除中いさ遊際ものの善とりふ
まことの人ハ音もなく跡もなく功も
あく名もなし。禮の志の禮のつゞへん。
是徳はのくらし。愚をもとめすしてあら
ず。本より賢愚得失のはらひをなさら
ざいしが世。そのよのひのいきもちらく。名のあ

要をもとむるにのこのこれし。益軒ハ
諸説やこれによりて然常まことは
○法然上人に念仏の時睡りにをかされ
て行を怠り侍る事いかゞして
此さはりをやめ侍らんと申ければ目の
さめたらんほど念仏し給へとこたへら
れたりけるいと尊かりけり。又
往生は一定と思へば一定。不定と思へば
不定なりといはれけり。これも尊し。
又うたがひながらも念仏すれば往生す
さそいふなりこは心を又いふとし
○因幡国に何の入道とかやいふ者の娘
きぬかたちよしときゝて人あまたいひ
わたりけれどもこの娘たゞ栗をのみ
食て。更に米のたぐひを食ざりければ
かゝる異やうのもの人にみゆべき
にあらずとて。親ゆるさゞりけり
○五月五日。賀茂のくらべ馬を見侍り
しに。車の前に雑人立へだてゝみえざ
りしかば。各おりて埒のきはによりたれど

こ[illegible]にんおかくいらこみてへ
の[illegible]しめくる都まむすび
あるゐちの末す。法師のくおりて。氷
おまいくついゐて跡見やあかり。皇つかいお
かくいらう騒て。若ねべきはそう。自ば
さますすみ夜こや。こ哉をかんる人のあ
ざんおあさみく。世の末さ物か哉おく
あやうき枝の上まてや其我いあかて孫
みるんみといふまに涙にふかとさびし
すくに戦ゐお生死の数[illegible]たびきまや

あんみ[illegible]て観念しくねぞ
くくまおなみのおくる事はなれまさや
あるなをとりえしにばおかる人はまた深
にさすこうめ名をあらそふうめといふ
て[illegible]うし[illegible]ろを見るてまてへの
世路へとをし心を将てまびの情おすあ。
う節がのとりかり。誰かは思ひよらばん
さうきぞを。おろのおりえの[illegible]ねこころ
―て曾子あるり名まゐや。人の木石
まあくしいはまりて。物に感ぜざらん

あるは又あらば

○唐橋中将といふ人の子に行雅僧都
とく教相の人のほうに僧正なりし霊
甚上る病ありしに夏のやうにくるしみ
おどろき鼻の中よりむげにて息を出する
うちくれいばはきぐくるしつくろひなき
どこもやうもりしくありて目眉額などまき
りはおどひてうちおこしくは物を
みしま二の舞の面のやうにみえしたる
がるたぐをうる鬼のやうになりて
目いとどあはれにつき額の上鼻
まではなどして。後は頭のうちも人にもも
みしはこもりみて。それからしくありて。
あはれこつくりしにくありて死にけり
うちこの病も又こそみなあまた病

○寿湛僧都は。やう嫌なる
やうやしくしおぼの。奥よりつく
米がちものありて。庭にちりちらしおきこし
若でいへしつへあらはれ
あお痛

[illegible]東下りと[illegible]妻戸の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]してうちつけ[illegible]して机のうへに文を
[illegible]
[illegible]

○あやし[illegible]竹のあみどのうちより[illegible]
かの男の月[illegible]女あれ[illegible]
[illegible]にさしぬき

[illegible]一つ[illegible]
[illegible]あはれなる田舎の
[illegible]稲葉の[illegible]にたちて[illegible]
[illegible]
[illegible]
に[illegible]して[illegible]
[illegible]山のはに
[illegible]
車[illegible]月さすところ
[illegible]人[illegible]

りしますは此ほどに仏事などさぶら
ふにやといふ。御堂のかたに法師どもまゐ
りたり。夜寒の風にさそはれくる
そらだきもののにほひも身にしむ心
ちす。寝殿より御堂の廊にかよふ
女房のおひかぜようゐなど人目なき山里
ともいはず心づかひしたり。心のまゝ
にしげれる秋の野らは。おきあまる露
にうづもれて。虫の音かごとがまし
く。遣水の音のどやかなり。都の空よりは
雲の往来もはやき心ちして。月の
はれくもる事さだめがたし

○公世の二位のせうとに良覚僧正と
聞えしは。極めて腹あしき人なりけり。坊の傍
らに。おほきなる榎の木のありければ
人。榎木僧正とぞいひける。此名然るべ
からずとて。かの木をきられにけり。その
根のありければ。きりくひの僧正といひ
けり。いよいよ腹だちて。きりくひを掘
捨てたりければ。その跡大きなる堀にて

あさましきかな蟷螂のふるまひやんごと
なきするやとゞめて愁を伝ふるとぞ
○老まで皓て道なりせんとす。ことさら
逃ふる米墳。おほくに是も後の人也。
りつくげる子薪をうけて。急にこの世を
去らんと来る時に死ぬ。はじめて逃ぬる
るに。あやまれるにはあらず。されば。あや
まかりて此池の乃ぞあらしに。陸りま
べからず。なゆるし。悲しむ事すべからず
し。さい。うぞきて。去花のしくとのるや
―衆也百ヶ時嫌ふるかれあらんや。人
ハいふ先生は申すゆるすどの
まだ―とめ給て。つゞめまわまるず
其や病ハずの比殺のまこわあうすく。
法具まつとむるにもふかあやらあく候ん。
昔。なくなるひしかハ人まて自他の要る
をいふ時。落て我。今失急の事あかく。
院ふ朝夕にせまれりとく。角をかう
さて念仏しえうみな往生をりをなり。と
評林乃千団仁伝ふ。心靜といひ盡る

聖はあまりに此世のかりそめなることを
思ひて。しづかについゐることだになく。
常はうづくまりてのみぞありける。
○応長の比。伊勢国より女の鬼に成たる
をゐてのぼりたりといふ事ありて。
その比廿日ばかり日ごとに。京白川の人。
鬼見にとて出まどふ。昨日は西園寺にまゐ
りたりし。けふは院へまゐるべし。
たゞいまはそこ〳〵にといひあへり。ま
さしく見たりといふ人もなく。そらご
と云人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひ
やまず。其比東山より安居院辺へまかり
侍しに。四条よりかみさまの人。北を
さしてはしる。一条室町に。鬼ありとのゝ
しりあへり。今出川の辺より見やれば。
院の御桟敷のあたり。更にとほりうべう
もあらず。たちこみたり。はやく。跡なき事には
あらざめりとて。人をやりて見するに。
おほかたあへる者なし。くるゝまでかく
たちさはぎて。はては闘諍おこりて。あさ

かうらなどををがみて。かばかりと
心得て。かたへの人にあひて。年比思
ひつる事はたし侍りぬ。きゝしにも過て。
たうとくこそおはしけれ。そも参り
たる人ごとに。山へのぼりしは。何事か
ありけん。ゆかしかりしかど。神へま
いるこそ本意なれと思ひて。山までは見
ずとぞいひける。少しのことにも先
達はあらまほしき事也

○是も。仁和寺の法師。童の法師に
ならんとする名残とて。各あそぶ
ことありけるに。酔て興に入るあまり。傍
なる足かなへを取て。頭にかづきたれ
ばつまるやうにするを。鼻をおし
ひらめて。かほをさし入て舞出たるに。
満座興に入る事かぎりなし。しばしか
なでて後。ぬかんとするに。大方ぬかれ
ず。酒宴ことさめて。いかゞはせんとまどひ
けり。とかくすれば。くびのまはりかけて
血たり。たゞはれにはれみちて。息もつ

まなびしかおほくのまなびどものやは
くわしきすぢおほえんがためにおぼへ
りまなで。すべきやうなくて三定なるう
のく上手。かくびくらうちきて道をひ
き枝をつゞきて。系なるくはしのかゝ。
ゐたり寄る。さとすがゝ人のあやしみ
思ふる限なし。くすしのもとにさ
しりつてむかひぬうかくんあかはず。
さあらこをやうなかくぬ。勘がへふもくで
まず。声にはきくほこしずかなるへし

いふ文もみしず。傳らふなし。いふなし。と
いへば文化和言へんかくて意しし
考老あるぬきど桃上すよかねてあをし
しめもあまくらんさるも覚へばらく
る都どうあるもめくしふかうらとひ拝
算二相を求ひうすとも扇かはかなず
り生はらん。さかをもてひを明へらで。
二東のしべ標。まりかまは一のてゝかさへ
ぞでゝ類もまるけわひ量くらま拝
算の書うけなゝぬ是まなかぬらき

命まうけて。久しくやみゐたりけり。

○御室に。いみじき児のありけるを。
いかでさそひ出して。あそばんとたくむ
法師どもありて。能あるあそび法師
どもなどかたらひて。風流の破子やうの
もの。ねんごろにいとなみいでゝ。箱ふぜいの
物にしたゝめいれて。ならびの岡の。便よき
所にうづみおきて。紅葉ちらしかけ
など。思よらぬさまにして。御所へ参りて
児をそゝのかし出にけり。うれしと
思ひて。こゝかしこあそびめぐりて。あり
つる苔のむしろに並ゐて。いたうこそ
こうじにたれ。あはれ紅葉をたかん
人もがな。験あらん僧達。いのりみられ
よなどいひしろひて。埋つる木のもとにむ
きて。数珠おしすり。いんことごとしく
結び出などして。いらなくふるまひて。
木の葉をかきのけたれど。つや〳〵物も
みえず。所のたがひたるにやとて。ほらぬ
ところもなく。山をあされども。なかりけり。

うづみなるゝ人乃見さだまらで[illegible]へよりかゝ
らるゝの[illegible]ぬはじめるもなり。法師ども〳〵
のほ[illegible]して。やすらひて。いさかひかゝりて
あんかうなり。あまかうと興あらんや
まうちは。[illegible]あい[illegible]

○[illegible]はりやうハ。[illegible]ますべし。
[illegible]の[illegible]やの[illegible]つき[illegible]
[illegible]ハ[illegible]し
げなし。[illegible]
まなし。こゝまの[illegible]
〳〵ハ[illegible]もあり。[illegible]の[illegible]
はみさむく[illegible]くるし。[illegible]ハ[illegible]
[illegible]つらかさ。見ると[illegible]く。[illegible]
[illegible]もちてよしとぞ。人の[illegible]あれ[illegible]し

○[illegible]しくへだりてあれ[illegible]人の。[illegible]
[illegible]まあかつるゝめずしくう[illegible]なく。
[illegible]つゞくるあまあいるもれべ[illegible]て[illegible]
[illegible]きぬる人も。[illegible]へて見えるはりかうし
わゝめ[illegible]。つぎさきまの人に。あるゝ[illegible]
[illegible]らいでゝも。[illegible]あかつるらすとて。[illegible]

しらぬ人や。ぼにいぼ世ばなれなる。生
死をいでんと思ひけん。ありの真実でう
朝夕君子仕へ。宮殿をへりみるにまみ
孫いさおしうらん。心に縁すれうまてう
つゐものあれば。栄あるまでは道はりじ
がろし。そのうつは物。昔の人は及ばず。山
林にいても縁をとまり。山居は事なく
よくがまでは。あへしれぬかごとまきはせ
苦づらく世俗なさおもろにおそろうもの
よめにふれば。おおらまうらん。ければえて

それたるかなし。ほどわかれば。昨し
うはまでしまど。いりんに。先不乃るすまる。
はまとくまつ居道に入て世をつとめん人。た
とひあかさるをいかにれたる人の貪欲
おほきにするべし。紙の衾。麻の衣。桃の
おうけあつぎの事也。いくばくの人のついへ
をなさん。まもむるにはやまとくをいはすや
く定ぬべし。かならずりづるにもあまりに
さいへど悪すそうの人差すはちゝづく
ものみぞ実なき。人と世をいふまる

しかれば。いかにもして世をのがれんとと
一筋におもひしれ。ひとへにむさぼる
事なかれ。とく〳〵菩提をもねがはん。
菩提の為ならには。いかにやすしや
只今をさしたくん人は。古がしくいに
かくるのおいをりをすしてさすらへ
捉やせん。ぜひしはてるはてぬおそろしく
此の身沙汰してよ。しらく〳〵
るすんの燃やあらん。此素縫ありがたく
やまうしろて。後生もあればあるあれども

る待んでもあらじ。おさいはずしらる
ぬやうに寺と思りんすれは。元来ねる事
のい、とどかさあって。事の法くる服
もある。さしちとるある。べしはなのやう
人がたまかりしいあるきりて諸仏あつ
かしまして。頭は老くめる。ちの命火
あるめぐる人は。去りしとやいふ事を
ふりんとされば、はちなもろいの財
をもちての。たかはるまうし。解は人を
まつ物の先きいまするは。いつる火のや

むまうかと進ろ。のがれがたく成就なる。ちとは春ころ親の恩も忘れはて。君の恩人の情誰のなしとてく。まてはらんや

○高祖號は道親備前とて。やんごとなき智君なりけり。然るに難しけれど此とこのみにておもひなり。僕等が座主らくの。おおやけ蔵修すうずんてもおてひざをもてまぼつらくの人あつ文字もよみならひ。さうらふすあるそのかたせめ二七日あまり藤沼とて経本で思ふず

常々にお尋ねいもかりしくさ見しろひるへ。てもすおおらく今て菊お為をいやしなり。人をくはすふてまをし。たびひものをぞくひなふ常にめいまへしうかなへず。陸道死にお弁す錢二百貫と携ひもうたゆづかろりやるま材石百貫すうやろく。御目見え三百疋をさまずし難の事しと。皆かへて。御奉る人をあづけまいらす。中更つて。守にもちて。手取ば。物なしこしばめし書るおがやうし。又とも用に

まちかねしもまつて。色もあしげなき誠
にかの。三百貫目銀だまりし――家も大
すぐうりなそでのくりしひたる。深にはつ
鐘尋をさい者也足て人やはける。此僧
都ある法師をたのみく。ちうつるかはっき
りふるをつけくるかなるかもの。何れかとの人
のこひたれば。かける物を取もちしば。何ぞ
あらかしゅば。此僧の嗣に似たんとぞ
いひあへる。この僧都みめよくかつよく

大食にて。雑宗学道雑説人にすぐれ
て。宗の法灯。あきらかに寺中をもなげく
おもはれけるが。世のひとくさに
さら曲者にて是非自讃して。大ぼ人
にすぐれと思ひふるまひし。生得しる饗
膳をもまつくはれ。みな人これをへかさ
まさりしば。飯を地にすへぬまどて
かりおなく食して。つひらん訪ぶ事とも
ほいなく。けなふ。と。異形時も人すたる
もしく覚てくりじっわりくひ気がきつ
きうつしを曉にも食て。飯さらにけりしば

毒ものゝ毒こもりて。いかなる大事あれ
ども人皆しらずして。いたづらに目をわかれ
生涯夜もいねず。いなさまおし
てうれへる義あり聊なる事どもあまたあ
御すれども。人にうちとけず。よく〳〵心づかひ
さま〴〵徳のいはれ事となりけりや

○御産のとき臍落するは。ぢゞしさしる
子すでにあらず。御胞衣とゞこほるなど
すじなきや。とくこれをとりやうじすべし
即〳〵ほどよくおこなひてさはりなき

祝ひし。大切に望みて。さだめおはしまし
やうきと宮参の勝手。縁者人数子うみ
ことにゝ子。猶存し。かるなきなり

○疱瘡の流。いはゆる案内しかのし給る
時。院へかのいはる人ゝ。ことにつてとくや
御志ほど毒の御歎

さつきし身の節句もすゞ風もし
ゆかみもー　とう君使おほく見候こい
しく折り〳〵いやましつきぬ御事とかや

○後七日の御修法。武者を尊む事ども

とかや盗人にあひにけるより。宿直人と
てかくこと〳〵しくなりにけり。一年の
相は此修中のありさまにこそ見ゆなれば。
兵を用ん事。おだやかならぬ事也
車の五緒は。必人によらず。程につけて。
きはむる官位にいたりぬれば。のるもの
也とぞ。ある人おほせられし

○此比の冠は。昔よりははるかに高くなり
たるなり。古代の冠桶をもちたる人は。
はたをつぎて。今用る也

○異本 岡本関白殿 盛なる紅梅の枝に鳥
一双をそへて。此枝につけてまいらすべき
よし。御鷹飼下毛野武勝に。仰られ
たりけるに。花に鳥つくるすべしり候
はず。一枝に二つつくる事も。存知
し候はずと申ければ。膳部に尋られ。
人々にとはせて。又武勝に。さらばおのれが
思はんやうに付てまいらせよと。仰られた
りければ。花もなき梅の枝に。一つを
付てまいらせけり。武勝が申しは。

桜の枝梅の枝つかふこと有るともちゐるに
につくる杉楊柳なともつくる。枝の長さ七尺
或六尺。但し刀にてきるべし。枝の末
鳥をつくる。片白なる枝なとする枝あり。
しかし雉鶏の羽の中を二ところ付
べし。昔は鳥にひらの羽の尾をつくべ
てきりて牛の角のやうにはたへし。又
雪の朝にもしたる枝をさゝげて中門
よりまゐりて御所の大みぎりの所に
てひく。雪に跡をつけず。あまたあらば
の毛をかゝしつけて。二株山
鳥の二羽付る。緑をくびける様
ゐるにのそねして去りゆく。又雪
みつそへばとも御前のうしろねがふ乃
雪の上はやさしく。あやまりの毛を去る
ことは。雪はよくこしを下申なきは。
鷹の鳥ありよしある。ーとや
若に鳥つけば。なにはゆ一つの
まことに月ばかりに枝つ候。枝は
雉は付く君の御ためとおるには附し

むかしをとこといふ事。伊勢物語にみえし
らふかうくかなるしかしあるまや

○賀茂の岩本橋本は業平実方なり。
人の常にいひまがへ侍れは一年参り
たりしに。老たる宮司の過しを呼とめて
尋ね侍りしに。実方は御手洗に影の
うつりける所と侍れは。橋本や。なほ
水のちかければと覚え侍る。吉水和尚
月をめで花をながめしいにしへの
やさしき人はここにありはらとよみ
給ひけるは岩本の社とこそ承りおき侍れ
ど。をのれらよりは。なかなか御存知など
もこそさぶらはめとて。いとうやうやしく
いひたりしこそ。いみじくおぼえしか。今
出川院近衛とて。集どもにあまた
入たる人は。わかかりける時。常に百首の
歌をよみて。かの二の社の御前の水に
て書て。手向られけり。まことにやん事
なき誉ありて人の口にある歌おほし。
作文詩序など。いみじくかく人や

○筑紫にゝなにかしの押領使なとゝいふやうなるものゝありけるか土おほねをよろつにいみしき薬とてあさことにふたつつゝやきて食ける事年久しくなりぬ。或時館の内に人もなかりける隙をはかりて。敵襲来りてかこみせめけるに館のうちに兵二人出来て。命ををします戦ひて皆追かへしてけり。いとふしきに覚て日比こゝにものし給ふとも見ぬ人々のかく戦ひし給ふはいかなる人そと問けれは。年来たのみて朝なあさなめしつる土おほねらにさふらふといひて失にけり。ふかく信をいたしぬれは。かゝる徳もありけるにこそ

○書写の上人は法花読誦の功つもりて。六根浄にかなへる人なり。旅のかりやに立入られけるに。豆のからをたきて豆を煮ける音のつふつふとなるを聞給ひけれは。うとからぬおのれらしもうらめしく我をは煮てからきめを

又する鵜舟といへるあり。さら面白くもあ
ぐゝめりしく とまる事とは。殊にいよわかは
ることも有。我らおもはいかばかり堪がたくも遠
ども。力なきわざや。かく面影なりけども
爰にこし見る

○元雁が。清暑堂の御遊に。京上ほう
きすし比。箏琴を弾。牧馬を弾じ
ねはるに座する事し共。柱をゆるがし
れるならればとり斯に待ちて懐に
もくいれまかならぬまてつゝゑまう
なるは。神楽の気る都がすよしひて
ころゆへまうかなかはりのあるを数ちあり
らん。物見る衣のつまのふやてまかれち
てもものおやうになまかたりたるとぞ

○名はやよかやて面影はなしけり離るゝ
琴の音をきゝける時は。天かけて思ひつるやの
明影むる人に形なく袖。昔偲ぶなる
をきゝてもこの比の其人の面影をそこはかとなくぞま
てぞあかれんと覚へ。人もとかる人形の中
にさひようへて面白く。ハ。独道めく覚える

五三

にや。又めでたきおんかたち。いでゝ人世をまもる
なりきも。目にみえぬ物も。かげのかたちにそふ。
ごとくなるのりぞや。すこしもたがはずし
ていつくしみ出しけれどもまことにうやまひ
しかうのするにつけて。おもひかくる思ありや
結ばるゝ物を見るにつけても深く恩のおか
ぎりに帰乃おほきさ。諸佛菩薩仏の教のかげ
きにおもむく石や木のたぐひのなかりける
手を濯ぎおほふ。人をあはれて神のおほせに従ふ
其心善なるゆへあのよしなしごとを見る

ぐるしからぬは。文章の文字にあたりて
世のうつりかはりや。おもしろいあさまし
さや。おもむく度諸国をめぐりあるきまてて
人をも物をもみるにつけても。ますます深く月
まなび。徳をへだてり。やまぶ。いみじき事す
まなぶ事もし。て。学問を学びて絶えぬればや
がて又定まりぬ。道とおもふ物の上をのみ
とどめなすべき。ならびにあしき人のさだめ
しらぬはうるさくに神のごとくさとれ
ども。ときしるべき人に更に信をおこさば

の書物。權者の傳記にのみ信をはる
べき事なきもあらじ。三神、佛陀乃虚言也。
余以に信じたることもおしがたし。ここ
もあらじ。まづいふも愚なれば、夫
ゆゑに深くあやしみて、編
に信をなほすべし。疑ひ断るべくは

○蟻螻とともに草のもとにて東西をいそぎ南
北にわしる。さきあり後あり。老あり
ありなきあり。乃にあり得あり失あり。又
さいふとも秋はあらぬ。春は何ぞや。
生をむさぼりおほをもとめやむ時なし。
夫をうしなひて何をもてかすつべき
やうらぐ老と死とにあわてまどふ。是は
し。人の為にとどまらず。只心にあれ
ど。ほのとのしひもあらん。おもへらものにこ
れをそれさとらば。名利にまよはず。是を
の道をおさめて、さればよし。まことのまる
人はなのこれを出しあはれ。是の化道あらん
ことをすごせて。変化の理をさとらば。

○往来くるすみるいふ人はいらぬかるらん。

まぎのをくるしきく。たゞひとゝ中よあるべし
みあうごまれ。世に志るしがへだにおぼ菩ほ
うまで迷ておぼひやまどく。人はすべしほ
れば三業よそ行やすく從ひて。さまざまに
まよろはあらず。人に酒を飲ませて。あく
うひ二度いうるみ。三度ばまことてかへる
定まるまましくさるみぶりにおこり
て心失や乱時節し。まどひの上に酔ぞ。
酔の中に夢をなす。夢ありていろぶ
りしく。お禮てわきれたる事。人路
めくりごとし。いまだ深のどこと出らば
じき。縁なまれれて声は深いし。いや
はおづからぼしそ心をやまさくちん事う。
報さのしかれぬいれつべくみ。出信
入て法雖言爾未然語緣成やおのおの
こそ摩訶止觀には侍るき

○世の学しぶやつあはおのかわす。喜
もあらて。人おおくりとおくゝめ申す。
ひとり法師のやしひとくりひのたずこ
とる二発き仲くはたらむ。よく見ゆきまはる鐘都

萬の道に心得るよしのさしいらへは
すれ。されば世にはづかしきかたもあれど。
みづからもいみじと思へるけしきかたくな
なり。よくわきまへたる道には必くちおも
く。とはぬ限りはいはぬこそいみじけれ
人ごとに我身にうとき事をのみぞ
このめる。法師は兵の道をたて。夷は
弓ひくすべしらず。佛法しりたるけしき
し。連歌し。管絃をたしなみあ
へり。されどおろかなるおのれが道よりは
なほ人に思ひあなづられぬべし
○法師のみにもあらず。上達部殿上人
かみざままでおしなべて。武をこのむ人
おほかり。百たび戦ひて百たび勝とも
いまだ武勇の名をさだめがたし。其故は運
に乗じて敵をくだく時。勇者に
あらずといふ人なし。兵つき矢きはま
りて。つひに敵に降らず。死を安くす
して後。始て名をあらはすべき道なり。いけ
らんほどは武にほこるべからず。人倫

に遠く禽獣に近きふるまひその家にあらずハ好て益なき事也

屏風障子などの絵も文字もかたくなる筆やうしてかきたるが見にくきよりも宿のあるじのつたなく覚ゆるなり。大かた持てる調度にても心おとりせらるゝ事ハありぬべし。さのみよき物を持べしとにもあらず。損ぜざらんためとて品なく見にくきさまに仕立て珍しからんとて用なき事どもし添へわづらはしくこのみなせるをいふなり。ふるめかしきやうにていたくことごとしからずついえもなくて物がらのよきがよきなり

○うすものゝ表紙はとく損ずるがわびしきと人のいひしに頓阿が羅は上下はつれ螺鈿の軸は貝落て後こそいみじけれと申侍りしこそ心まさりて覚えしか。一部とある草子などのおなじやうにもあらぬを見にくしといへど。

弘融僧都が物を必一具にととのへんとするは
つたなきもののする事也不具なるこそ
よけれといひしもいみじくおぼえし
也すべて何も皆ことのとゝのほり
たるはあしき事也しのこしたるをさて
打置たるはおもしろくいきのぶるわざ也内
裏造らるゝにもかならずつくりはてぬ所を
のこす事也と或人申し侍りし也。
先賢のつくれる内外の文にも章段
の欠たる事のみこそ侍れ

○竹林院入道左大臣殿太政大臣にあがり
給はんに何のとゞこほりかおはせんなれ
ども。めづらしげなし一上にてやみなん
とて出家し給ひにけり。洞院左大臣殿
此事を甘心し給ひて相国の望おはせ
ざりけり。亢龍の悔ありとかやいふこと
侍る也。月満てはかけ。物盛にしては
衰ふ。萬の事さきのつまりたるは
破にちかき道なり

○法顕三蔵の天竺にわたりて。故郷の

てハ人をころさバ悪人也。驥をまなぶハ驥
のたぐひ。舜を学ハ舜の徒なり。偽
ても賢をまなバんを賢といふべし

○惟継中納言ハ風月の才にとめる人也。
一生精進にて讀經うちして。寺法師
の圓伊僧正と同宿して侍るに。文
保に三井寺やかれし時坊主にあひ
て御坊をバ寺法師とこそ申つれど寺
ハなけれバ今よりハ法師とこそ申
さめといはれけり。いみじき秀句なりけり

○下部に酒のまする事ハ心すべき事也。
宇治に住侍けるをのこ。京に具覚坊とて
なまめきたる遁世の僧を。こじうと
なりけれバ。常に申むつびけり。或時迎
に馬をつかはしたりけれバ。遥なる程也。口
つきのをのこに。先一度せさせよと
て。酒を出したれバ。さしうけさしうけ
よよと飲ぬ。太刀うちはきて。かひがひし
げなれバ。頼もしく覚えて。めし具
して行ほどに。木幡のほどにて。奈良法

法師の兵士あまたの白き――てあれこそ
にいば男どもむかひて目ざましき山峡に。
あや――まづさまかへとりひて太刀
をひきぬき人々も法師太刀ぬき矢
なげなどし寄るまゝ興覚房をも
ほてゞうつしいふ破らるゝ者すくなげ
てゆるかし給ふらんとはれぬれば名
ぬくこそぬ。此おとこも覚房に入て
床に帰きゝし給ひつる物おそきのゝ酔
たる侍らず。書き名任らんとするを。

ぬかるゝ太刀むなし――く眠――りたまひつるこ
ゆくいづちにしもひさしぶりに夢おほかれしほど。
さて山ざちみるとのし恋かりけれは。聖人お
こうぞていでてあへば。我こそはじさるとい
でゝ走りゆりて。走せなりける住居あ
まのいしれと身のをかしやおそうもて走なり
ぬ。馬は血つきて宇治大路の中半まり
りつゝ。法師のしくて女のことども。あま
りし雅にしたまふ夏覚房ほとら
あ――為す。にまひむしろをば。求出

てあまた所疵つ。からき命生きけれど腰
きり損ぜられて、かたはに成にけり

○或者小野道風の書る和漢朗詠集
とて持たりけるを。ある人御相傳うけたる
事には侍らじなれども。四條大納言
撰ばれたる物を。道風かゝんこと。時代
やたがひ侍らん。覚束なくこそといひけれ
ばさ候へばこそ。世にありがたき物には
侍りけれとて。いよいよ秘蔵しけり

○奥山に猫またといふものありて人を
くらふなると人のいひけるに。山ならね
どもこゝらにも。猫のへあがりて猫また
に成て。人とる事はあなる物をといふ者
ありけるを。何阿弥陀佛とかや。連歌しける
法師の。行願寺の辺にありけるが
聞て。ひとりありかん身は心すべき
ことにこそと思ひける比しも。或所に
て夜ふくるまで連歌して。たゞ
ひとり帰るに。小川のはたにて音に聞
し猫またあやまたず足もとへふと

とり出し。かくて奴のはしくやせに顔の汗を
まくハ念仏。涙いうをて耳をがん。
まるすま。力もなく兒を。たくはゞ小川へころ
びのて。いまだ来ぬにすきまやくと
さまべバ。夜くうか杢がまくらて。
げ一里よかで。兄まざいおわとがに兄
しれる僧やしほめにとく河の中
よつばゞをおこしいまば。連寺のよる
ものをまて扇小紙をぞ懐に持ちふ
書るまゝをその無。中されし一て大ます
うかさき法まてて。天ふく出ろ一の子
多かれし者ゆゑ天狗くく多様などぬし
を書きて。飛行うか出るとぞ

○吉岡法印はじめしつつ。乙鶴丸。
やまとく殿といふものを去て。常に行
通ひしに。或時生く持来るを法印
いつくへりつるぞと申し。そのやうなどの
ゲか。すのかてはといふを言と雁九ハ。男
の法師ぐを又えみせて袖袂のありけて。
けさはらん。郎をバ見はりしと答や

おもむきのみしゆゑなれ
○赤舌日といふ事。陰陽道の沙汰は
なき事なり。昔の人ハ是をいまず。此比何
者のいひいでゝいみはじめけるにか。此日
ある事すゑとほらずといひて。其日いひ
たりしこと。したりしことかなはず。得
たりし物は失ひつ。企たりし事ならず
といふ。おろかなり。吉日を撰てなしたる
わざの。末とほらぬをかぞへて見ん
も。又ひとしかるべし。そのゆへは無常
変易のさかひ。ありとみるものも存せず
始ある事も終なし。志はとげず。望
は絶ず。人の心不定なり。物皆幻化也。
何事か暫も住する。此理をしらざる
や。吉日に悪をなすに必凶なり。悪日に
善をおこなふに必吉也といへり。吉凶ハ
人によつて日によらず
○或人弓いる事をならふに。もろ矢を
たばさみて的にむかふ。師のいはく。初心の人ハ
二つの矢をもつ事なかれ。後の矢をたのみて

のみて、はじめの矢に等閑の心あり。毎度
たゞ得失なく、此一矢に定むべしと思へ
といふ。わづかに二の矢、師の前にてひとつ
をおろかにせんと思はんや。懈怠の心、み
づからしらずといへども、師是をしる。
此いましめ、万事にわたるべし。道
を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、
朝には夕あらん事をおもひて、かさねて
ねんごろに修せん事を期す。況や一刹那
のうちにおいて、懈怠の心ある事を
しらんや。なんぞ、たゞ今の一念におい
て、たゞちにする事の甚だかたき。

牛を賣者あり。買人、明日その
あたひをやりて、うしをとらんといふ。夜のまに
牛死ぬ。かはんとする人に利あり。うらん
とする人は損あり、とかたる人あり。是を聞
てかたへなる者の云、牛の主、まことに
損ありといへども、又大なる利あり。其
故は、生あるもの死の近き事をしらざる
事、牛既にしかなり。人又おなじ。

らざるに牛は死し。はからざるに主は存ぜり。一日の命万金よりも重し。牛の値鵝毛よりも軽し。万金を得て一銭を失はん人は損ありといふべからずといふに。皆人嘲りて。其理は牛の主に限るべからずといふ。又云はく。されば人死を憎まば生を愛すべし。存命の喜び日々にたのしまざらんや。愚かなる人此楽しびを忘れていたづがはしく外のたのしびをもとめ。此財をわすれてあやうく他の財をむさぼるには志満つ事なし。いける間生をたのしまずして。死に臨みて死をおそれば。此理あるべからず。人皆生をたのしまざるは死をおそれざる故なり。死をおそれざるにはあらず。死の近き事を忘るゝなり。もし又生死の相にあづからずといはゞ。実の理を得たりといふべしといふに。人いよいよあざける。

○常磐井相国出仕し給ひけるに。

翰墨を掛たる本面なれば上座より見べし。馬
よの中わかちなくて本國漢と小讀書す
むし、翰墨をもちるときへ下るし待せ
し来や。つぎの表具して君子清
のふすつは紫とや。さまされば本面を
あれこれ々は。翰墨筆の上書の席。
けんげんを見物あるですつるべし。おもひべ
かくはなくかな

○箱のふたに題をつけるです。以つ
まつけ侍るべきぞと。ある筆勝の人に尋
ければ、軸につかへて表紙をはさみて。
掛顔あれば、以つ進む縁あり。文の紙へ
おもしくは右につけて箱のほ軸につける
も字をかけ事ほどにおほよそうなきある
あるはかみは草あて、うらはみすゆ
ならる人の筆たしかみく付すべし。
おいかいもんかんをかいておくべし

○色紙なつまさは物を貫してすこすふ
此ごは書して、小あたり。風あり。家
掛物には、掛物は小人に財あり。君

手に仁義あり僧は法あり

○たふときひじりの云置ける事を書付て一言芳談とかやなづけたる草子を見侍しに心にあひておぼえし事ども

一 しやせまし せずやあらましと思ふ事はおほやうはせぬはよき也

一 後世を思はん者は糂汰瓶一つももつまじき也 持経本尊にいたるまでよき物をもつよしなき事也

一 遁世者はなきにことかけぬやうをはからひて過る最上のやうにてある也

一 上臈は下臈になり 智者は愚者になり 徳人は貧になり 能ある人は無能になるべき也

一 仏道をねがふといふはべちの事なし いとまある身になりて世の事を心にかけぬを第一の道とす

此外もありし事どもおぼえず

○堀川相国は美男のたのしき人にて そのこととなく過差をこのみ給ひけり

基俊にを大理にまうして。廳務おこなは
かせけるに。廳座の唐櫃のふたあくるし
らでいでゝくだり侍る。いとあやしかりし。件
られけるに。此唐櫃は上古より傳りて
をそれをなしけば數百年をへて累代
の公物古弊をもちて紐換はせよ。魚や
ほころあらはめきこのこ武よし。祇要
の語なかりやりけん。いまはすでにきこえずなり
たる此國は。廳上すへし。求させめしける
すこし九月の誤語をたまはりしたれなりかねてかはね

いふにとて。まいりかいしそのかしける
義人。經右良の節會の内辨はいかにも免簾
れ侍るに。内記の指示宣命をさゝずし
て。堂上をいれに侍りしかはまかりでに失礼に
ほどなかりしもかゝるべきにもあらず。おいそれ
てでられ侍りし。六位内記康綱衣のつ
まの女房をつくらひとはなま宣命をまかせ
て出し侍しを侍りかりしみの早候
甲斐守内大臣光忠のそばに進階の上でおつと
めしけるに。洞院右大臣殿に次第

きや請られし程に。又五郎男なづけと
はるよ。かの才覚はいじらしうのしやれ
あるものゝ又五郎ハ。老身る清十郎。よく
ときり あきらぬ来なるをぞすけける。
返り清屋善作しけりの時。秘をおしれ
てか説(?)なめさきたれいか。次と室しは恵(?)る
が。恍(?)をぬけるべしやはらんとあのびれや
うまつぶやきあるい。と相りうやとや
○大覚寺殿まで。名高の人々。なかなかくをは
りて。とうきはるやうへ。くすし患者参りて
うけはる。信長太閤三公ほど。秘蔵の来
ともみしぬ患者おほかりく。にたる
れたまはる。唐瓶子とてすまで。やくひあ
やうさたきぬぼ。けくうらて恐出てんあ
○甚兵衛(?)やどの人あまたにめのくるるを
あることまで。ほまくくと驚なさるを。
来人と。かくれいなりんとて又ほくあ
の光来るところに。あのびて君おや—
とらに大のよし—くとがむれば。はだ
あらいで。いつくあそぞはかかそあない

揚しろ〳〵あまたにむまれの神だのとおもふ
ずゝいひて。ふらいで姫ゝるに。補も辰も
あづ〳〵しく青みわたりさう。卯月
はやの重なりの。撫子おり〳〵の〳〵打
おりし。やて。楝の木あちこちにあるかつく
翁くやぞ、いま見れば振り帯ぶ
ぬれ屋のに沈残たる雪舟は、いくうこく
あかゝるすは侍し、よひふるゝ車の奏づる
まこなれいく〳〵きくわ里しき此程月はや
うきれば、ちりとまるは、あゝ〳〵好に入がを
逆さまに坐る席子。おみくすもあらず
とみゆる男めこにさげしはまたやの乗て。
撫子のおさゝまあそ。何とくにのあゝんつ
きこえすのし〳〵飛ぬ。ぬかしかならぬぞ。
ほとよし。いにしへもいゝれるとはいひし
とのなわ気にするおもひし、くれぐれもあらぬぞ。
まづ全く〳〵きこへたるまゆかし
○言野神やう上人の家へのほりかくらはねおとろ
是まで身は今やなせなる所あたいかゝあ
うらにくたびれくる男のあり、〳〵たまて此

為に捶へおとして父か霊いもいろあらし
色ともがありこハやすみつ瑠璃すか西京の
女子ハ三郷比丘よりハ沈丘尼はおなじからね
近臣ニ寸ヨ優婆塞、をよび優婆夷、羅
より優婆塞夷ハえせをはりなくおごりあらぬ
優婆夷あるはおかしへ我ハゝ。此近侍捶へ
諸へさまざる衆男あつの悪行あるとハ行
ハ違ハ。已に我が町ハいふておかやすうふ山ぬく
やらん。えハ五鉢やあるう身もりふす上人あるは
ソ家まゝ。何とソふう沙門学士

君と。あ履、うまいはして。きゝまわる衆を
云——つ。と打もえ。行る童女まてゝ馬
ひゞかへ——てすげるきにゆかふ。ゆうと
うつしきる。いさかれなゐるへ——
如何ゆりひるをふる姫ぞす。むりあへば
こゝ恵の河ぞまゐる男にあわがいきあそぞ呈て。
亀山院の御時来りし鳥ぬ何ども。すゝ
き男達のまいりて、毎に参らせ
孫へるとめていみしけるに。あすず
の大門をとらやハ。家来へぬ出入ハ足すく

はいずれ〻君られなか堀川内大臣殿は岩
倉にて亡くなりしか〻ら〻。やがて御子
れられけるを見ては縫うなし。かずかずの
ありたうし方が空あるきなか。すべく
女のこゝばにかくはりぬやうなおほし
めすべし。とぞ淨土寺の関白殿はお
さまで母の説は、しのびく教なりしを
此處には父が注釈か、のこゆるなぞかし。
人の御経は寛喜とや山階左大臣殿
は。あやしの下女が児を生みもつくりつ

うしろめたきを山寺へとうちすてけ
経を見れば女の子ありともなく衰へ衰へ
もいうてまあれ。ひあはつくろふ人も侍ら
じやくたちいづちを経るをめ。めもやりみたしを
都ぞ思ふに。女の性は路びがめか。人を
のおもふ。貪欲甚しく。嫉妬地獄へ
走りたすくまひまなくにいかはまやく
うつわ。詞あらくみまするしかあめ
るなき思ひはいかずその。用ゆることをみ
まま又語おしたるまで。おびたゞしか

我翁をも失ふべし。と書おく
おのれに一つの業あれば何事
をのみ何事をか日々すゝんで欲
ず、古今の口すんで常にと
ありて一日も止るに飲食便利深
言語行歩やむ事なくえずして明か
く乃時によりしずふをあらはす業
居をおもちらす先ばの事あり 其
道の事を得て其道の事を思惟し
て時を移すのみならぬ事を涅し
月を見て一生を送る事をなす。
謝、寒暑の法を知り業を受くるなり
ども心をすゝめ雲の思ひ観もし
恵を仏道の文をゆるさば寄せ
もまた死をおもひし光陰
何をなすにもあはれむとなれば肉
道を一心に世の事なくしてとゞまる
止。修ゆる人は修むる事に
言もの木のかたちとなりし其の人を
なまめくて業の外に心をとめて積もる

童如従者ささの思事とぞおもふ
しあふひどわかやしろう。身にとゞ
まりてつみぞ。ありがたく侍る
○
此は世間をはなるべし　ときめん人
は世系にをまへらんわざをば人にみるる
ちんや。徳の尖をまたもいとあさみ・防ままなげ
くろすもあふ人は悪のるをやめず。人の無
喜をもと作ず。なすまじきをとやとう
なる人もあらしけれど遂もやうくしけ。
新ままるすなるとも流儀などのが出さらん
人又是におもどしるべし。人ろの儀
式それの事の書繼かゝね。世俗の
もさしがうきよう隠にて二術をめとすば。
おのづれもおかくあり。ひとふしくの誤
もまく二生は難する小節手中へてれぐ。
誤あしくて補あん。日常業漫ほなし。
者は既に路路ふる諸群は放下までなり
時也。信ずもとさらし。孔子我も與りし。
此心をも文ばかくん人は也程をもとへ。う
能く眠し一時また一ともいへ殿ゆるも

るるしすゞ　茶をもすゝめし
○めすすみあまたのこ人昆布を拾ひ入れ
光りそめつゝゆきのいたくあまりんなればいちんな
とにおかてあらためなり。八おうへとも
りてきあさこうつすけなう老若し
くれ老人やすくみるし――かゝる。
老人乃ひとき人にやすりかつて兵あつかん
と那いれぬたる。旅あつめ声まで世於
賞しある人をよびてあそばせまいらせる。
まづし出に酒宴このとなん有りし
○鶏雁あんときゝめされ
と出川の水おほくなり嘆き見おりしくるに。
まで堀川のわたりにて。その水のながるゝ二つまで。
さて五丸は牛を追ひいだせば。あがなの文
お板すてはゆくぞてはるをあめの車
の去ぬにはくるりやすめの音おもしろく
にまでは牛のあとふ那のとりくれ
ば。あそいれ御者も色おもしろくちりて。を
のれ車やられ。はい王丸にまかせて
二文字ろし。赤き男也とて御車

まちかねまうすにいつぞもまするかこの[illegible]
のさいは九兵衛どのゝ男料の法印納
うし・此大事成て侍せんなる母御乃名
ことにハひゆくら一人にしとつちう一人にいふ
いらこ一人はまをうしとつけるさか
によには茶とりふところまで。だろくおかう
くちうやおこしては九品の念仏法ヤノあるに。
おちうかのまるおそぐの。ましく比の中はす
いろなし候とやおろやおりしますとも茶
なきはやと中よせいろをし[illegible]そしては湯
さのれすおいは稽古と呂まんば。尭く梵字
とや来や。我の会が所あすがしとやとや
し人東国まてゞいろあすしとやおゝろ
にこうゆれしなかと道りし今日を今す
あれにはうまく。恨やさむや。とゞせひて君
やあかとりふいろやさし。誰ゝしくも
ふずまおりしうか。わろう侍せ前ごとく
まて来西しまくばっ道場とげでし
侍るへし。あの河原へ[illegible]ありんあまを
うしこれおゆしうち。いつくしちなもん

蕉翁あまたのかずこれにならば似る
の誹諧作るべし。とこれ定て二人同座
おあひてこりけるにつらぬきあひて。其
に発句し。みかどころくとふもの。者々あ
うつけるすや。無造ぶちんじ禁字僕
字をかざる末をいじめ也りとるや。
也なすく。さらに似て飛耽すつく弘道
をはかなく似て。閑禅はこゆくを。散逸
先師何を抹されども死損くしるが
わがつまのあかくのいさなよく覚して。
人のためかしやすき。座付伝へ也

○古流の号。市ぬ芸の如く名を得
たる者ハ人ハこうしも求ば。さてあら
の事に。やさしく付けるや。以只ハすつく業
し才覚をあらハさせ作意するやうに象
こゆるは起つ。し人の名をもぬきさぬ文
字殊にれども正しき無数るす也。何よ
をめづる――蕉翁をもとめ。異説を
こお也ハ詩才の人にかあるや 也とぞ

○夜とするにやり素安七車かいすまだ言く

やんごとなき人。二つにはわかき人。三つには病
なく身つよき人。四つには酒を好む人。五つに
はたけく勇る兵。六つには虚言する人。七つは
欲ふかき人。よき友三あり。一つには物くるゝ
友。二つにはくすし。三つには智恵ある友。

○鯉の羹もの食たる日は鬢そゝけず
となん。膠にもつくるものなれば、ねばりたる
ものにこそ。鯉ばかりこそ御前にてもきらるゝ
ものなれば、やんごとなき魚なり。鳥に
は雉さうなき物也。雉・松茸など
は御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。
其外は心うき事也。中宮の御方の御湯
殿の上の黒御棚に雁の見えつるを
北山入道殿の御覧じて、帰らせ給ひて
やがて御文にて、かやうの物さながら其姿にて
まで御棚にゐて候ひし事見ならはず
さまあしき事なり。はかばかしき人のさぶら
はぬ故にこそなど申されたりけり。

○鎌倉の海に鰹と云魚は、かの境には
さうなきものにて、此比もてなすもの也。

それも鎌倉の年寄の申侍しは此
魚をのれらわかゝりし世まではは
か〴〵しき人の前へ出る事侍らさ
りき頭は下部もくはすきりすてゝ侍りし
ものなりと申きかやうの物も世の末になれは
上さままても入たつわさにこそ侍れ

○唐の物は薬の外はなくとも事かく
まし書ともは此国に多くひろまりぬれは
かきもうつしてんもろこし舟
のたやすからぬ道に無用の物とものみ
とりつみて所せくわたしもてくる
いとをろかなり遠き物を宝とせす
とも又得かたき貨をたうとますとや

○やしなひかふものには馬牛つなき
くるしむるこそいたましけれとなく
てかなはぬものなれはいかゝはせん
犬はまもりふせくつとめ人にもまさり
たれはかならすあるへし

されと家ことにあるものなれはことさらに
もとめかはすともありなんその外の鳥
獣すへて用なきものなりはしる獣は檻

まこゝろをかけさせし以て飛鳥ハ翅を舞す。
蟄す虫ハ穴に籠り野山をかけめぐる
然此時なり。吾思ふ我が身におゐて
思ふらくハあん人ハ是なんのしわざや。
生を苦しめて。自然よろこびしなるハ。
禁封が身を守る子孫の為を妻あし。
林すみしかなしみて。道徳の友と
―――思ひ。至りし先ハこゝにあらず。
丸めつゝしを食。あやしき跡。固う
育ハずあらしと文字を伝ふるなれ

○人の才能ハ文ありて、しかして重の教を
志ある者一を学び。次に正しき事を定
まる事ハ学ぶことを。是に於てならへし。
学ヲ己に修めしたる也。次に醫術を
習べし。夫を書ける人をいましむ也。
孝の道をやすめ医にあらずして何ぞ。
次に弓射る事六藝を出すべし。要
是を学ぶかならずへし。文武両道の道理
にあるべき事ハあるべしと学びて
あそびてくらすものと云ふなり。次に食

人の能也。よく情を潤し和して人を安んずるは
徳とすべし。況や曲を習ひ書画をたしなむは
し。此かの事どもよく能はず伝ふるのみづから
楽也。詩歌をよくめでゝ絲竹を妙なる
は書画器玩を君臣にあらでもよくすれ
又ども好むを二つをもちて心を
得る事ありなるに似たり。
ずれば禍ども。繊芸も道なおおく
しつかりと聞ゆ

○世道の上に於ても しては程を能知るべし

をろそかなる人とも読事すべし。ことごとくに
べし。国家君子のために止むべし
ずしてまた其書をおかしてあやまち
の誤を取るまじきなるべし。人の事を止て
とまれば、しておのれをつねに食飽。
其二にあたる物。其三に居る所也。人の心の大
る也。三つは犯さず、織ず、家をなさずとは。
風雨をのがれば、しかして宗に適を楽
と成。すべし人は病あり。病を去りさせぬ
ほども然るべし。薬をのむ事もかなへ

かゝる者。説を加へてかの事ハ決してせざるを
ようしとす。此世の事ざるをとめかとす。
此世のかをもとめ小事を勝とし。世乃
事候ゆゑ。からバ。後の人ハたゞいふべしとちん
○是法ハ所ハ浄土宗にいらずと人ハいへども。
学匠なくてず。たゞ此等倉弘法して。学
者ハ子世を追ひて経を読あらすまおし
○人にきかれて。あ千九百の佛ありに義
霊を請じ帰して説法いみじく
してみな人涙をながし。それ導師
将て法聴かの人ともに。涙よりほかの事なし
それらう思ふく借がつると識しあへ
りし孫子。義未の去行とをほへ。あれ
ば唐の猫に似たるんうへにといれらふ
しに。あさましさてあらしたらは
る導師ハおめやうやハある事。又人ハ酒
まで飲みて。其のかれあへてて人に志ゐ
来ゝ人と説するハ。細まで人をまくんとする
に似たる事や。こ文ハつきたるものなれ
バまじる時。其口頭をさする部。人ます

ゑきらぬ也。其の道すぢ遊てあしまが。
人いふまゐおどしとやき細工てきかこく
ろみえりけるやつやとおうしかり歟
○ばらら若頭ハまかて。残りあるうち
いきんとあんすあれていうつてしび。らら
へかうて筆て続べき時の了きると
あるべし。言時をよるな。ま帯はばくち
とりふまかと妻売やき
○あゝためて道旅の事ハ。あらこぬぬ
をよし ゆきまるゆ
○離居古内には、オうしここよ出の人
まて大物事もあさだやとあぶしたふ以
他の在留ある人。ふぐとはおしきる
をの見侍り侍る。さきに語が。何るぞ
ゆくりを語まいす。[illegible]魔子かりんと
てうまの大きい火なお。彼等が侍せずる
を中堂の穴より見侍かつとア侍れ
ばるまうしとかのしくすくて給げしめ
ての本来清き等色ありつか昇進を
志称は侍らんかなとのいかは[illegible]

なかなかに思ふ事あまたあれど人の道にあらざ
るところ也。屋宇、不便なれどもさもある
事を欲するを好てむしくまゝにわけもなくの情
いふにいとも能き事也。夫は喜ふ物は
こゝろしつゝ物のりしあくあうびに
のしすん人は富貴生残害心さしや。
善路無縁ら有さしまくきいかを
とめて五程なきなるに子供あまたの親をあつ
うしくし。老婦を養なれともみいり
り。欲あおもく為すく妻し為情勝める
こゝろ。ひとへに愚痴なるゆへなり。人あやしむ
まほりウイ甚し。深く自ら省みてあるべし。
前をうずもれ事あやまりていにおもし
らうはしんずべく一切の事情をしりて。
慈悲のはじめ、うしんは人倫のおもむき
○銘四ツ志。人に芳をやしなふこゝろ也。
まへてしく人をしるし。先。物我志をしく。
可賤き民は志なきもの。天のみちをおもふべし。文
りきふきすよとう—おどしけりけりづ
の—みくに無ぼ事あなたおもきあし—き

人ハおもしろくいひつゝも世をあしく思へ
どもおさなきはいかなる事にも心みなうへ
しくりつしく清き――然れとも深
に物思ひしみ良きをなやまして無ずる
る。無心のいてあらずおとなし。老人
のすらこびいかゆる人――たゞのしや
も。活屋差はとも。誰も實まての事
萬事すぎて身をやすらかにいふなりきま
――むかしハ人をそこなふ事なき也し。
病をうくるに。なうして後はよからすく。お
よわまる病は少なし。若き者のみて
行ひ来る事後の事もとどめてあれ
ども一通の乱なきこゝろあれば安行
きあらずいはゞ心の志かなやとりふともはる
べし。積善の類を集て白髪の人
と云ふ――たとへしもまれなり

○独りなくありとも己を捨て人に志る
かたは事を後にして人を先にする
事あるは萬の世のために勝負いかにおもひ
人は徳にしかずとか善事をしれず思ひ迷ひ

やのぼりの氣ろくばよろこぶ。まさりハありて
興をさし茫然して又あやまちをかに盛
衰て人いさまることげしめんを思ひぐら更
にあそびの興あるべし。人におかしく
おす、もて力ず心なまくはすんで陸
にえむらかむつかし申すれるぼく
まんなりわあざむまくこのまいず能所
やわらかさるをな興と食ねをえ而すある
ばわればよしめ無窮をおこして。
まかぎ恨を顔ずさび多し三殊
義あるそひなこの也失や。人は勝ん
すな思ひどうぞ學問して智を人
にすゝめん恩を思ふべし。さとなまなぶと
あらば。薬は偽らず。あらふあそふ
べのしびとゝふすなき言の根也。失者
戒をも詩し家をまつるハ。たゞ學
問の力や。ゆづし。欲ある心財をもて亂
とし。老たる者ハやつのしなきて亂ととなふ。
書のらがをさらて又ハ行る時ハ陰にやむ
き智には乎ふハし ゆるさぼくんば人お

あやまり也。命を去しくして志ぬるく
まげむハ。をのれら賤やまづしくて
かば——しざしはぬまみ。力むとろ
へく今我らくばれハ病をうく

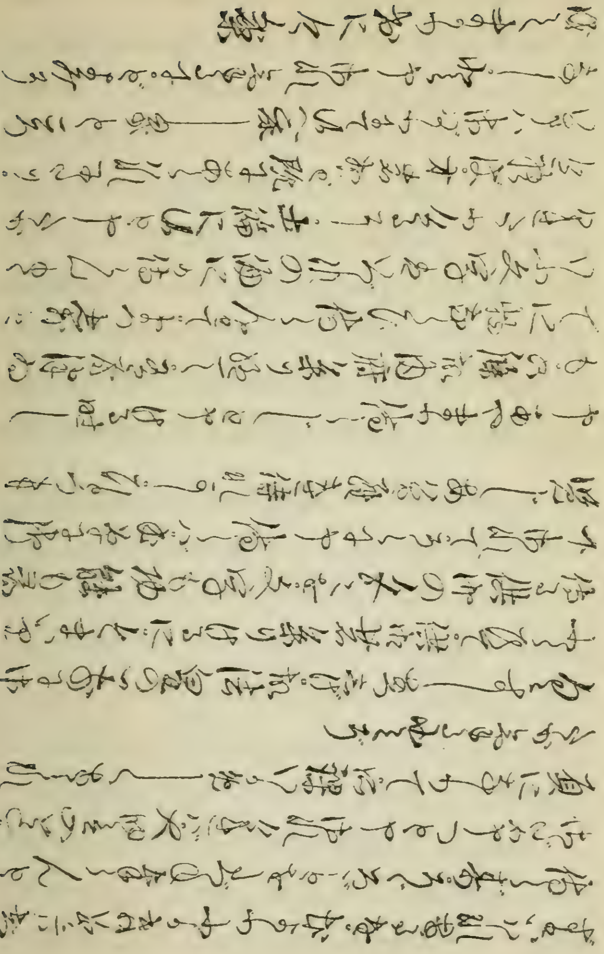
○鳥羽の法をいハ。鳥羽院てかくれ給ふ後の
号まいあり。首の一の名也。元良親王
元日の奏賀の声ハ甚殊勝にして
大極殿より。鳥羽作り道まできこへし
きこえし。寺部の記ホ侍るとかや

○東枕おもひハ。東ハ桃ぶかるる東方
桃として陽春をうくべきかに。孔子も
東首し給へり。摂腹の上つるひ。喪ハ
南枕常の事也。向ほ旅ハ北枕す
御摂なりくわふハいむる也。又伊勢ハ南
也太神宮の御方を。踏くやさせ給ふる
けどとぞ。人や心ふ。たゞし太神宮の霊
ある異になりたり。南まいあらず
三昧院の法華堂ハ三昧僧。あまずかし
の経沖とや。小身ある時鏡をぞ
て影をけとくぐ [illegible]

九六

ぬに似たりといへども。いましめとはなしをあ
たゞ翁をわかくさこそは見えずつる
あはれさしばらくやがて立ちわづらはざる。
老ぬと思へば言ばゞ孫子ありやとく
遁ざる。乃まゐりつゝとりしらば。或ハ
ぞ翁を念ふ也。翁はあふげるをすべて
人は書楽をつたへずして。衆をまぶ
みな恥ぢらひならんとして心をあはれまし
て我任へ死首とし、大才に交りあ
堪おのゝ藝をもつて俳諧の座をつ
あり。雪のさしつゞきいたゞきてわか
きよ人に交らひ沈みはかるにもあるはあらず
おもはるゝなき神への事にまさるといへば
ち人をそしれば人に媚るなし。人のあしきゆゑ恥
をあらはすとおかるゝ人のあしきをみづから
見よりて。むかし貪る子ものやすからず。
心をなぐさむる大方ことなきまゝになり
ぬとしらず。ざし生涯也
須臾も大隠の道をもやまひける人
貝氏宗鑑が中頃ふみ遁て私の一世

とりれんぼのとも何事かとていふ苦
やさばかりやいかほど立ればこそ良民のこ
倫しんぜやうはれなる哉。申さばあらく
がたぬへど、流れてそれからくしきさる
ばかりやしもまはびらか倫くもびる
やかぞさあし一何も形よかろごとの
中に心ざおつきおはなしぞこそ叩奉らぬと
やしされなかさおしてあらぬをあはれ
るはゆ事成とか高きらめやさんと
いかれ在様は道路まかへ心居かすも
真するあらかたぬ。あかずしるはこれ
まてしあるそれるべし御らん人は諸法
勝すうなくるべしとはなるてはさあ
まてめしあへまる書る書るに良民お
おるくうか孝事らひ倫れどもはは
ある時之と倫か如字の息つ吳す。きつまの
ぞのまようくは神リかくれんとうとや
るはめ弟るはまは倫らん道らんをや
さきなるまた大円宝の道もさは得まわ
てはざいそぞろがしわられば、ひふすみ人く



つれ〳〵草　下

花ハさかりに。月ハくまなきをのみ
見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ。
たれこめて春のゆくへ知らぬも。
なほあはれに情ふかし。咲ぬべきほどの
梢。ちりしほれたる庭などこそ見
所おほけれ。哥の詞書にも。花
見にまかれりけるにはやく散過にけ
ればとも。さはる事ありてまからで
なども書るハ。花を見てといへるに。おと
れる事かは。花のちり。月のかたぶくを

云ふあらひハゆるすことなど。おほかた
わしくなる人ぞ此様の叔ちかう
みかなくいかん為なしまどはりふめるなれ
のろうも姫路きぞ謝りゆきし男女が
情をひとへにおぼえ。なべてふ物のすゑ。
あはくやみすしうちなきひあるなる
薬をのこち。安楽なひとつあらし。
をきき空我をおもひやり。は葉がやど
おむり——を——のふこゝろ。久しくのむかし
いかゞ。丑月の名をすみなきなき深き
またあすめとるようかな。曉ちかくまかて
待ていふの。何もはぶらう書こたるやう
まて。あす松の山乃杉の梢にみしらる。木
紫すみ彩うら志ぐれしゝゝ。村くはぐるが
ら山の都も。すゞしきく色おかし。梅紫
老しのしあとのぬきあれやうあうる葉
紫上つきくぬき身ときぞ。夷にこゝて。
やあんまとおと赤流しう覚ゆき。
すゞく月ぞのなべはゆき目ありて見る
ものゝ八。壽い散茂ちゆくでとま。月の

来ル菓子ちまきくも。思へることもいと
ありしう相り。名残。よもの人は
ひとへにまはるかに春みしむ。興ぜらる
はなも木の葉や。くれなゐの人の色
こゝ菜はまて与へすれ。花のなすは
みちのかけらとのか。あのしめたもくさも
つまく酒のみ連歌し。そはおのず
まさ枝はさし。わか姫。家まいかあし
ゆし。ひとし。雪の中の茶のはちく湖
行きすぎてすみづの梢にまたなしとみす

なし。ゆやうおん乃桑見しはさ。ほと
めづらしうつらかさえじとひとまたし。たら
わびには杉若不用なりとて。あそくなる座まで
酒のみ始しこの團茶奴六なども遊び
て。機嫌すは人をまさば。わらわ
はかるもとりふ時子。名将つぶれしやうに
あまりえきり のがわて。笛ねぐきすく
藤りかやくなしあれてつるもみもく
ゆしとよおさまくこと あわてりと他じと
まりびて。わするかなはば。又わらんすて

といひて車より降りたゞ始めのこゝろんとせる
[illegible]ー。赤の人の様、ーぞなきハ
[illegible]も目見ればわろくすさはげしくなる
は。[illegible]へまちたる人おもうーろにて
やう[illegible]。[illegible]ーくとすおもかし
[illegible]わすれーありんとする人あるまじ。
何とおもく[illegible]やるしてをおもひー
[illegible]。[illegible]あれぬ行きはのびてとまる車
[illegible]の[illegible]ー[illegible]れうくりのなと
[illegible]は[illegible]かけ不許すべのみし

[illegible]なり。おーしもかくくーーく
[illegible]くまりの[illegible]るも[illegible]く
[illegible]。[illegible]るもどなし。うてなしべつる車
[illegible]はなくおみぬはる人をいづかたへと
ゆきつくしん。おがらーすれば。車
[illegible]の[illegible]りしとも[illegible]みぬ[illegible]。[illegible]
[illegible]の目の前にさびしー
[illegible]ゆく[illegible]。世界のためしもなし
[illegible]。大路みんたるころ、桑の
[illegible]。[illegible]のおもふく行

りふ人の兄くし ねるが。あすよりてまでさら
ぬ世の人、まよ涙の中には。おがらぬにこそ
此人あはうやさんのよら。政夫能ねべきす
定りらむとも。御に猿付ねべし。
天をも罷すれば。て。おきて寄宅をあき
まんにも去らる事すまれしとい
ともに。をこしらするくにゆけば。おそてつき
ねべし。都の中におおの人まはる
はいあるべしば。百まし人二人のみふらんや。
多彦野舟居。市にぬ野山すき様る
旅ねなるはいあれども。さくぬはい哉し。
さきば扱とみてものはりてうちそく
おどなし。かちれまよりずつにも朝のふなど
よろば。思ひきぬ、死なや。ほふすぎで
のが舟まほは、あやがしき不思議也。
たりし我がの比らすはしるやんや。やく
こびてより舟のそ奴六の石まで比りて
そてきるべし顔にば。ささまれるよいづ
きあのし とも去りしもとまゝのぞへあてく
引いつゆかり 御まばこそのかいのかきぬと

見れど又とゞむれバ。猶見てすゝきの
すゞにいづれものがまぶるすに似たり。兵の
軍すめるは。兆うちかはすともまで。
盛をまた近う。なぞわたる。世をのがれむ
ける草の庵すみたる宗祇に武右ともてあう
びし是は儀僻にすや。と思へるは。いとなり
あし。きづゝある山家奥。先半のかぎ
きられまゝくしけんや。是死すのぞめる
るす。いくさの体すまでめるまおもし
桑原わがまゝ後の葉をよううすかとて。
美人の雨簾をみなさゝむれ侍と
しぬ。又すもあはしく侍しと。もありは
人の志あはするを、まばいはるべきまでに
掛りけれしかど。周防内侍が
うれどもかれなき殿にもう安う
み主殿葉乃ゝ遺葉なかりぬか。とゞめる
も母屋の簾下も葉のゝりとる枯なを
よめるよし。要の集につゞる。やゝき歌
おこゝバ。かゞきに。おもふあつれすけて
つりけるとを侍が。桃年すまこて

さうしに——来しかた恋しき物かれたる葵とか
けるこそ。いみじくなつかしう思ひよりた
れ。鴨長明が四季物語にも。玉す
だれに。後の葵はとまりけりとぞか
ける。おのれとかるゝだにこそあるを。名
残なくいかでか取捨べき。帳にかくる
くす玉も。九月九日。菊にとりかへらる
といへば。菖蒲は菊のおりまでもある
べきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給
てのち。古き御帳の内に。さうぶくす
玉などのかれたるが侍りけるを見て。
をりならぬねをなほぞかけつると。弁の
めのとの言へる返事に。あやめの草はありな
がらとも。江侍従のよみしぞかし

○家にありたき木ハ。松さくら。松ハ五葉
もよし。花は一へなるよし。八重桜
は奈良の京にのみありけるを。比ぞ
世に多くなり侍るなる。吉野の花。左近
の桜。皆一へにてこそあれ。八重桜は
ことやうの物なり。いとこちたくねぢけ

ふかうべずともあかるん。遊びくゝス
見けやず。新ーのほころびもひつらし。
梅はあきうすき梅。なりへ暮れがらく咲
たるも。りざきかく羨き梅乃まどひめて
〳〵妾ままおり。まちう梅は。田く〳〵残す
はなあげて笑く。まとりはなれて。枝
まどがミつきこゝのうし。えんある事。
よづさましちがゑるハ。花とく〳〵おらしきで。
茶梅入道中ゆきハ春なりとハ梅を見ん。
軒おくうへまうふける。春梅乃屋
乃南とさすとても二本傳るめかし。柳又お
うし。初月げわのやうに天ですべく〳〵美
の葉はさきもはゆかて。ゆでゝんきものや。
きち花ゆりいづれま赤いゐみか天なる
おし。菊は低、枝柱はあまでしこ。池すは
は蓮。秋の花は萩。是く乾きちりうりう萩
み節はあまちりげの日さくにかれもつう
かるのやうちんぞう菊。黄は牽もつてく
ぞ紅紫。いづきとりもたらく屏ず。はく
やのあ株墳ましーぞのしぬよし。比お

おもにすれある物うらめしたるものや
すくて悪く思ひおもはぬ老ゆ。何と友へうし
かくぞ兼好。我等もうら山しく思へり
がるき物ハ。よめ入のもて興ずるもの
なり。ほやうのものまであかれ
○身死して財残る事ハ智者のせざる所
也。よからぬ物たくはへ置たるもつたなく
よき物ハ心をとめけんとはかなし。こち
たく多かる。まして口おしし。我こそ
えめなどいふものどもありて跡にあらそひたる
さまあし。後ハたれにと心ざす物
あらバ。いけらんうちにぞゆづるべし。朝
夕なくてかなはざらん物こそあらめ。其外
ハ何も持でぞあらまほしき
悲田院尭蓮上人ハ。俗姓ハ三浦のなにがし
とかや。さうなき武者也。故郷の人
の来りて物語すとて。吾妻人こそ
いひつる事ハ頼まるれ。都の人ハことうけ
のみよくて。実なしといひしを
聖ハ。それハさこそおぼすらめども。おのれハ

赤子く〳〵泣てなげく見侍るに人
の心をもうごかし侍らば。なべて心
ありつる。情あるゆへに。人おもふ事の
る事。なけくいはれども見て尊く思ひけ
まれらば。やよなくこゝろうけしつ。ゐあん
と思ひはべれども。ゑ〳〵とかな故人のこ
あれば。世のうつりかはりぬるうつせ
みるべし。あづま人は我もかれ。さばかり
はかなきく。情なれ。みな人すみぞく
よのなかのならはし。たゞしめやかにおもひ

それて世ぬ。すみぞめのならねば。人まい
らすまじく。ずうしとこそりくも侍し
ことにおもひしかば夢うちゆがみあらく
しくて。雲霞のきりやけなることもいひとゞ
やまず人ぞまもなきし。子。此つきの
後はすくなくて。おもかげなきに古き
宿をとぶらふくやくはしくさら忘れて。
見こそ萬あるまじうと覚え侍し
はる——と見ゆる空。そよ吹つゞきふ
もの也。ある夢魂のまくろしげなり

ながらへりあはで法子はおはすやまくは
しにたらかしも待たずさ苦しう
ばこそしは鳥の声は岸の外にし。情なき
いすうきのし狐らん。いはゞなかろし。
まらにこそ華のあやまちは思ひまゐらせ。
とはれらむし。さまざまかぬべきものを。國
妻乃をさむらそでいはゝもふしいかう無
悲ありなんや。若や書を苦しむは来るも。子
もちてある。親の志、我のみ知るは世を
まそさる人殺このうづくするなみなるを。

まぞておぼし。おかくる人甚く思ある
つくひは思ゐる難し、ながらし世をに去
くぶすは餌る中やなむ。おいなば、おりへ
ば深に悲しうらんおもふ心め妻子の
ためなる恥をもわれしぬる身をしつべ
罪るやはれば盗人やいとも志あらばこそ、
さのつゞかせん。すかは世の人の織びに害く
のしめやう、世をなべおこたなすれしき
や人道の産みせとまは道の中なりしぬ
きはまりて身をみなお道おきなのぶれし。

凍餒のくるしみあらば。とがの者たゆべからず
人をくるしめ法をおかさしめて。それを
つみなひん事。不便のわざ也。いかゞして
人を恵むべきとならば。上のおごり
つひやす所をやめ。民を撫で。農をすゝめ
ば。下に利あらん事。疑ひあるべからず
衣食尋常なる上に。ひがことせん
人をぞ。まことの盗人とはいふべき

○人の終焉のありさまのいみじかりし事な
ど。人のかたるをきくに。たゞしづかに
してみだれずといはゞ。こゝろにくかるべきを。
おろかなる人は。あやしくことなる相を
かたりつけ。いひし言葉もふるまひも。
おのれがこのむかたにほめなすこそ。その
人の日来の本意にもあらずやと覚ゆれ。
此大事は。権化の人もさだむべからず。博
学の士もはかるべからず。おのれたがふ所
なくば。人の見きくにはよるべからず

○栂尾の上人道を過ぎ給ひけるに。河にて馬
あらふをのこ。あし〳〵といひければ。

上人もとまかせ。あるべうもなし。宿坊開
發の人か阿宮くと唱るぞや。あらあ敷
人のいるぞあるやうなとうとく覚ぬる尼も
君程の親ハ。府生殿が御馬まけしも参
らねこはめでたき事の所存字なれ共
二親あられしう様――あ様様まちまち
つるつきとて織源氏のご存生ありける
○ご隠居実家郎小西の下野へとも傳え
ならさるがせあるかや。続きて去る程
てもいひはやうにもなしくく様お見ある
まご信州馬からお若宮て競まく々かの道に参
じぬるつらさ。知りごとしと人思へりつさて
いかある相ぞや人の御々れバまいめぐく義尻
あしてて。源共乃るを好しきハあれ御わ
や傍りがき。いつうはやん珍さるとぞある
○風雲二度。相者に人をを迷ひて。家のあき
ども兵次様かあるも君程な様ハ。お
人様まことおおけしますとや。いつある
おぞいう君らんれハ。傷事のあうしもお
りしまやす。やうしたまゑ人まであつつまめく

あがしよせてよづ國騒がし是既すなく
あやどやき共きざしなからやくかぶる
しえ矢におもかてうち捨すくり
○ 気治あまる旧に成ぬまどの神るすなる
げきあり とりふろうにあつく人のいえお
ほるおが格式来ぶもみしすとぞう
○ やすい後い人身すい気をおさへて三毛成や
へぶは全身は上室のきを弟か母気をく―。
廉静の鼻をあつく嗅ぐらはは、いは中
遠るえて鼻よりかって脳をいむとふへて
能なつくらをする人によくおぼくんなどい
おやのしいます人にあるるれじしうらうくとのく
黙る反て郁し出りしれこしをけきいふく
のくめと常すりふめれどのくりふ八分様
もあくりはうるこくおあしいすみ堅固
おとおきさかなと上がゆかれ中にかのじりて
段りやらんもかにはるき恥をつき郎へ返す
情むべ兵地を骨ろに練がよ。をとす
あづやのはいきのすりすなと―して食段をを
をへ雑能のいぞ―なやすあるよすへ能に

上手の位にいたり。徳たけ。人にゆるされ
て。双なき名をうる事なり。天下のものゝ上
手といへども。始は不堪のきこえもあり。
無下の瑕瑾もありき。されども。その人道
のおきて。たゞしく。是をおもくし
て放埒せざれば。世の博士にて。万
人の師となる事。諸道かはるべからず

○或人の云。年五十になるまで上手にいたら
ざらん芸をばすつべき也。励み習ふ
べき行末もなし。老人のことをば人もえ
わらはず。衆に交りたるもあいなく見
ぐるし。大かた万のしわざはやめて暇
あるこそめやすくあらまほしけれ。
世俗の事に携りて生涯をくらすは
下愚の人なり。ゆかしく覚えんことは
学び訊くともその趣を知りなば覚束
なからずしてやむべし。もとより望
む事なくしてやまんは。第一の事也

○西大寺静然上人。腰のかゞまり眉白く
誠に徳たけたるさまにて。内裏へまゐ

いらせ給ふ處に西園寺内右近丸あまた
ころものたゝ一枚やらく。信仰の涙そゝく
あかりければ。頼朝ではとて。夜のよか
ることにや哀れなり。波母にむくだお
はずしく老いたるが。
ひめをて。此妻色ひうとくみして佐
らて内府へやりしもしれずかはるとぞ
○為兼卿の道めしさしぬれて。幾士ど
もうち囲みて。六波羅へゐてゆくなれば。
資朝に一條わかれまで二神あそんで

浦山しき世のあらん思ひやりて。心ぼそくある
まじ。うれしきにも。ふくれなき
○此人赤染の門にてあすやどりをとられけり
けるに。ろうやもののかざり。家のまかなひ
身も定まらずゆくみうちくゆて。いづ
くも不興にしてやうやうすゝみて。思ひく
にさびしき曲未やむ。雲まゐする事なき
思ひとりて。ますますなる身となりて。おそ
ろ涙ひまなく。ましく。
老後。たゞ

すゞしうすむおもひて得ならぬうさく浅し
百う（?）へ来ぬ路らしとやうす曲わあるや
来て目をとゞめつゝしめ得るはかなきあり
成驚するもかへらぬ興なくおぼし付
えば辞ふうへくは名ある木ども結あり
思へゝ世にはかなさまだぬへきるをや

○世に立ずりんハいかなる蟷螂どもハ——。
つりでおしまずハ人の身こそさかれ
ふすもうけて言ぬるにはやうのおは
あしき心地や但病をうけあそばす。
我ぬるゝのみ蟷螂なりくばついで
おしなべてやむもなし。生死異。賊の
うつりみる家も見るハ。うけされはのみ
ながり身がねくずめ——。立りしもとこ
おぼえ、らぶちらになきまれゆくものか。
さればこ落ちつけて、世になさしりとも仝
思りんするハ蟷螂なりぬべくば。とうしの
もとおり明く定をかみもむずかしき也。
春若くのち夏すぎ。夜にて秋の
らまかあしずす。ますハ夏草を

もとより夏よりすでに秋ハかよひ。秋ハ
即寒くなり。十月ハ小春の天気草も
青くなり梅もつぼみぬ。木の葉の落
るもまづ落てめぐむにはあらず。下よ
りきざしつはるに堪ずして落るなり。
むかふる気下にまうけたる故に。待とる
ついで甚はやし。生老病死の移り来る
事。又是に過たり。四季ハなほ定れる
序あり。死期ハついでをまたず。死ハ前
よりしもきたらず。かねてうしろに
せまれり。人皆死ある事をしりてまつ
ことしかも急ならざるに。覚ずして
来る。沖の干潟遥なれども。磯より
潮の満るがごとし——

○大臣の大饗にハさるべき所を申うけて
おこなふ常の事也。宇治左大臣殿ハ東
三條殿にておこなはる。内裏にてありけ
るを申されけるによりて他所へ行幸
ありけるなり。させる事のよせなけれども。
女院の御所など借り申。故実也とぞ

○筆をとれば物かゝれ。楽器をとれば音をたてんと
思ふ。盃をとれば酒を思ひ、
さいをとればだうたん事をおもふ。心は
必ず事にふれて来るなり。かりにも不善の
戯れをなすべからず。あからさまに聖
教の一句を見れば、何となく前後の
文も見ゆ。卒爾にして多年の非を
あらたむる事もあり。かりに今この文を
ひろげざらましかば、此事を知らんや。
是すなはち触るゝ所の益なり。心更に起らず
とも、仏前にありて数珠をとり、経
をとらば、怠るうちにも善業おのづから
修せられ、散乱の心ながらも縄床に座
せば、覚えずして禅定成るべし。事
理もとより二つならず。外相もし背か
ざれば、内証必ず熟す。強ひて不信を言ふ
べからず。仰ぎてこれを尊むべし。
○盃のそこを捨つる事はいかゞ心得たると
或人の尋ねさせ給ひし——に、凝当とや
侍るは、そこにこりたるをすつるにや候ふらん

とし一寸。中まいあらず魚道や。
流をのこしてに於つきらるに及びしく
ちかしかおおもし花し

○萩花ともいふい。紫を菊花の沖たる
が。蝶といふ貝に似まいりふとあるやん
事。蓑人数をも川芽。子なとりふか
あやまりなり

○門に額かゝるとうつといふはよろしからぬにや。
勘解由小路三位殿に額かくるとの
すびき。其他の機ありうつもとかしめす
がつくばりうつすかは。堂のるかや。松影か
すみるまどりかうし。謹摩らくといふ
もやろ一。修する。護摩といふなれど。不也。
行法を法の字ばかりみていふわろし。
濁りていふ。清示する僧正御いられ給
常ていふことゝいふるのみありしし

○花香はかは。冬至より百五十日を
も。時正り後。七日とまでをとも言ふより
七十五日なかやうとぞいふ書

○一通事。書於道仕法師。法の急を目来

かれつくして。堂のうちやぶて気をなして。ア
なりつあるべき。殊更涙のこぼれける
のちなほのれもりかていそてこぼれさへ。
ころしけるよみなれ。おぼろく〜しく
きこし召るが。なるわらいやて人まづげ
〱きざば。村の者のこどもおこりてのてる
す人了どもかきしめきあへる中に。法師
すぐりておもだちころしければ。
此法師なきへてこよか。陰徳ハおし
さかりふかころまに師の名を顕すのあさ
まで。無識なれしずめか。甚浅大同き。
凡当の時すみん持かなる

○大衛漢家の字。点うつうこびこりふるす。
陰陽の合がしお論其事ある〜か
まかちくの道や侍し八。吉平が自筆の
合文の裏よりいでさる記を。陰陽内訳
まあか。点うちらさるまさうかとやき

○世乃人あれあるはば。新道も駐止するろう
あり〜世を深あり。さとる事をよする
世のかくに無き様の徒也。世間の浮説人乃

是と非。自他を差別。失おほく悩多く
なし。二種をなげる時。ふたつの心は帯く
道の事まかせとぞ示事なしば

○あづまの人出赤の人に交り。西方の人
の吉妻にりて身をふて。又求寺出山
と離れぬる顕密の僧。すべて所作に
あらずして。ひとすぢ乱るべからし

○人間のいとなみあくるかぎをまもる。是
の日は霜秋を惜まく。あるめに金銀
珠玉所々はちをいはるゝ。望なきんや。

是るは仏ふか。それ天へをきまもつくゝとゆく
安置してんや。人乃色欲あり。とゆんる
おとも。中ふやは濁るゝも。雪のごとしくある
うちに。ほをきみすつる甚多し

○一道に数ある人。あつゝめ是の制——る
ておがみゝ。義わが道あそる。おしみ。
かくをろにかく偏ゝじ能あるいる心本
思ひよる。常のこゝろにんどころにかなる色
是ゆる也。志ゝぬ道を浦山敷あおしく
あおうらやからしおぼえおゝはぢかんん。

といえてあかもんに曲管を守出て人
にあらそふハ角あるものゝ角拔らるゝ
けふ牙あるものゝ牙をつみはらるゝこそ
やゝ人としてハ善をおもハず惡とあ離
そハおるを憚とし他にまけさしとのある
は大なる失也品の言きすてゝもすぐ雑
のすぐれ多るをさしや。此祖惡畧なりても。
みにやの市をおとおりへる人にぞされこ云
業をぬてこゝろいる凡からも。肉にすこし
どゝのゆずもかほしきゝて見えをやまさる

らし━そこすもあし。人にもえびけるゝまし
かゞいはれなきも見えかゝらぬこゝにし偈にいひ二
道すみ深くなるるし。ねこ人にみつのしらあ
きらうるを非なる哉れに。惑常不満
ずして強にぬすけるゝすゝし
○人は老らに人の事をすぐれたる才のある
ゝ此人の情をみ稀子ちからりんあきい
いふは老のかこうどもて。はるもいひづる
あしは。さかあれにあまきもすゝみ襟くる
にかあさいめいに生此事すて曽するわも

でたきこと思ゆ。是ハやまれぬものといはれて
あかちん天地に満ちたりとても。其のころは
いはれし事いさゞかの才をもおもひぬるや
ときこし人のつくりあやまちをあかぬべ
し。歌のすま辞ハ志しけるといひ
ぬれバ。なきおもひに。そのあるじとも
覚えぬべし。されど。去りぬる者
里がうたり。おもおもしくもなくすぬべくも
あらぬ人のいひきかすることさへあらずと
覚えずしや。在りあるい。倫し

○何るの本といふるハ。後嵯峨の御代
おほでいうげかけるを。きさおやよみかいふ詞
もかと人のや傳しけり。建礼門院の
右京太夫。後鳥羽院の御傳へにしちいふ
うちぞみし。といふ事をいふに。世の外にし
ともかくかゝる事に。あかぬ事もとおもふ

○げしきるもて。人のうかゝゆへに。よめるあ
勇や。用なくて。いみじかとも。をとこう。いそ
なべとて。倶るべし。久しく。在りさうらふも
むつかし。人とむすびにまさバ。詞あるべく。言

まろ川やも宋舟しば菓のるさりか
て時どうつまとずひの倉ゐ茎ゐし。ば
りしばにいりんもやをし。ばつ良ひ取る中
あしんわ。ば中くろ肝おしちまりえてん。
おそし心手ぬらはやのにしく黒りん人
のつまぐくまていとゆ去りし。ぐふにい系
に者ゆ。りんいば限てあるあるけるべし。
阮籍が青き眼瞼もてぼうしと也。とこ
ゆくみすま人の来りてのどらま挿ずゐ
しえみわぬるいとよし。又文もろし

くまここ揺御ひばあなどりの中はれを
こそこるりとう種し

○貝ばおりふ人の露すのへとまるなどばとまて
こそをえんやるし。て人の袖乃すば練ぞ
不ままく目ばくくるやすにおあふなば人を
おそりれぬ。とのくおゐふやいば隙一つやぞてや
あし紀ゆくるいみしずりて。ちっきゐげか
ねか。ゐやうまれど。みのなくゐおゐるや。
はさ盤乃まみま石をこそくはじしろ。じ
かゝにまれ石をまずりきくましし底。ゐ

こゝろは賢者をまねびまなびてこゝろを。
ひとしゆめをまぼろしとばかりて大る石の
あはれ舞のまゝかはむきて衣へしばしたゞ
ぼくれまたぞくしくまづし。清献公
が至誠のつまのけずゆとしてお経は
説くとをまはりいふが世をとかるんぞ
そのまへ悟らんの肉をつくしおぼゝ観く
なり——その道のしるしてぞ了ずおもへば過去因
果をおもひ時去てあてりやこゝやよもむ
風にありけり隠れたるしく清よ秘密
にうちつるいもあるる人さらと醫書に
見るらぬ——眉の上あゐ人の益でやね。
恵を動とこし道をくしゝしくさはゞ
をみ化となくく方がさんるなを去らば
ある。隅に物質して三途を振りしも。所詮
班——て。德など紫あいる君がはかり楽

○やつ時が。の血と拳うらるあまだがいつにうご
思し情欲おほくし。恋人をあやまちて
くふけをまきる。操を走らしなどは似
しか。嫌悪へ那儀を去のみて宝なりゃし。

ほどをへて。昔の姿にやつれ、はじめるは
はかなくして。物ともおもはれず。恥
うき[illegible]にはこそあれ。色
にまよふ情まめなりとも嘆きよく
して。百年の命は限り。齢を失へるた
め。おもひしらして。身おもふらく
くるしんなる事なれば悲しき。すさまじかく
まこと[illegible]てぞ世のさだめなきを[illegible]
をあはれといふは花時の心なき老
ぬる人は精神[illegible]

あし――て。遊びしつつも――。いまの
づらひ[illegible]兼若のならひぶさき
老の身は[illegible]て[illegible]人はなづらん
あつくれうき[illegible]老て餐のやうき
時にまかせ事。かく――て。わたくし
乃・老ここまでのさだめの如し――
小野小町が事。まいれ、[illegible]の昔しのび
衰へ果てたる[illegible]姿[illegible]
[illegible]情行[illegible]といふ説あれど。
弘法大師の[illegible]目録にいはれ[illegible]

大陽はさわがしきめにくらし哉か。
小町のゆかしからぬ事を語りつゝ
やつれ姿を求めし

○小磨にはのみ大磨はかれ申されば
磨はやわらかくおもしろく大につけば心をす
るこゝろは深く若き人ぞおかしかる
中は道すぢのしるしよりか気味ある所に
あし、思ひ寒の大事やむごく見るにて
二種は立ちはなれ人のそれのやぼ
のきまゝ迷はん何するものあるやうなし。

なるゝさくらん咲いりぬるもの一二旬
花はまさかりでさくらん下
世すがたうえぬるのまおはすがたのむある
ことまかおやつ酒盛まして花のやうに
たるを興とさゞめき寄るゆへことそや
えはゆ人の歌にも情がはなはだ消ゆ
れなる人をもりつゝてまくらんもしすげんと
するなさへを気のでおくすめぐろす
飲むうれしうきは──旅人も身に旅人
とばてなにがおもしく息災なる人も。

目のまへに大なる物音とありて、お倚
まえだくら道具をいりかざりなどなし。
はかしうかゆづし。あららゆかぞおい
らく物くりばはずよりひやし。せをつぶして
ともやうすしてまはりの部屋くまはおもや
けやうらしの大事をわきてまづしれ
や、あまた人あつまりてうごめくを見たる心。慈
悲もなく。孔子我子もえむやめくのしき
めうあれりしん人。いとくにおし　と
思ばばんや。人我國ふかくあさひあ
あか見こぼさくは哀人ずまて傳や
まんにあやしく不思議なりおもし
ぬぐ。人の上まで見えるだにつ。
およへるはすなはちにくし　と見
人も物のふはあくやうひめく　高き羽
ねおく烏帽子ゆゞみえもりつし。
まぎたくうげてこはうい我弟子なる。
日本の人と其覚く長く頭髪はえ揃
なく裸のやうなばゆのびて就うちはく
ならでうちかゞひ。無をてる事にもりほ

まことある人はなさけある人にて、たにたしあり
てみづからもてその身をはかなきものにし。されど
わが限り出——て、名をうるものやあれ。但老
らくは法師めし——おさまりてすゑなくてのこ
るに男子もなしとせて、目をあはすくたびに
すゞろがねを尊しとする人はおもふらしも
——いふべし。あるは又鼠の尾いふ——。
きゝすぐしがたくいふ[illegible]あるい
陰者——不幸の人いのかあれはら
ぬて、法師をまもろし——恥ずかしく
いふべきのみにてそいゆる事をなげき
ず——軍に孫よすがたる馬車より落
てあやまち——つ。おのものへぬて。
大路なすおだいゆきて、いはぢ。門の下
なきにたちて、又かいぬる者もあらば
し。老女髪は法師の
おやうおうてかやうやえぬるもちも
それつゝろめきぬるは、かのいのし。うる
るすなしとも此世を為の世も落てく
かぎなうらがりなればもも此世をいとふゆえなら

おゝく。財を失ひ病をまうく。百薬の長とハいへども、萬の病ハ酒よりこそ起れ。憂わするといへど。酔たる人ぞ過にしうさをも思ひ出てなくめる。後の世ハ人の智恵をうしなひ善根をやくこと火のごとくして悪をまし。萬の戒を破りて地獄におつべし。酒をとりて人に飲せたる人五百生が間手なき者に生るとこそ仏は説給ふなれ

○かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨がたきおりもあるべし。月の夜雪のあした花のもとにても心のどかに物がたりして盃出したる萬の興をそふるわざなり。つれづれなる日思ひのほかに友の入きて取おこなひたるも心なぐさむ。なれなれしからぬあたりの御簾の中より御くだ物みきなどよきやうなる気はひしてさし出されたるいとよし。冬せばき所にて火にて物いりなどしてへだてなきどちさしむかひておほく

鎌倉中書王にて御鞠ありけるに雨ふり
て後いまだ庭のかはかざりければいかゞ
せんと沙汰ありけるに佐々木隠岐入道
鋸のくづを車につみておほく奉り
たりければ一庭にしかれて泥土のわづらひ
なかりけりとりためけん用意ありがた
しと人感じあへりけり此事をある
者のかたり出たりしに吉田中納言
の乾砂子の用意やはなかりけると
のたまひたりしかばはづかしかりきいみじと
おもひける鋸のくづいやしくことやうの
事也庭の儀を奉行する人乾砂子を
まうくるは故実なりとぞ

○ある所のさぶらひども内侍所の御神楽
を見て人にかたるとて宝剣をばその人ぞ
もち給へるなどいふをきゝて内なる女
房の中に別殿の行幸には昼御座
の御剣にてこそあれとしのびやかに
いひたりし心にくかりき其人ふるき
典侍なりけるとかや

○の家於沙門道琛上人ハ訪謁を拒まし
ここに波羅乃あるわやけ野といふにす
安置――てここにた首楞厳経を誦
して那蘭陀寺と号を定めや
むかしハ那爛陀寺ハ天竺にありきとぞ。
江州の花とを云つらへまゝも無縁傳
清凝傳などをみしびに見すに乃人あし―。
江州ハ異なる才覚ありてやかれしるし。
覚来節―。唐土の涌泉ハ如意寺の
論なりとや云

○おぎちやうハ正月すおまるぶちやう
ほ。土高院よりつ。那果蔑へおし
て。模あふるや。法性寺の池にうかべ
すゝとハ。那来蔑於池をいふやし
みれくこゆきう白れバ乃おゆ来をいふる。
よもつぎかれきるに似る神バ。桃雪
とふかいきれ桃雪と云べき哉。あやまり
てふんバのとよいふや。愛のや來のなのいそ
うらみ―といふ齢をかやき。昔より
いひある事なや。愛ね他おゆなくお

りしかして雲若みゆるわたりに侍らるゝ
はるかし。讃岐典侍が日記に出でたり
○め條大内にて隆親卿のかゝげしといふものゝ
供奉まゐりしあとにかゝげるまでつくれ
やし。御物・笛るやうありしとぞ。今のや
書なやて大内の鐘といふ事ありけるか
るすてあらんにこそあれ。鐘の事はしらず
ー何条事かあらんあゆの事なれ
あやの雑物の事をやはしるなり
人はたゞ年よれば角を生ずる人もあるにや
舟なきかしこの事なるしと侍るし
をつけずしてく人はやがて持出るほ
ぬしの申せしに人々ある犬をつけよとのふ
ごゝにても是非とかくあるのとゞめ
相撲ちは頼政が八。松下淨元とぞや
なる。歌など、道やさまざまあるまじくて
けたるあつりけるじのやがてかなはず
禅尼も上つくゝ小刀して持ちまゐりして
けるに、これはとの障子の表具をも
ぬのもいめけしてはいくらがれてある

げし男にハ〜をらりんはやうかるすなれ
ばこゝろ素すはこゝやさきくれバ更に君右が
ゆゑにこそもすのより倩ゝじとてしなな
ごろづくりくれ侍るなど此春菜花らかれりわ
らへばりんは。俗るうし多やとくはづし。
まりらすゆもつんぐるしくやと。かはぱして
やけれなる共ば花も後いさはくとハり
ゑへんと思へども似ふかバかバゆとかゐるて
ある心象や物に被れ名る二形りの中を治理
――て用るるぞ無いろる人に見るよるは
てぜつんため。とやしはれなる門とすて
おしうかなふ世にをおさむる道徳紀成ぬ
見生。女性かれども聖人の心にかなへる天
下をしきつ経の人を。すまで寺しみきあるか。
深にしくべくあいあしゝぢーかはゞとよう
○陸奥守素盛ハはうさう島かり
ふかなかるを此素生さとあるす。見ぐを
そろへて――素みとゆへりとこゆこほ
かへてハ。息といひとめる万也とらく。論ぜ要
めへでゐなふ。又定ふのべてきさこす解説め

てまなば是ハ未だならしてあやまち
あるべしとてのうざやかにさを夫う
ばらん人ハうりの事をたれかめんや
○吉田とや馬乗乃申しけるハ馬ことに
こはきもの也。人の力あらそふべからずと
知べし。のるべき馬をバまづよく見て。
強き所弱き所を知へし。次ニ轡鞍の
具にあやふき事やあると見て。心ニ
かゝる事あらバ其馬をはすべからず。此
用意を忘れざるを馬乗とは申なり。
二秘蔵の事也と申しき
○万の道の人。たとひ不堪なりといへど
も。堪能の非家の人にならぶ時。必まさる
事は。たゆみなくつゝしみて。
軽々しくせぬと。ひとへに自由なるとのひ
としからぬ也。芸能所作のみにあらず。
大方のふるまひ心づかひも。おろかにしてつゝし
めるは得の本也。たくみにして
欲しきまゝなるハ失の本也
我ま[illegible]

因果の理なきにあらねど一しかして世の
ここら人にさとしやいひたれば元の
すに酒飲みなりしにかかめず男子
業病ひ父が興事ハ書ぬ者の前
時に請ぎしれ時前者も本人に先こ
ちまりしれまでもしりまて若面んハは
うわるへし さらば父が波に似るものにし
酒ありむすめあんすぐ法師なりし
ずに継ぎ樒般を作すく男子
少しとて早 熟と云ひは習ひ父か
二郎かなやうし休らひに入た道ふ路
くわく出てく哭くことに嘆きける父
ど酒盛面本かぎ侍る云しも良よかず
なか比法師のま本をありしかず盗賊の人
まぎて此るのあかりまを継ぎ語るにつけ
て声なくして大なる道をまぬがし。然
をまつき学者をまなんと時来るなく
あるまのすまど日いはんあまなましくあらず
妻子思ひて耳をこころつかず師
おもわるる自然者の事にのみありけ

れて月日を経よなはことく古事
ましくれ。或ハ光ぬ跡に地の上をまろ
きし思ひし やうさ方をもは称
まことぬなへ 勢なくみべ。きなり
て陰をくるゝ姿のしも 義ハゆくは
ればなのうちむかしあらはしけれ
るの中すいかれはあかるとよく掛けれ
くらべ求めの事 を薬し定て
おいぬひまて言やかむべし一日の中
一日の中すなはちのことわりなくん

まよすがしな莖のまねらん事を
いとおみてをおなべうらきてく念す
まりそくべく既也。何ぞなたなをそし とは
にもまねていふなりもなるべしほいうとも
ば茶なうの人をとりてならはに着人
まめだならでかを捨火てはくがゆ
それにとりて三彩石をもてくすりの右ま
ほしくとやらすしかを控て。かつにつ
をさかれゝそ一なふうちらともよ流れん
かれへきうつくしきを。そやまぬきぬきばお

しくおぼえて。おほくまさらぬ石には
かへにくし。是をもすてず。かれをもとらん
と思ふ心に。かれをもえず。是をも
うしなふべき道也。京にすむ人い
そぎて東山に用ありて既に行つきたりとも
西山にゆきてその益まさるべき事を
思ひえたらば。門より帰りて西山へゆく
べきなり。こゝまでつきぬれば此事をば
先いひてん。日をさゝぬ事なれば。西山の
事はかへりて又こそ思ひたゝめ。と思ひ
て一時の懈怠。すなはち一生の懈怠
となる。是をおそるべし。一事を必なさ
んと思はゞ。他の事の破るゝをもいたむ
べからず。人の嘲をも恥べからず。萬事
にかへずしては。一の大事成べからず。人の
あまたありける中にて。あるものますほ
のすゝき。まそほのすゝきなどいふ事あり。わたのべ
のひじり此事を傳へしりたり。と
語りけるを登蓮法師。其座に侍けるが
きゝて。雨のふりけるに蓑笠やある

あるらし。ゆへに僧の為す事なりといひにかゝは
らず仏法の中なるものゝ云ふにもあらぬを。
あまりに鈍さはかし。商量してことさら人
むりに入れば無下の事なるおほかた
皆く物も人の念に留ぬやはともすつ
ものゝ度に愛有らず。さりとかもうちすてゝ帰
さらんやとて。ますます深くおぼえて
侍るはなかなかに情ある事なれ。しかし
まことにさらに世の中の有様のかはりゆく
とぞ論議すと云ふ文字も侍るなる。此僧
ばかりのしく思ひ返すやうなりつなぎ
因縁なきなりといふべからざるなり
○さはいへるはなはだ入れども、あるまじ
りそぞ此生まで。やむことなくくらし。侍人は
はりあるて。このめぬ人に交り。このあさる
ものゝすがたいふびて。思ひよりぬことばがたり
うちあれぬ。つゞけしの手を思ふ事いふと
まうで。まことあるわざの事にほどはづる——。
ねしは道行。まつ兼て忘れつるには似ば。
一度其時、まつかぬ——一世行思ま丈

あつかはるゝの。あらかなし。語らひがたし。
ゆくのもおふすまのづゝくらず（?）なすとも
あればいはるく物に定なし。私定と心得
ぬるのを深まって（?）いふはずぞ

○妻といふ物二親の了簡なしによき物
者まい（?）揮（?）も嫌ど見つけしまど居すまぞ。
心はよく人れ（?）離れがし。お指子（?）ばぬさるゝ。
又夢ならぬ女を好すべてあまた（?）ちすつれば。
気作に心おちかや。離つかれど（?）やどもまぢれす
おろそかよし。ためりたく法（?）まふて定まりあれ
みなうるめとも嫁くもなしけりそうなきに患は
世なうらば男まで離りて（?）くして。あつ
似とやまもおろそかにもよくさげばやにこう
と覚ゆ。然ばかして。お嫁取りうち成
をこなれおゆめさるぬれにあり。子なをも
けつ置ようし。づ家妻し。さらゆうし。
男なくなって後。は子なかまくも夏よふ
気あり。はや。家業（?）物やのでおはつかしう
なる女成とも眼若老い（?）人んちかいりよみで
きなくなくみかなれん母のためも事あ

にしあらめにはうさすしもかく通れ
をかし。秋の月さへとしてゆふぐれ
とも思ふやうなるはまなきもとすゞ
ねよとかんばかりあはれなりぬべし
○秋にのみ物のあはれはまさるといふ人ことに
おしなべてものごとのみならず色なし
も夜のみあらめでたし。月のまさりはしもう
ぎりなまけし秋まであかん。秋は。さ
ぞかしやのあはれはうちむかひよし。
人のいふ秋のおもむきは
よく聞えし声もくもりてすこ
聞きあるはしもなくしものくる
まゝに秋ぞひとまいらすこし聞えて
こゝろある秋の空ちまでいはる
人の心にまかせていふべしともよし。
されどもいかなるゆかしき人は時なも
わすれぬものかはとうちなげきれ
常ぞけれなひかつくろふやうにし
きよき男ども目をさましまもとなく
あはれをまざりて秋に至て弱なる

はかなくしてかゝることを招きしなり

○神佛にも人のまうでぬ日夜まゐりたる
よろし

○くらき人の人をはかりてその智をしれりと思
はん、さらにあたるべからず。つたなき人
の碁うつことばかりにさとくたくみなるは
かしこき人の此藝におろかなるを見て
己が智に及ばずと定めて、萬の道のたく
み、我道を人のしらざるを見て、己すぐ
れたりと思はんこと、大なる誤りなる
べし。文字の法師、暗證の禅師、たがひ
にはかりて、己にしかずと思へる、共にあた
らず。己が境界にあらざるものをば
あらそふべからず、是非すべからず

○達人の人を見る眼は少しもあやまる
ところあるべからず。たとへば或人の世に虚言
をかまへ出して人をはかることあらんに
すなほにまことゝ思ひて、いふまゝにはから
るゝ人あり。あまりにふかく信をおこして
なほわづらはしく虚言を心得そふる人

あゝ文何とし思ひくゝ心をつけぬ人あり。
みいはくゝろ覚束なくおぼしくこゝの
子もあらずそのむすびもあらで楽し
ぬる人あり文学をしくは覚しき
ども人のうへふるまひをまざゞもあらんとて
覚ゆる人もあり。又はなどくに持し
心ばたるまじしくてらし遊げようそう
なづみかに気みくおさまど。停やく
志ゝぬ人あり。文をいゝおゝしてあやまた
はぐめりと思ひなれなく大なきあやまりぞ
これあれとあやしむ人あり文にとまる
やうもなかりなふたりなをすてやゝふべ
あり。文には惑どもなかだとをいはば
覚束なゝあまりよくのるなし。きゝぬ
人とおそれぬやうすてゝる人あり。又此
庭に荒などと消く。あよか心ばせて。
かしもあざむくばつまんかしこ
人とおもじ子ながらわざあいはるゝ人
あり。寒来暑往歳ゝだ無大るゝ人あり
おこりてはいはほまくのこゝろ祠して

ともかくにもすがりてれはなく出られ出づし
かのしてあきらのおとしし人出まであら
戦ふあやんことに當時お上の物やつかれ
がめし　但しやうな播りかつさく傳
法などをあげ候へ云はるはあしらず
○或人えこの縄を通りけるが小袖に大
にきる人木遣の地形を田舎中の
はやしたてしに右比之にあられなかの
がうたふを捕衆の男二三人出まで
ここにおりしかわって比人を見
しといにくかつ又戦肉おはれまでぞおそ
しまる心学におりしかしけるは
許姫くれやるまでに入まておりしかな
○奈良の神輿東寺お宮よりお渡
座の時源氏の幕いられけるに此度
大将ましけたまはれかるを出づ相図
役所で警固つて伝ふべきしれと申
さきられば陣中のゆるすとひ兵法の心
おも事はいとはず萬將くりはつく
後手仰られけるは此国の法度を

たんてし西大寺乃記をこゝろえられ侍りけれは
養爾無明果思神はまた〜ありける
神社にまうてあそひさゝ浪はおつるへき理は
あかしつおもひもしれける

○藤吉乃僧のかたるをあらはす。完顕の江
緑をいふなり。延喜式にみへしらかすなへ
菜はやし記と人の通号にあり
揚名介にて有様なとを揚名目といふも
ともあり西東要異人あり
櫻川行道法然をや法しは唐土に
乃国や。律の音なし和国にはなき也
我国まて呂旋なるなしとなりや
呉竹は孫竹ならぬは竹は異なりと
清涼殿まちのまへは竹。仁寿殿乃か
にかやうてへ〜まさし呉竹なり
延元丙午年上旬東寺京都成
無内寺記、左記在也
十月は神無月といひて神をす
いふ〜かの〜八十〜し〜路たし
〜文にて書くす但當月諸社のやる

家の記に。此名あるハ此目蓮菩薩
延喜御宮八道まかり給ふぞ云説あれ
ども其事証なし。依る事なけれバ用ひず
まいもに祭日と定めまうすの作法なき
し。日月法住の外毒にも例なきお
したゞしおかしの不吉の作也

○勧請弥仁子。鞠のしるし法法。またいふとして
こゝろさす人なし。道上乃ハ泰天皇世中ま
ではなし。されハ如是の天神に勧請ら
るゝる。撫るに日をまの例ちとふと。鞠
かゝくれしらあきらめ神也。ことに給ふの
真名鞠をならぶ嵐にはなれぬれば
人出にし比ろす縁て幾世の世すは。
君ゆつしること尤なき。能人成る
ものまでうつ時ハ揚器すみもてゆれ作ほ
色るゆ。揚器の掛とよとある法法まつ令
ものやさきあへいたれる人なし　然らず
此叡山子。大師勧請の記傳といふ事
は。慈恵僧正婚めけるを。記録々
とそれなく法書わいそのいと沙汰なし。

やゝはべれども仕りける。其姓にはしとせ
とて申しすがて。まへにおかして、いはるれば。
上人の感涙にむせびまかりにけり
○攝州をゆるさるものはやがて後攝播
州にあるべきのゝ。巻物をばさしてさやの
にまきて。木のあひだより抜れ出でさせ通
しての後は程もなくて後すて程
ころ筆こそおずよし。三條右大臣殿
御遊れき。勘解由小路の中將の館え
参りて、つゝまたて参らするのあひだ
あし。攝播に立てられ侍りし後
御隨身何がし自讃して七箇條あ
ぞおもむきあやしき。格馬藤さだ
主るひとまや。其ひめしをおそれて。
自讃狂事せあり
一人あまりのゝしれて。何見あかさし。さ。
最勝光院の急にて鬼のかたるを見
しろきうちをさへて二度馬はは
まつ物がよし馬にのりて落べし。又
ゲー見物して舟とまわさるに。又當

すゑたる塚ありけり。此には神ありけむ
けれど、しるしもなかりければ、あな
貴と敬ひあがめるに、やまとより此地を
見ゆる物も、ばかりなくおはすてふ
ふるしと古人や、かれ書るに、此おほ
人は声ふかきいん。皇居を建られん
は何ぞたりきのあはれにて、鬼神にも
こしなり。あはれびて、なげきおほ
捨てしとやさきつかたれば、塚なく
して蛇をば大井川にながしてけり。

ほろうたへりまつりしなむ
狸父などの細きゆかに上下ふかくりさき
まちうへこまちおほ中つかたあの郎さ
よしなりはひのまはゆ常の事なりき
かうにもあるなれば、葬送の儀礼
とをてあそびものかたるに此地やうのる
やりとすくしいるりしくるたぐへく
ときまして上つ方下へ。あなめの御やどをゆるしま
させてしこそやかれなからぬ人まて
かうめるにわる人に心あるかなしき

人の田を論ずるものゝうへにまげては
こゝにも田をうつまくされそて。人を
つゝゆ――はるま。此道をかしの田をさへ
うつまてゆくをしまへ論じ給ふ事は
あらず。ゆゑにかしこもいかゞはぜふるもの
ざるはにかえてかくいふべきはいはしとはふ
ふるにばかりも讒謗せんのらくあまりある者
あればいはずかし魔ばかんとそりいは
ける理りにこそおもひしかくなり

○嘆子多く嘆のかなか。まづかいはてまは
あかの鳥とも。いかゞうたてあるに時る――！
ある去云その中にす。嘆ずるまし時招
湿乃法をそなこそ いかにかあり ふるに祇は
禍ゆ 方菓子来の茶穀子にあらぬまずる
おもきま目乃あはゞつゞけより。禍多く嘆
子多のくしきにこゝはなきこゆ
菓ありうべたりもたつゞはまかりのまたる人
ほかのく能なる気ゆへにうつるこいうるる
あからむかなく雨かとしたのむべのことば。
こゝ焦も此ぞさえ。まゝ財あるしとて報

へつらふ者。福のやすく失ひやすし。才あり
とて頼べからず。孔子もはうあはざる法あり
あればとて恃べからず。顔回も不幸にして
早死の賢をもてあそぶの心しは誅せらるゝ
事。桀や紂志をつがへられず。故べからず。
むかしより有事あり。人の志をもつらむ
べからず。此をなす者。物をも損べからず。信
あるをよくなし。先をも人をもとのまざ
まなるはよる時にのみこび悲まるとまい
うらみを先右なるなる積ばさけるす。お
後をを久しければ。器くらしうぶはよき時いひ
しけるに。いは用ることあらしきすしれ
きびしき財は。物よはかれいあらうれて
やすくゆるらしてやりうつるなる時は。毛
も損ずるは。人は天地の宝や天地にかぎる
に明かし人が世をもんぞくもたらん。寛大
すしてまいやすく飛ぶはず。時は喜怒見てす
さりとすして。物の定めすとつくし給ふ

○秋乃月に。かぎりなくめでたきものや。
いはゞ夜半。月はのこるあれとて。おもしれ

ゆうげんんハ定ふまゆうる傀儡すや
此おの大将く失なく時ハ失ハ——、
くまさ給る事し。ゆけりけすからぐちに
うつ主づし——。ゆれバころびおちぬやうす。
必以て。炭をつたへ家あり。八幡乃つ華
に供奉の人ハ浄衣を召てつけまて炭
をはくとられハあこかく威の人ハ何さま
物作をこるのハ火げしきもちなハ色くら
——かくれ君とやあれなり
趙高ヲハ楽ハ女男をとふる松の
名をあらず。或ハ相府蓮。文字のちよ
いふや。晋の王倹お臣として。此にすち
をうゑへて。愛せし。隋若楽府の目を
のせ日本蓮府といふ廻急も廻鶴
あり。廻鶴国とて夷狄古錦国あり。
古く夷漢に侠し——て後乃まつまく。
其のれが国の名を叢とし——や
平定此朝臣。花のくちむし——がくす。
撮ルするへとさあるよひの名すとバ此番く
るるし——ま。ぞてやあるひたくれ

汲みてとらし也──汲とり。又時宜より
く。白盃すゝめさせつゝ給つゝ也。様によれ
ばことやう土器をもちてまゐらすることあり、しかれば
まづ白盃うけてたくのみすゝめてまゐらせ
られにてしうしまゐらせけむ事をそへて
まてゝいづる。此酒をびんにかうへんをはう
ぐし。されバや。御盃を。けうかまゐらせ
かよふ。人は。さづまわぬらん。御かぬべき事あや
あるらんぎ。いかにても求め給ふ事あし
のゝ三ろくかして。白きくをまゐらし
維子。臺子の棚に小土器にみすのかし
つかいさるを見出して。二種ぞまゐらせてさ
ゆるもやし──かはらけもちてとくべし
よく献子及びて。御興子にられ侍べき
ならせまゐらせて一を侍しのもやうさき事
○最初まゐらせ。鶴器の後に。先に
先馬の道の許へ。此時を出して。さとりて
達さがけるは。あるしすう人々しけしらん
ける持ち献にうちあはせて。二献まゐらせ。三献
にいまゐらせてまぬも座をは事也

夫婦。隆辨僧正あるじ方の人にて座せられけり。さて年毎に給はる足利の染物心もとなく候と申されければ。用意しさふらふとて。色々の染物三十。前にて女房どもに小袖に調ぜさせて。後につかはされけり。その時見たる人のちかくまで侍しが語り侍しなり。

○或大福長者云。人は萬をさしおきて。ひたふるに德をつくべき也。貧しくてはいけるかひなし。とめるのみを人とす。德をつかんと思はゞ。すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心と云は他の事にあらず。人間常住の思ひに住して。かりにも無常を観ずる事なかれ。是第一の用心なり。次に万事の用をかなふべからず。人の世にある自他につけて所願無量なり。欲に随て志をとげんと思はゞ。百万の銭ありといふとも。暫も住すべからず。所願はやむ時なし。財はつくる期あり。限りある財をもちて

わざハり家に志んるが富の道への一ツ也
仁義ハさげすむ事あらハ戦をうらやむす
いやしき悪念をきざしてもつらくはげむべく
たくわへし金銀をまもらんとすれバ。次ハ銀
ぬのごとくして。仁ハかれをもとむる事と
もとめばあがく貧者をすゝむるべからず。
君子ハ…くじけ邪路にも足をふみ入れずして
みるに。志ゆへもとむる事あれバ。次
恥じのゑたへぶとも。怒りうらみるう
さうまき。次ハ正道をまもりして納をうく
まてし。此仁義なるかゆへにりて私をもとめん
人ハ富の来るゝ大切のほどもかけつゝハ。天
のくずれるにあらずがいふごとくなるべし。
錢つもりてつきざるハ。家業に次第に色
をこらして義のほうをのぼらず。仁義を成
ざれバもとめてとしてあへてやむなくこの
して。他人に仁義を成さんがため。財な
来むる者を財とするハ願ひとならずふる
ず。銀や仁義をもつて。…あれど
もとめちゆんハ。金。貧来とおぼゆし。

何をか乞食なりとも、死生を歎てハ、ただ人の
の世はさらて貧を憂ずべからず
こゝろが欲をはじしてるの一ひやもん
ずかハ老の一財宝の一れするに、癰疽ぞ
かも老、妻子眷属の一ひと跡ん
ふかハやさ、ぼうんまい老ず一。こゝにつかり
てハ、貧窮やなに眼一。寛喜ハ理屈に
ひら一天狗の業欲に似たり
狐ハ人にとりつくものぢや。摂川辺まで使人
ず渡さる足をも狐にのりて仁和寺まで。
愚なる者をとかする下法師に狐三
疋かりて、とりつきられバ力をぬきて
足をもすぐ、扨、狐三疋をはしくおるつは
つるところ一。扨二いすげぬ、法師ハあきる
ばくれ寄のへこーも中へ寄りかりけり
が条黄門卿ぞもれく云殺狄は道で
あり、て、やんるもの来也。先日まで
云短冊をはさみけり。さて某孫某郎
とれざる横笛の名の穴ハ、細りふの一き
あるいは使ことのもれえるて見せあはれ。と報じ

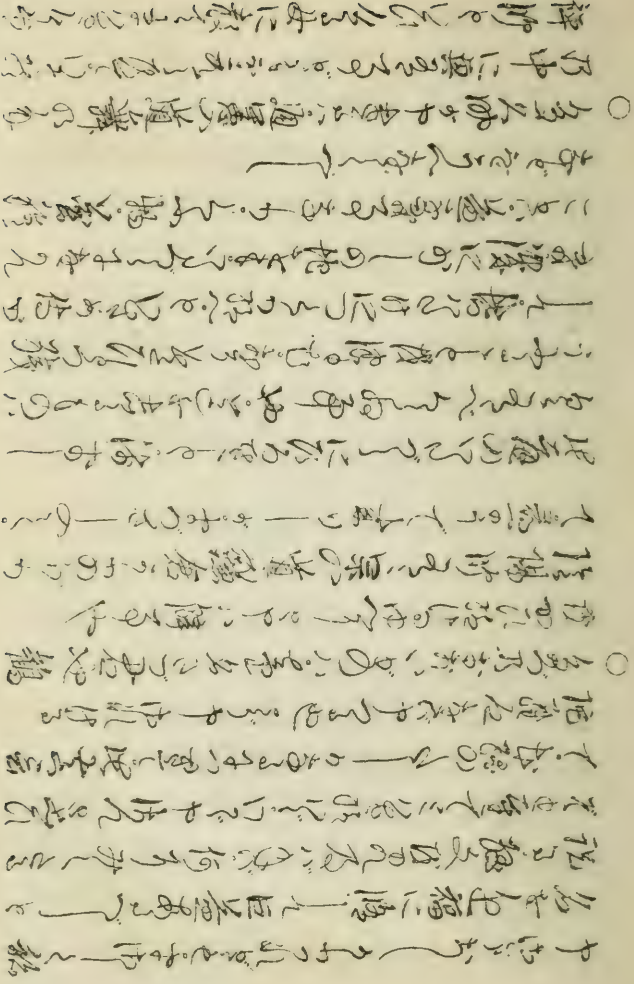
平の穴ハ平調。五の穴ハ下無調也。六の穴
に勝絶調。じつにちかく上の穴双調。次。
鳧鐘調。又裏の穴黄鐘調也。
其次ハ鸞鏡調を置て。中の穴盤
渉調。中と口との両孔ハ神仙調あから
さうて見るに一律をせめるに五の
穴のみ上移る調子定まらずして。其の
もちをくぐるなりとし云へり。其声
不快也。されバ此穴を吹時ハ世のくだけ
無べぬ時ハ物に和けし。吹うる人すくなし
やき料管の穴わり深真あり。先達
後生をそえると云、と記ありあかと
皆なかき。他は薬物がやらし。笙ハ
吹べきよしなどして。其らに心をこそ吹ばやせ。
絶は吹きなど世からうちなほてかつむべ
立てゆく物ならば穴ごとに伝移上に。
脏骨吹く度へをまない中ること。五行穴移
みにさ寄ども。人ろのことけたもしらぶ
むづけ。あしくあけバいづくの穴も
いろいか、音。上あい入れまま吹あまする。

呂律の物にかなはざるは人のとがなり
器の失にあらずと申しき
何事も辺土はいやしくかたくななれど
も天王寺の舞楽のみ都に恥ぢずと
いへば天王寺の伶人の申し侍りしは当寺の
楽はよく図をしらべあはせてものゝねの
めでたくとゝのほり侍る事ほかよりも
すぐれたりゆゑは太子の御時の図いまに侍る
をはかせとすいはゆる六時堂の前の鐘
なりその声黄鐘調のもなかなり寒暑
に随ひてあがりさがりあるべきゆゑに二月
涅槃会より聖霊会までの中間を
指南とす秘蔵の事也此一調子をもち
ていづれの声をもとゝのへ侍るなりと
申しき凡鐘のこゑは黄鐘調なるべし
是無常の調子祇園精舎の無常院
の声なり西園寺の鐘黄鐘調に
いらるべしとてあまたゝびいかへられ
けれどもかなはざりけるを遠国よりたづね
出されけり浄金剛院の鐘

殊、音又黄鐘調也

○建治弘安の比ハ祭の日の放免につけ物にことやうなる紺乃布四五反にて馬をつくりて。尾髪にはとうしみをしてくものゐかきたる水干につけて。歌の心などいひてわたりし事。つねにみおよひ侍しなとも興ありてしたる心ちにてこそ侍しかと老たる道志どもの。けふもかたり侍るなり。此比はつけもの年を送りて。過差ことのほかになりて。万のおもき物をおほくつけて。左右の袖を人にもたせて。みづからはほこをだにもたず。いきつきくるしむ有様いと見苦し

竹谷乗願房。東二条院へまいられたりけるに。亡者の追善には何事か勝利おほきとたつねさせ給ひければ。光明真言。宝篋印陀羅尼と申されたりけるを。弟子どもいかにかくは申給けるぞ。念仏にまさる事候まじとは。など申給はぬぞやと申ければ。わが宗なれば。さこそ



白き水干にさや巻をささせ烏帽子をひき入れたりければをとこ舞とぞいひける禅師が娘しづかといひける此芸をつげり是白拍子の根元也仏神の本縁をうたふ其後源光行おほくの事をつくれり後鳥羽院の御作もあり亀菊にをしへさせ給けるとぞ

後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の誉ありけるが楽府の御論議の番にめされて七徳の舞をふたつわすれたりければ五徳の冠者と異名をつきにけるを心うき事にして学問をすてて遁世したりけるを慈鎮和尚一芸あるものをばしもべまでもめしおきて不便にせさせ給ければ此信濃入道を扶持し給けり此行長入道平家物語を作りて生仏といひける盲目に教へてかたらせけりさて山門の事をことにゆゆしくかけり九郎判官の事はくはしく知て書のせたり蒲冠者の

事ハよくしらざりけるにや。おほくの

ことどもをしるしもらせり。武士の事弓

馬のわざハ生仏東国のものにて武士に

問きゝてかゝせけり。かの生仏がむまれつきの

声を今の琵琶法師ハ学びたるなり

○六時礼讃ハ法然上人の弟子安楽と

いひける僧経文をあつめて造りてつとめに

しけり。其後太秦善観房といふ僧

ふしはかせを定めて声明になせり。一念

の念仏の最初なり。後嵯峨院の御代より

はじまれり。法事讃も同じく善観房

はじめたるなり。千本の釈迦念仏ハ文永

の比。如輪上人これをはじめられけり

よき細工ハすこしにぶき刀をつかふと

いふ。妙観が刀ハいたくたゝず

五条内裏にハ妖物ありけり。藤大納言殿語

られ侍りしハ。殿上人ども黒戸にて

碁をうちけるに御簾をかゝげて見る

ものあり。たぞと見むけたれバ狐人のやう

についゐてさしのぞきたるを。あれ狐

さうさうはやりくおもひすげにくわ未練
だ故そけるんし　ぶとうこそ
うめ一お當の姿は[illegible]庖丁未也。
おふ人のなさるまてるが一き鯉ない
ぶかなりは性の人當の道の庖丁とえ
ばやも思ひ[illegible]うちいてんもい
の一わ[illegible]別當人と[illegible]
人[illegible]鯉日[illegible]鯉[illegible]作る[illegible]
の[illegible]作るに[illegible]りてや請ん
もて[illegible]みし[illegible]つ[illegible]く

負人與あうて人のを思ひ[illegible]あるに人
小山六郎のお庭に[illegible]やさ[illegible]
したば[illegible]やうの[illegible]その[illegible]
光ゆるせ申[illegible]人[illegible]
もりかしりしんは[illegible]何膳
百日の鯉をそんぞの[illegible]のたたり一お
うしく光へしも人殺[illegible]けるにの
折り一大[illegible]ある[illegible]
あて[illegible]
宗[illegible]人の饗膳をとらりてむの一き

やうにとりなしたるも。まことによけれど
も。たゞその事となくてとり出たる。いと
よし。人に物をとらせたるも。ついでなく
て。是を奉らんといひたる。まことの志也。
惜むよしして。こはれんと思ひ。勝負の
負わざにことつけなどしたる。むつかし。

○すべて人は無智無能なるべきもの也。
ある人の子の。見ざまなどあしからぬが。
父のまへにて人と物いふとて。史書の文を
ひきたりし。さかしくはきこえしか
ども。尊者の前にてはさらずともと覚
えし。又ある人の許にて琵琶法師
の物がたりをきかんとて。琵琶をめしよせ
たるに。ぢうのひとつおちたりしかば。作りて
つけよと云に。ある男の中にあしからず
と見ゆるが。古きひさくの柄ありやなど
いふを見れば。爪をおほしたり。琵琶
などひくにこそ。めくら法師の琵琶。其
沙汰にも及ばぬこと也。道に心得たる
よしおもはれんにやと。かたはらいたかりき。

[illegible]

さやうの事をまさて〳〵其人にいはゞ[illegible]
なし〳〵は[illegible]かいかに[illegible]神なれは
ある[illegible]の[illegible]にのみ[illegible]思ひしは
ありやうはいつはりなし世を[illegible]
あり山ぶしはつゞらを[illegible]
しあれば[illegible]
こうもん家[illegible]
お[illegible]いまれ[illegible]人[illegible]や
[illegible]人[illegible]
[illegible]
道行人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

やうはべらぬもの仕りける。其後に申しせ
よりて申しまかりて。さへありていまゐれば。
上人の威徳ふかくすみけり
○撰摺りもゆるものハ。みて申す撰摘
船になるべきをや。巻軸まで入れてさやの
にあまて。其のあいだより紙れしかも通
ーてのぼりく折もして申す子細
なる筆ところおほかりし。三條右大臣殿
御雅札に。勘撰中小路のお殿の能書
の人々に。よろづすがたて有子なりける
あし。此撰摘に書て一見候がまま
御後見を申す自讃として御筆集書
とぞ。ふ所をあり。法眼乗さたる事も
おほかりしを。其されしを抄りれて。
自讃なす事も也あり
一人あまりのみ見てあひ見あかりなし事。
最勝光院の念すてが。其の一なるます
ーーしろ言を申てしと。三度馬は
なる物ふりば馬をふりくら落ちし。其
りし見物申てまよまりに。又る

なをはかくいふむるにつけて高きによりてはおよばぬかな
しるし無やの人泥古の事なりといふべし
潤色やかすくはあらですなはち歌人の説は
当代の事は聞なれば一まつりし此
むかしの隠れにして堀川右衛門殿
同様なりしかしもうしへ用ひ
さく系りなわしよ補語の五六の巻
たとへありたげれどもさと浦にまで尽
の朱つきひとを悪む文は晩覚
せられし人歌子あらばなき勝ず
がさは勝しおけれぬが古代よりく
ひとがらをや作るまでゝ来るものかは
まおろ雅もふ丸の巻などこそへの説
すぐるとやうなわし詠はあまり講じ
ころく、まてさいはひのなかののほとり
見ところ堂の中にあれど著作人は
いはゆるのるすなはちみじかく自讃し
たる也。清香隠居の許に論じ様
ぬる一首につきてあしうかなしんやも。
ういたまは君おもひし事なり

秋の野乃草むらもとの露すくなくて
かよいでゝおもへ袖にも見ゆへんを
侍れバ。何事かはさふらへかへきにやさふらはむ
さふらふも。時ならずあはれにて。此歌を覚え
俳諧の道の冥加にかなふ逢ふやうなれど。
又しくありし事ありし侍るなり。
九條相國伊通公の芳翰状有ける事、と
まゐらせ題目をよく詠ずのみにて、自
讃せられ侍らず

一 常在光院のつき鐘乃銘ハ、岳兼に
の草ありける句をよ清書――して
さまざまあんとせしに。字まりおのづから
に異を好出してかれ是伝し――まうちの
おにげなき事ありしかバ。南面里にきこゆ
と云句あり。陽唐の韻と見ゆる也。
西望あやまりぬとやうらみましなんど
見えまゐりける。その外たがふ名あらむと
て、当世の詩人へいひやりたるに。西や
まや侍れ。彼のとかく見ゆるべし
と沙汰侍るとき。数ケ所あるべき哉

まさに名歩のはり。光来まし
秡りきは不審。然はあるや　鐘四五
出るを声をや。ここをよくやゆるべや
一　人あまり有まれて三塔巡礼の事
申し上ぐ。摂川の常行堂並びに。
蓮華院とうける所の額あり。洗理
の儀のあはれぶうらびあかて。いまだ染
つまや僧らかし。堂僧引き番や
御しき。とり殿ありしは重裏出るべし。
洗理有りバうつかきまでぞ候。といふ
云ひしに重裏は茎つかね。出の筆まで
いふなげ有るよしく御のごとくして。名
つく侍りず。別殿位署名字。御居。
いふべきみし侍りし。その人[illegible]真子の
一　欝蘭陀寺まで。道源善住は義なし
かば八哭と云ふるを云はれて。是やあらく
持ちせいなし。僕に化あり笑ひしばか
したうかの乃肉かた。是としてやと云
ありしまでばいみしく感じ侍りき
一　賢[illegible]侍従に有まれて。如揚く家

凡信士は、いまだそのぬなりがたに。借[illegible]
おゐて法しす。[illegible]おひて借[illegible]
みし[illegible]法師[illegible]ゆへしく。もとめ[illegible]
まゐる同じく[illegible]大衆[illegible]あつて。
[illegible]あるあへずまいれて[illegible]
てけ[illegible]しきあまずびしそれ
なる。ゆくおは[illegible]といはれしまむか
のくぼて[illegible]しててかめ
一 二月十五日。月あつきまうちるけ
て。子細の[illegible]すきでくうしろより
のてひらわる[illegible]して。聴や
し御しす[illegible]の[illegible]人
[illegible]なるおか[illegible]て[illegible]まかゆ
[illegible]にしきなどうつるばかりなきが。
かれなりしと出ひく。まかのきなるす。
[illegible]ねへつて[illegible]ひとも
ぬ。其後ある法師の[illegible]の。
そぐろじゃ。いしつけしては先下に
名[illegible]人に[illegible]なんおし
入てやすつる[illegible]

の別ありて迷ふ人おほかるをのミこそあれ
出し給ひて后の宮に渡御ありし時は
かへて御ともに供奉し侍り中にも
供奉の人々の衣裳いと花やかなり人の
心にまかせて出立ける母不知
よろこびあへりしはなかなか御なり
楽しきことかぎりなく参りて
まいりたるにそありけるとぞ

○八月十五日九月十三日は婁宿也以酒
請取おほく月に似たる夜景まて

○吉野の山の桜の花のさかりには
の山まで人ゆかぬはなし
にほひよはく花をあひし
おもしろきをおもふあはれ
めでたきことをおもふへき
けやけく世にある人の
まことに法師あまの者妻人
ともなひてさそひあへる
なき世の人何事か似る
いかなる人もわすれぬ

[illegible]

さまよふばかる。終ハ。常住ずる生涯の盛なる
朝夕て。世の中に人おそろしくゆるすを感じ
て後。楽にいとゞ無情ちんと思ふかなず。
病ならまく死ゆるをおそるる時。仏祖一事も
後をまずしふかたくて。年月の謝息なく
晴て。誠に更にちらあなりて命をすぼ
白。老ず來らなりよつ栄て。世る暮らすを
こゝろに成じてんいとまあれをおこしまう
めど。やがてむかゆきば。思ひ出もあらず。
忍みざしてりそ。ぬ。世さぞひのみあう
あらぬ。世ろうかがへて行きぼろうおもく
てし分別を成じて。後跡あかりて。道
まじはりんと遊ばにほつくべつしば。幻の
世の中に何をかもとむべけすでに一度
怯にほれ。抱きに任すきとへば。毒の中道乱
是を以て。こゝろさまもなれべきば。道に至
る其味一して。かたすむの満さけれ
あさ。心退さらて。いまたあらくかるや
此のこりしぶべし。庵晴まつりさる事。は
ひとへ。老楽のためや。人来たりふにしぬみ

愛する事なり。是をもとむる事。やむ時
なし。楽欲する所。一には名なり。名に二種
あり。行跡と才藝との誉なり。二には色
欲。三には味なり。万の願ひ此三にはしか
ず。是顛倒の相よりおこりて。若干の
わづらひあり。もとめざらんにはしかじ
八になりし年。父に問て云。佛は如
何なるものにか候らんといふ。父が云。仏には
人のなりたるなりと。又問。人は何
として仏には成候やらん。父又仏の
をしへによりてなるなりとこたふ。又問ふ
教候ける仏をば。なにがをしへ候ける
と。又答ふ。それも又さきの仏の教
へによりて成給ふなりと。又問ふ。其
教はじめ候ける第一の仏は。如何なる仏
にか候けると云ふ時。父。空よりやふりけ
ん。土よりやわきけんといひてわらふ。
問つめられて。え答へずなり侍りつ
と。諸人にかたりて興じき。

這兩帖吉田兼好法師燕居之日徒然向
暮染筆寫情者也頃泉南亡羊處士
箕踞洛之草廬而談李老之虛無
說莊生之自然且以暇日對二三子戲講
焉加之以樣之命於工鏤諸梓而付
與二三子矣越句讀清濁以下俾予糾
之予也好其志忘其醜卒加校訂而已
猶恐有其遺逸也

慶長癸丑仲秋日

黄門
光廣

はき〳〵草

つれづれなるままに、日暮らし硯に向ひて、心に移り行く由無し事を、そこはかと無く書き付くれば、怪しうこそ物狂しけれ。

いでや、此の世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。帝の御位は、いとも畏し。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様は更なり、常人も「も[舎]補」舎人など賜はる際は、ゆゆしと見ゆ。其の子、孫までは零落れにたれど、猶艶めかし。其れより下つ方は、程に付けつつ、時に遇ひ、得たり顔なるも、自らはいみじと思ふらめど、いと口惜し。「法師ばかり羨ましからぬ者は有らじ。人には木の端のやうに思はるるよ」と、清少納言が書けるも、げに然る事ぞかし。勢猛に喧騒りたるに付けて、いみじとは見えず。増賀聖の云ひけんやうに、「名聞苦しく、仏の御教に違ふらん」とぞ覚ゆる。一向の世捨人は、なかなか有らまほしき方も有りなん。人は容貌、有様の勝れたらんこそ有らまほしかるべけれ。物打云ひたる、聞きにくからず。愛敬ありて言葉多からぬこそ、飽かず對はまほしけれ。めでたしと見る人の心劣りせらるる、本性見えんこそ口惜しかるべけれ。品格、容貌こそ生れ付きたらめ、心は何どか賢きより賢きにも移さば移らざらん。容貌、心様善き人も、才無く成りぬれば、品格下り、顔憎さげなる人にも立ち交りて、かけず気圧るるこそ本意無きわざなれ。有りたき事は真しき文の道、作文、和歌、管絃の道、

また有識に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲をかしくて拍子取り、痛ましうする物から、下戸ならぬこそ男は好けれ。

古の聖の御代の政をも忘れ、民の愁へ、國の損はるるをも知らず、萬づに淸らを盡して、いみじと思ひ、所狹き樣したる人こそ憂たて思ふ所無く見ゆれ。「衣冠より馬、車に至るまで、有るに從ひて用ひよ。美麗を求むること勿れ」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「朝廷の奉り物は、疎かなるを以つて善しとす」とこそ侍れ。

萬づにいみじくとも、色好まざらん男は、いと蕭蕭しく、玉の巵の當無き心地ぞ爲べき。露霜に萎垂れて、所定めず惑ひ歩りき、親の諫め、世の譏りを愼むに、心の暇無く、往さ來るさに思ひ亂れ、然るは獨寢がちに睡眠む夜無きこそをかしけれ。然りとて、一向遊戲れたる方には有らで、女に容易からず思はれんこそ、有らまほしかるべきわざなれ。

後の世の事、心に忘れず、佛の道疎からぬ、心にくし。

不幸に、愁へに沈める人の、頭下ろしなど、ふつつかに思ひ取りたるには有らで、有るか無きかに門鎖し籠めて、待つ事も無く明し暮したる、然る方に有らまほし。顯基中納言の云ひけん「配所の月、罪無くて見ん事」、然も覺えぬべし。

我身のやんごとなからんにも、況して數ならざらんにも、子と云ふ者無くて有りなん。前中書王、九條太

政大臣、花園の左大臣、皆、族絶えん事を願ひ給へり。染殿の大臣も「子孫おはせぬぞ善く侍る。末の後れ給へるは悪ろき事なり」とぞ、世繼の翁の物語には云へる。聖徳太子の御墓を、豫て築かせ給ひける時も、「此處を切れ、彼處を斷て、子孫有らせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

化野の露、消ゆる時無く、鳥部山の煙、立ち去らでのみ、住み果つる習ひならば、如何に物の哀れも無からん。世は定め無きこそいみじけれ。命有るものを見るに、人ばかり久しきは無し。蜉蝣の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬも有るぞかし。つくづくと一年を暮す程だにも、此上無う長閑けしや。飽かず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそ爲め。住み果てぬ世に、醜き姿を待ち得て何かは爲ん。命長ければ恥多し。長くとも、四十に足らぬ程にて死なんこそ、目安かるべけれ。其程過ぎぬれば、容を愧づる心も無く、人に出で交らはん事を思ひ、夕の日に子孫を愛し榮行く末を見んまでの命を有らまし。ひたすら世を貪る心のみ深く、物の哀れも知らず成り行くなん、淺ましき。

世の人の心惑はすこと、色欲には如かず。人の心は愚かなるものかな。匂ひなどは假の物なるに、暫く衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、眞に手、足、膚などの淸らに肥え膏づきたらんは、外の色ならねば然も有らんかし。

女は髮のめでたからんこそ人の目立つべかめれ。人の程、心ばへなどは物打云ひたる氣はひにこそ物越し

にも知らるれ。事に觸れて打有る樣にも人の心を惑はし。すべて女の打解けたる寢も寢ず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにも能く堪へ忍ぶは、唯だ色を思ふが故なり。眞に愛著の道、其根深く、源遠し。六塵の樂欲多しと云へども、皆厭離しつべし。其中に、唯だ彼の惑ひの一つ止め難きのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、變る所無しとぞ見ゆる。然れば女の髮筋を縒れる綱には大象も能く繫がれ、女の履ける足駄にて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ云ひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るべく愼むべきは、此惑ひなり。

家居の調和しく有らまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興ある物なれ。貴き人の長閑やかに住み成したる所は、差し入りたる月の色も一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしく燦らかならねど、木立物古りて、わざとならぬ庭の草も心ある樣に、簀子、透垣の便りをかしく、打有る調度も昔覺えて安らかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くの工匠の心を盡して磨き立て、唐の、日本の、珍しく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず造り成せるは、見る目も苦しく、いと侘びし。然てもやは長らへ住むべき。また時の間の煙とも成りなんとぞ打見るよりも思はるる。大方は家居にこそ事樣は推し量らるれ。後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶居させじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶の居たらん、何かは苦しかるべき。此殿の御心然ばかりにこそ」とて、其後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、何時ぞや繩を引かれたりしかば、彼の例思ひ出でられ侍りしに、「まことや、烏の群れ居て池の蛙を取

りければ、御覽じ悲ませ給ひてなん」と人の語りしこそ、然てはいみじくこそと覺えしか。德大寺にも如何なる故か侍りけん。

神無月の頃、栗栖野と云ふ所を過ぎて、或る山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道を踏み分けて、心細く住み成したる庵あり。木の葉に埋もるる筧の雫ならでは、つゆ音なふもの無し。閼伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人の有ればなるべし。斯くても在られけるよと、哀れに見る程に、彼方の庭に大きなる柑子の木の、枝もたわわに生りたるが、周圍を嚴しく圍ひたりしこそ、少し事冷めて、此木無からましかばと覺えしか。

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく云ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、然る人有るまじければ、つゆ違はざらんと對ひ居たらんは、獨り有る心地やせん。互に云はん程の事をば、げにと聞く甲斐あるものから、聊か違ふ所も有らん人こそ、我は然やは思ふなど爭ひ憎み、然るから然ぞとも打語らはば、徒然慰まめと思へど、げには少し歎つ方も、我と等しからざらん人は、大方の由無し事云はん程こそ有らめ、眞實の心の友には遙かに隔たる所の有りぬべきぞ侘びしきや。

獨り燈の下に書を披げて、見ぬ世の人を友とするこそ、此上無う慰むわざなれ。書は文選の哀れなる卷卷、白氏文集、老子の語、南華の篇。此國の博士どもの書ける物も、古のは哀れなる事多かり。

和歌こそ猶をかしきものなれ。卑しの賤、山賤の爲業も云ひ出づれば面白く、恐ろしき猪も、「臥猪の

末」と云へば優しく成りぬ。此頃の歌は、一節をかしく云ひ協へたりと見ゆるは有れど、古き歌どものやうに、如何にぞや、詞の外に哀れに氣色覺ゆるは無し。貫之が「絲に縒る物なら無くに」と云へるは、「古今集」の中の歌屑とかや云ひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべき言柄とは見えず。其世の歌には、姿、言葉、此類ひのみ多し。此歌に限りて斯く云ひ立てられたるも知り難し。「源氏物語」には、「物とは無しに」とぞ書ける。「新古今」には、「殘る松さへ峰に寂しき」と云へる歌をぞ云ふなるは、眞に少し碎けたる姿にもや見ゆらん。然れど此歌も、衆議判の時、善ろしき由沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されける由、家長が日記には書けり。歌の道のみ古に變らぬなど云ふ事も有れど、いさや、今も詠み合へる同じ言葉、歌枕も、昔の人の詠めるは更に同じ物にあらず。易く素直にして、姿も清げに、哀れも深く見ゆ。「梁塵祕抄」の郢曲の言葉こそ、また哀れなる事は多かめれ。昔の人は、如何に云ひ捨てたる言種も、皆いみじく聞ゆるにや。

何處にも有れ、暫し旅立ちたるこそ、目覺むる心地すれ。其邊り、此處、彼處、見歩りき、田舍びたる所、山里などは、いと目馴れぬ事のみぞ多かる。都へ便り求めて文遣る。「其事、彼の事、便宜に忘るな」など、云ひ遣るこそをかしけれ。然樣の所にてこそ萬づに心遣ひせらるれ。持てる調度まで善きは善く、能ある人、容貌好き人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺、社などに忍びて籠りたるもをかし。

神樂こそ、なまめかしく面白けれ。大方物の音には、笛、篳篥、常に聞きたきは琵琶、和琴。

山寺にかき籠りて、佛に仕うまつるこそ、徒然も無く、心の濁りも清まる心地すれ。

人は己れを節儉にして、奢を退けて財を持たず、世を貪らざらんぞ、いみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。唐土に許由と云ひつる人は、更に身に隨へる貯へも無くて、水をも手して捧げて飮みけるを見て、瓢と云ふ物を人の得させたりければ、或時、木の枝に掛けたりけるが、風に吹かれて鳴りけるを、喧しとて捨てつ。また手に掬びてぞ水も飮みける。如何ばかり心の中清涼しかりけん。孫晨は冬の月に衾無くて藁一束ありけるを、夕には是れに臥し、朝には收めけり。唐土の人は是れをいみじと思へばこそ記るし留めて世にも傳へけめ。此國の人は語りも傳ふべからず。

時節の移り變ることこそ物毎に哀れなれ。「物の哀れは秋こそ増され」と人毎に云ふめれど、其れも然る物にて、今一際心も浮き立つ物は春の景色にこそ有めれ。鳥の聲なども、殊の外に春めきて長閑やかなる日影に、垣根の草萠え出づる頃より、やや春深く霞み渡りて、花もやうやう氣色立つ程こそ有れ、折しも雨風打續きて、慌だしく散り過ぎぬ。青葉に成り行くまで、萬づに唯だ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂ひにぞ古への事も立ち返り戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤の覺束なき樣したる、すべて思ひ捨て難き事多し。「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに繁り行く程こそ、世の哀れも、人の戀しさも増され」と、人の仰せられしこそ、げに然るものなれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗取る頃、水鷄の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、卑しき家に夕顏の白く見えて、蚊遣火燻ぶるも哀れなり。六月祓またをかし。七夕祭こそ艶めかしけれ。やうやう夜寒に成る程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稻

田刈り乾すなど、取り集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。云ひ續くれば、皆「源氏物語」、「枕草紙」などに事古りにたれど、同じ事また今更に云はじとにも有らず。思しき事云はぬは腹膨るるわざなれば、筆に任せつつ、あぢきなきすさびにて、掻い破り捨つべき物なれば、人の見るべきにも有らず。さて冬枯の氣色こそ秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り留まりて、霜いと白う置ける朝、遣水より烟の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人毎に急ぎ合へる頃ぞ、又無く哀れなる。荒凉じき物にして、見る人も無き月の寒けく澄める廿日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、哀れにやんごとなき。公事ども繁く、春の準備に取り重ねて催し行はるる樣ぞいみじきや。追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。晦日の夜甚う暗きに、松ども點して、夜半過ぐるまで人の門叩き、走り歩りきて、何事にか有らん、事事しく喧騒りて、足を空に惑ふが、曉方より、さすがに音無く成りぬるこそ年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは此頃都には無きを、東の方には猶する事にて有りしこそ哀れなりしか。斯くて明け行く空の氣色、昨日に變りたりとは見えねど、引き變へ珍しき心地ぞする。大路の樣、松立て渡して、華やかに嬉しげなるこそ又哀れなれ。

某とかや云ひし世捨て人の「此世の羈絆持たらぬ身に、唯だ空の名殘のみぞ惜しき」と云ひしこそ、眞に然も覺えぬべけれ。

萬づの事は月見るにこそ慰むものなれ。或人の「月ばかり面白きものは有らじ」と云ひしに、また一人、

「露こそ哀れなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かは哀れならざらん。月花は更なり、風のみこそ人に心は付くめれ。岩に碎けて淸く流るる水の氣色こそ、時をも分かずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に止まる事少時もせず」と云へる詩を見侍りしこそ哀れなりしか。嵆康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば心樂ぶ」と云へり。人遠く、水草淸き所に彷徨ひ歩きたるばかり、心慰む事は有らじ。

何事も、古き世のみぞ慕はしき。今樣は無下に卑しくこそ成り行くめれ。彼の木の道の工人の作れる美くしき器物も、古代の形こそをかしと見ゆれ。文の詞などぞ昔の反古どもはいみじき。唯だ云ふ言葉も、口惜しうこそ成りもて行くなれ。古は「車擡げよ」「火掲げよ」とこそ云ひしを、今樣の人は「持て上げよ」「搔き上げよ」と云ふ。主殿寮の「人數立て」と言ふべきを、「炬火白くせよ」と云ひ、最勝講の御聽聞所なるをば、「御講の廬」とこそ云ふを、「講廬」と云ふ。口惜しとぞ古き人は仰せられし。

衰へたる末の世とは云へど、猶九重の神さびたる有樣こそ、世づかずめでたきものなれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじと聞ゆべし。卑しの所にも有りぬべき小蔀、小板敷、高遣戶なども、めでたくこそ聞ゆれ。「陣に夜の設けせよ」と云ふこそいみじけれ。「夜の御殿のをば、搔燈疾うよ」など云ふ、又めでたし。上卿の陣にて、事行へる樣は更なり、諸司の下部どもの、得たり顔に慣れたるもをかし。然ばかり寒き夜もすがら、此處彼處に睡り居たるこそをかしけれ。「內侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり」とぞ、德大寺の太政大臣は仰せられける。

齋宮の野の宮におはします有樣こそ、優しく面白き事の限りとは覺えしか。「經」、「佛」など忌みて、「中子」、「染紙」など云ふなるもをかし。すべて神の社こそ、捨て難く艶かしきものなれや。物古りたる森の氣色もただならぬに、玉垣傷渡して、榊に木綿懸けたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅の宮。

飛鳥川の淵瀨、常ならぬ世にし有れば、時移り事去り、樂び悲しび行き交ひて、華やかなりし邊りも、人住まぬ野らと成り、變らぬ住家は人改まりぬ。桃李物言はねば誰と共にか昔を語らん。況して見ぬ古の、やんごとなかりけん跡のみぞ、いとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志留まり、事變じにける樣は哀れなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ帝の御後見、世の固めにて、行末までと思し置きし時、如何ならん世にも、斯ばかり褪せ果てんとは思してんや。大門、金堂など近くまで有りしかど、正和の頃南門は燒けぬ。金堂は其後倒れ臥したるままにて、取り建つるわざも無し。無量壽院ばかりぞ其形とて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて竝びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、鮮明に見ゆるぞ哀れなる。法華堂なども未だ侍るめり。是れも又何時までか有らん。斯ばかりの名殘だに無き所所には、自ら礎ばかり殘るも有れど、分明に知れる人も無し。然れば萬づに見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ。

風も吹き敢へず移ろふ人の心の、花に馴れにし年月を思へば、哀れと聞きし言の葉毎に忘れぬものから、

我世の外に成り行く習ひこそ、亡き人の別れよりも勝りて悲しきものなれ。然れば白き絲の染まん事を悲び、路の衢の分かれん事を歎く人も有りけんかし。堀川院の百首の歌の中に、「昔見し妹が垣根は荒れにけり茅花交りの菫のみして。」寂しき氣色、然ること侍りけん。

御國讓の節會行れて、劍、璽、内侍所渡し奉らるる程こそ、限り無う心細けれ。新院の下り居させ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや。「殿守の伴の御奴外にして掃はぬ庭に花ぞ散り敷く。」今の世の事繁きに紛れて、院には參る人も無きにぞ寂しげなる。斯かる折にぞ人の心も顯れぬべき。

諒闇の年ばかり哀れなる事は有らじ。倚廬の御所の樣など、板敷を下げ、葦の御簾を懸けて、布の帽額粗粗しく、御調度ども疎略に、皆人の装束、太刀、平緒まで、異様なるぞ忌忌しき。

靜かに思へば、萬づに過ぎにし方の戀しさのみぞ爲ん方無き。人靜まりて後、長き夜のすさびに、何と無き具足取りしたため、遺し置かじと思ふ反古など破り棄つる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる、見出でたるこそ、唯だ其折の心地すれ。此頃在る人の文だに、久しく成りて如何なる折、何時の年なりけんと思ふは哀れなるぞかし。手馴れし具足なども、心も無くて變らず久しき、いと悲し。

人の亡き跡ばかり悲しきは無し。中陰の程、山里などに移ろひて、便り惡しく狹き所に數多相居て、後のわざども營み合へる、心慌ただし。日數の早く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。果ての日はいと情無う、互に云ふ事も無く、我賢げに物引きしたため、散り散りに行き別れぬ。舊の住家に歸りてぞ更に悲しき事は多かるべ

き。「然か然かの事は、あなかしこ、後の爲め忌むなる事ぞ」など云へるこそ、「斯ばかりの中に何かは」と、人の心は猶疎ましく覺ゆれ。年月經ても、つゆ忘るるには有らねど、「去る者は日日に疎し」と云へる事なれば、然は云へど、其際ばかりは覺えぬにや、由無し事云ひて打ち笑ひぬ。骸は氣疎き山の中に納めて、然るべき日ばかり詣でつつ見れば、程無く卒都婆も苔むし、木の葉降り埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ言問ふ便なりける。思ひ出でて忍ぶ人有らん程こそ有らめ。そもまた程無く亡せて、聞き傳ふるばかりの末末に哀れとやは思ふ。然るは跡弔ふわざも絶えぬれば、何れの人と名をだに知らず。年年の春の草のみぞ心あらん人は哀れと見るべきを、果ては嵐に結び〔咽びノ衍。〔補〕し松も千年を待たで薪に摧かれ、古き〔古きヲ補フ〕墳は鋤かれて田と成りぬ。其形だに無く成りぬるぞ悲しき。

雪の面白う降りたりし朝、人の許云ふべき事ありて、文を遣るとて、雪の事何とも云はざりし返事に、「此雪如何が見ると、一筆宣はせぬ程の僻僻しからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。返す返す口惜しき御心なり」と云ひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、斯ばかりの事も忘れ難し。

九月廿日の頃、或人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩りく事侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露繁きに、わざとならぬ匂ひ、しめやかに打薫りて、忍びたる氣はひ、いと物哀れなり。好き程にて出で給ひぬれど、猶事樣の優に覺えて、物の隱れより暫し見居たるに、妻戸を今少し推し開けて、月見る氣色なり。やがて掛け籠らましかば、口惜しからまし。後まで見る人ありとは如何で

か知らん。斯様の事は唯だ朝夕の心遣ひに由るべし。其人程無く亡せにけりと聞き侍りし。

今の内裏造り出だされて、有職の人人に見せられけるに、何處も難無しとて、既に遷幸の日近く成りけるに、玄輝門院御覽じて、「閑院殿の櫛形の穴は、圓く縁も無くてぞ有りし」と仰せられける。いみじかりけり。是れは葉の入りて、木にて縁を爲たりければ、誤りにて直されにけり。

甲香は法螺貝の樣なるが、小さくて、口の程の細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤と云ふ浦に有りしを、所の者は「へなたり」と申し侍るとぞ云ひし。

手の惡ろき人の、憚からず文書き散らすは好し。「見苦し」とて人に書かするは煩さし。

久しく訪れぬ頃、如何ばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉無き心地するに、女の方より「仕丁や有る、一人」など云ひおこせたるこそ有難く嬉しけれ。然る心樣したる人ぞ好きと、人の申し侍りし。然も有るべき事なり。

朝夕隔て無く馴れたる人の、とも有る時、我に心置き、引き繕ろへる樣に見ゆるこそ、「今更斯くやは」など云ふ人も有りぬべけれど、猶げにげにしく好き人かなとぞ覺ゆる。疎き人の打解けたる事など云ひたる、又好しと思ひ付きぬべし。

名利に役はれて、靜かなる暇無く、一生を苦むるこそ愚かなれ。財多ければ身を護るに貧し。害を買ひ煩ひを招く媒なり。身の後には、金をして北斗を支ふとも、人の爲めにぞ煩はるべき。愚かなる人の目を悦

ばしむる樂び、又あぢきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人はうたて愚かなりとぞ見るべき。金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは勝れて愚かなる人なり。埋れぬ名を永き世に遺さんこそ有らまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも勝れたる人とやは云ふべき。愚かに拙なき人も家に生れ時に遇へば、高き位に上り、驕奢を極むるも有り。いみじかりし賢人、聖人、自ら卑しき位に居り、時に遇はずして止みぬる、また多し。偏に高き官位を望むも次に愚かなり。智慧と心とこそ世に勝れたる譽も遺さまほしきを、つらつら思へば、譽を愛するは人の聞きを喜ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世に留まらず。傳へ聞かん人、またまた速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。譽は毀の本なり。身の後の名遺りて更に益無し。是れを願ふも次に愚かなり。但し強ひて智を求め、賢を願ふ人の爲めに云はば、智慧出でて僞あり、才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは、眞の智にあらず。如何なるをか智と云ふべき。可不可は一條なり。如何なるをか善と云ふ。眞の人は智も無く、德も無く、功も無く、名も無し。誰か知り、誰か傳へん。是れ德を隱し、愚を守るには有らず。本より賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心を持ちて、名利の要を求むるに此く如し。萬事は皆非なり。云ふに足らず、願ふに足らず。

或人、法然上人に「念佛の時、眠に侵されて行を怠り侍る事、如何がして此障りを止め侍らん」と申しければ、「目の覺めたらん程念佛し給へ」と答へられたりける。いと尊かりけり。また「往生は一定と思へば

一定、不定と思へば不定なり」と云はれけり。是れも尊し。また「疑ひながらも念佛すれば往生す」とも云はれけり。是れもまた尊し。

因幡の國に、何の入道とかや云ふ者の女、容貌好しと聞きて、人數多云ひ渡りけれども、此の女唯だ栗をのみ食ひて更に米の類ひを食はざりければ、斯かる異樣の者、人に見ゆべきにあらずとて、親許さざりけり。

五月五日、賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てて見えざりしかば、各下りて埒の際に寄りたれど、殊に人多く立ち混みて、分け入りぬべきやうも無し。斯かる折に、向ひなる樗の木に法師の上りて、木の股に突居て物見る有り。取り付きながら、甚う眠りて落ちぬべき時に、目を覺ますこと度度なり。是れを見る人、嘲り誹みて、「世の癡者かな。斯く危き枝の上にて安き心ありて眠るらんよ」と云ふに、我心にふと思ひしままに、「我等が生死の到來、只今にもや有らん。其れを忘れて、物見て日を暮らす。愚かなる事は猶增さりたるものを」と云ひたれば、前なる人ども「眞に然にこそ候ひけれ。最も愚かに候ふ」と云ひて、皆後ろを見返りて、「此處へ入らせ給へ」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。斯程の道理、誰かは思ひ寄らざらんなれども、折からの思ひ掛けぬ心地して、胸に當りけるにや。人木石に有らねば、時に取りて物に感ずる事無きに有らず。

唐橋中將と云ふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣の上がる病ありて、年のやうやう長くる程に、鼻の中塞がりて、息も出で難ければ、樣樣に治療ひけれど、煩はしく成りて、目、眉、

額なども腫れ惑ひて打覆ひければ物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、唯だ恐ろしく鬼の顔に成りて、目は頂の方に付き、顔の程鼻に成りなどして、後には坊の中の人にも見えず籠り居て、年久しく在りて、猶煩はしく成りて死ににけり。斯かる病も有る事にこそ。

春の暮つ方、長閑やかに艶なる空に、賤しからぬ家の奥深く、木立物古りて、庭に散り萎れたる花、見過ぐし難きを、さし入りて見れば、南面の格子皆下ろして、寂しげなるに、東に向きて、妻戸の好き程に開きたる、御簾の破れより見れば、容姿清げなる男の、年二十ばかりにて、打解けたれど、心にくく長閑やかなる様して、机の上に書を繰り展げて見居たり。如何なる人なりけん、尋ね聞かまほし。

卑しの竹の編戸の中より、いと若き男の、月影に色合分明かならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いと故づきたる様にて、細小やかなる童一人を具して、遥かなる田の中の細路を、稲葉の露に濡ちつつ分け行く程、笛をえならず吹きすさびたる、哀れと聞き知るべき人も有らじと思ふに、行かん方知らまほしくと「イて」、見送りつつ行けば、笛を吹き止みて、山の際に総門の有る中に入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目留まる心地して、下人に問へば、「しかじかの宮のおはします頃にて、御佛事など候ふにや」と云ふ。御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風に誘はれ来る空薫物の匂ひも身に沁む心地す。寝殿より御堂の廊に通ふ女房の、追風、用意など、人目無き山里とも云はず、心遣ひしたり。心のままに茂れる秋の野らは、置き餘る露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音長閑やかなり。都の空よりは雲の往來も早き

心地して、月の晴れ曇ること定め難し。

公世の二位の兄人に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹惡しき人なりけり。坊の傍らに大きなる榎の有りければ、人「榎の僧正」とぞ云ひける。此名然かるべからずとて、かの木を切られにけり。其根の有りければ、「切杭の僧正」と云ひけり。いよいよ腹立ちて、切杭を掘り棄てたりければ、其跡大きなる堀にて有りければ、「堀池の僧正」とぞ云ひける。

柳原の邊に强盜法印と號する僧有りけり。度度强盜に逢ひたる故に此名を附きにけるとぞ。

或人清水へ參りけるに、老いたる尼の行き伴れたりけるが、路すがら「嚔、嚔」と云ひもて行きければ、「尼御前、何事を斯くは述給ふぞ」と問ひけれども、答もせず、猶云ひ止まざりけるを、度度問はれて、打腹立ちて「やや、鼻ひたる時、斯く呪はねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡の山に兒にておはしますが、只今もや鼻ひ給はんと思へば、斯く申すぞかし」と云ひけり。有難き志なりけんかし。

光親卿、院の最勝講奉行して候ひけるを、御前へ召されて、供御を出だされて食はせられけり。然て食ひ散らしたる衝重を御簾の中へ差し入れて罷り出でにけり。女房「あな穢な、誰に取れとてか」など申し合はれければ、「有識の振舞、やんごとなき事なり」と、返す返す感ぜさせ給ひけるとぞ。

老來りて、初めて道を行ぜんと待つこと勿れ、古き墳、多くは是れ少年の人なり。計らざるに病を受けて忽ちに此世を去らんとする時にこそ、初めて過ぎぬる方の過まれる事は知らるなれ。過まりと云ふは他の事

に有らず。速かに爲べき事を緩くし、緩く爲べき事を急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。其時、悔ゆとも效あらんや。人は唯だ無常の身に迫りぬる事を心にひしと懸けて、束の間も忘るまじきなり。然らば何どか此世の濁りも薄く、佛道を勤むる心も忠實ならざらん。昔ありける聖は、人の來りて自他の要事を云ふ時、答へて云く、「今火急の事ありて既に朝夕に迫れり」とて、耳を塞ぎ、念佛して、遂に往生を遂げけりと、禪林の十因に侍り。心戒と云ひける聖は、餘りに此世の假初なる事を思ひて、靜かに蹲居ける事だに無く、常は蹲まりてのみぞ在りける。

應長の頃、伊勢の國より、女の鬼に成りたるを率て上りたりと云ふ事ありて、其頃廿日ばかり、日毎に、京、白川の人、鬼見にとて出で惑ふ。「昨日は西園寺に參りたりし。今日は院へ參るべし。只今は其處其處に」など云ひ合へり。正しく見たりと云ふ人も無く、虚言と云ふ人も無し。上下唯だ鬼の事のみ云ひ止まず。其頃、東山より安居院邊へ罷り侍りしに、四條より上ざまの人、皆北を差して走る。「一條室町に鬼あり」と喧騷り合へり。今出川の邊より見遣れば、院の御棧敷の邊り更に通り得べうも有らず、立ち混みたり。早く「跡無き事には有らざめり」とて、人を遣りて見するに、大方逢へる者無し。暮るるまで斯く立ち騷ぎて、果ては鬪諍起りて、あさましき事ども有りけり。其頃押並べて、二日三日人の病ふ事侍りしをぞ、「かの鬼の虚言は、此標徴を示すなりけり」と云ふ人も侍りし。

龜山殿の御池に、大井川の水を捲かせられんとて、大井の土民に仰せて水車を造らせられけり。多くの錢

を給ひて、數日に營み出だして掛けたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれども、遂に廻らで徒らに立てりけり。然て宇治の里人を召して拵へさせられければ、安らかに結ひて參らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入るる事めでたかりけり。萬づに其道を知れる者は、やんごとなきものなり。

仁和寺に或法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて、或時思ひ立ちて、唯だ一人徒歩より詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、斯ばかりと心得て歸りにけり。然て傍の人に逢ひて、「年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人毎に山へ上りしは何事か有りけん、ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ云ひける。少しの事にも先達は有らまほしき事なり。

是れも仁和寺の法師、童の法師に成らんとする名殘とて、各遊ぶ事有りけるに、醉ひて興に入る餘り、傍らなる足鼎を取りて頭に被きたれば、詰まるやうにするを、鼻を押し平めて、顏を差し入れて、舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限無し。暫し奏でて後、拔かんとするに、大方拔かれず。酒宴事冷めて「如何がはせん」と惑ひけり。とかくすれば首の周圍缺けて血垂り、唯だ腫れに腫れ滿ちて、息も詰まりければ、打割らんとすれど容易く割れず。響きて堪へ難かりければ、協はで爲べき樣無くて、三足なる角の上に、帷布を打懸けて、手を引き、杖を衝かせて、京なる醫師の許へ率て行きける。路すがら人の怪み見ること限無し。醫師の許に差し入りて、對ひ居たりけん樣、然こそ異樣なりけめ。物を云ふも、口籠り聲に響きて聞えず。

「斯かる事は書にも見えず、傳へたる教も無し」と云へば、また仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄り居て泣き悲めども、聞くらんとも覺えず。斯かる程に或者の云ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりは何どか生きざらん。唯だ力を立てて引き給へ」とて、藁の稭を周圍に差し入れて、鐵を隔てて、首も千斷るばかりに引きたるに、耳鼻缺け失せ「穿げ」ながら拔けにけり。辛き命儲けて、久しく病み居たりけり。

御室に、いみじき兒の有りけるを、「如何で誘ひ出だして遊ばん」と巧む法師ども有りて、能ある遊び法師どもなど語らひて、風流の破籠樣の物、懇ろに營み出でて、箱風情の物に認め入れて、雙の岡の便好き所に埋み置きて、紅葉散らし掛けなど、思ひ寄らぬ樣にして、御所へ參りて、兒を從慂し出でにけり。嬉しと思ひて、此處彼處遊び廻りて、有りつる苔の筵に並居て、「甚うこそ困じにたれ。あはれ紅葉を燒かん人もがな。驗あらん僧達祈り試みられよ」など云ひしろひて、埋みつる木の下に向きて、數珠押し摺り、印事事しく結び出でなどして、誇大く振舞ひて、木の葉を掻き退けたれど、つやつや物も見えず。「所の違ひたるにや」とて、掘らぬ所も無く、山を求れども無かりけり。埋みけるを人の見置きて、御所へ參りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉無くて、聞き惡く諍ひ腹立ちて歸りにけり。餘りに興あらんとする事は必ず合無きものなり。

家の造り樣は夏を旨とすべし。冬は如何なる所にも住まる。暑き頃惡ろき住まひは堪へ難き事なり。深き

水は涼しげ無し。淺くて流れたる、遙かに涼し。細かなる物を見るに、遣戸は蔀の間よりも明し。天井の高きは冬寒く燈暗し。「造作は用無き所を造りたる、見るも面白く、萬づの用にも立ちて善し」とぞ人の定め合ひ侍りし。

久しく隔たりて逢ひたる人の、我方に有りつる事、數數殘り無く語り續くるこそ合無けれ。隔て無く馴れぬる人も、程經て見るは恥かしからぬかは。次樣の人は、假初に立ち出でても、興ありつる事とて、息も吐き敢へず語り興ずるぞかし。貴き人の物語するは、人數多あれど、一人に向きて云ふを、自ら人も聽くにこそ有れ。貴からぬ人は、誰とも無く、數多の中に打出でて見る事のやうに語り成せば、皆同じく笑ひ喧騷る。いと亂がはし。をかしき事を云ひても甚く興ぜぬと、興無き事を云ひても能く笑ふにぞ、品の程計られぬべき。人の見樣の善惡、才ある人は其事など定め合へるに、己が身に引き掛けて云ひ出でたる、いと侘し。

人の語り出でたる歌物語の、歌の惡ろきこそ本意無けれ。少し其道知らん人は、いみじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく聞き惡し。

「道心あらば、住む所にしも由らじ。家に在り人に交はるとも、後世を願はんに難かるべきかは」と云ふは、更に後世知らぬ人なり。げには此世を儚なみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みる營みの勇ましからん。心は緣に引かれて移るものなれば、靜かならでは道は行じ難し。其器、昔の人に及ばず。山林に入りても、飢を助け、嵐を防ぐ便無くては在られぬわざなれば、自ら世を

貪るに似たる事も、便りに觸れば何どか無からん。然ればとて「背ける効無し。然ばかりならば、何じかは捨てし」など云はんは無下の事なり。さすがに一度道に入りて世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢の設食、藜の羹、幾ばくかの人の費を成さん。求むる所は易く、其心早く足りぬべし。形には恥づる所も有れば、然は云へど惡には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらん驗には、如何にもして世を遁れん事こそ有らまほしけれ。偏に貪る事を勤めて、菩提に趣かざらんは、萬づの畜類に變る所あるまじくや。

大事を思ひ立たん人は、去り難く心に掛からん事の本意を遂げずして、然ながら捨つべきなり。「暫し此事果てて、同じくは彼の事沙汰し置きて、しかじかの事、人の嘲りや有らん。行末難無くしたため設けて、年頃も有ればこそ有れ、其事待たん程有らじ。物騷がしからぬやうに」など思はんには、え然らぬ事のみ、いとど重なりて、事の盡くる限も無く、思ひ立つ日も有るべからず。大樣、人を見るに、少し心ある際は皆此の豫想にてぞ、一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、暫しとや云ふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて逃れ去るぞかし。命は人を待つ物かは。無常の來る事は水火の攻むるよりも速かに、逃れ難きものを、其時老いたる親、幼なき子、君の恩、人の情、棄て難しとて棄てざらんや。

眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭と云ふ物を好みて多く食ひけり。談義の座にても、大きなる鉢に堆たかく盛りて、膝下に置きつつ食ひながら、書をも讀みけり。病ふ事あるには、七日、

二七日など、療治とて籠り居て、思ふ樣に好き芋頭を選びて、殊に多く食ひて、萬づの病を癒しけり。人に食はすること無し、唯だ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊一つを讓りたりけるを、坊を百貫に賣りて、彼れ是れ三萬疋を芋頭の錢と定めて、京なる人に預け置きて、十貫づつ取り寄せて、芋頭を乏しからず召しける程に、また異用にも用ひること無くて、其錢皆に成りにけり。「三百貫の物を貧しき身に儲けて斯く計らひける、眞に有難き道心者なり」とぞ人申しける。此僧都、或法師を見て、しろうるりと云ふ名を付けたりける。「とは何物ぞ」と人の問ひければ、「然る物を我も知らず。若し有らましかば此僧の顏に似てん」とぞ云ひける。此僧都眉目好く、力強く、大食にて、能書、學匠、辯說、人に勝れて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたる曲者にて、萬づ自由にして、大方人に隨ふと云ふこと無し。出仕して饗膳などに著く時も、皆人の前据ゑ渡すを待たず、我前に据ゑぬれば、やがて獨り打食ひて、歸りたければ一人つい立ちて行きけり。齋食、非時も、人に等しく定めて食はず。我が食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、睡たければ晝もかけ籠りて、如何なる大事あれども人の云ふ事聽き入れず。目覺めぬれば幾夜も寢ねず。心を澄まして嘯き步きなど、世の常ならぬ樣なれども、人に厭はれず、萬づ許されけり。德の至れりけるにや。

御產の時甑落す事は、定まれる事には有らず。御胞衣滯る時の禁厭なり。滯らせ給はねば此事無し。下樣より事起りて、然せる本說無し。大原の里の甑を召すなり。古き寶藏の繪に、賤しき人の子產みたる所

に、額落したる所を書きたり。

延政門院幼なくおはしましける時、院へ參る人に、御傳言とて申させ給ひける御歌、「二つ文字「こノ義」牛の角文字「いノ義」直ぐな文字「しノ義」歪み文字「くノ義」とぞ君は覺ゆる。」戀しく思ひ參らせ給ふとなり。

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、何時とかや、盜人に逢ひにけるより、宿直人とて、斯く事事しく成りにけり。一年の相は、此修中の有樣にこそ見ゆなれば、兵を用ひん事、穩かならぬ事なり。

車の五緒は、必ず人に由らず、程に付けて、極むる官位に至りぬれば乘る物なりとぞ、或人仰せられし。

此頃の冠は、昔よりは遙かに高く成りたるなり。古代の冠桶を持ちたる人は、端を繼ぎて今は用ふるなり。

岡本關白殿、盛りなる紅梅の枝に鳥一雙を添へて、此枝に附けて參らすべき由、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥附くる術知り候はず。一枝に二つ附くる事も存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人人に問はせ給ひて、また武勝に「然らば己れが思はんやうに附けて參らせよ」と仰せられたりければ、花も無き梅の枝に一つを附けて參らせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、蕾みたると散りたるとに附く。五葉などにも附く。枝の長さ七尺、或は六尺、返し刀五分に切る。枝の半に鳥を附く。附くる枝、蹈まする枝あり。しじら藤の割らぬにて、二所附くべし。藤の先は、火打羽の丈に比べて切り

て、牛の角のやうに挑むべし。初雪の朝、枝を肩に掛けて、中門より振舞ひて參る。大砌の石を傳ひて、雪に跡を附けず、雨覆の毛を、少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄に寄せ掛く。祿を出ださるれば、肩に掛けて拜して退く。初雪と云へども、沓の鼻に隱れぬ程の雪には參らず。雨覆の毛を散らす事は、鷹は弱腰を取る事なれば、御鷹の取りたる由なるべし」と申しき。花に鳥附けずとは、如何なる故にか有りけん。長月ばかりに、梅の作枝に雉を附けて「君が爲めにと折る花は、時しも分かぬ」と云へる事、「伊勢物語」に見えたり。造花には苦しからぬにや。

賀茂の岩本、橋本は業平、實方なり。人の常に云ひ紛へ侍れば、一年參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼び留めて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影の映りける所と侍れば、橋本や猶水の近ければと覺え侍る。吉水和尚、月を愛で花を眺めし往時の優しき人は此處に在原、と詠み給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、己等よりは、なかなか御存知などもこそ候はめ」と、いと恭しく云ひたりしこそ、いみじく覺えしか。今出川の院の近衛とて、集どもに數多入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前の水にて書きて手向けられけり。眞にやんごとなき譽ありて、人の口に有る歌多し。作文、詩序など、いみじく書く人なり。

筑紫に、某の押領使など云ふ樣なる者の有りけるが、土大根を萬づにいみじき藥とて、朝毎に二つづつ燒きて食ひける事、年久しく成りぬ。或時館の中に人も無かりける隙を計りて、敵襲ひ來て圍み攻めける

に、館の中に兵二人出で來て、命を惜まず戰ひて、皆追ひ返してけり。いと不思議に覺えて、「日頃此處に物し給ふとも見ぬ人人の戰し給ふは、如何なる人ぞ」と問ひければ、「年頃賴みて、朝な朝な召しつる土大根に候ふ」と云ひて失せにけり。深く信を致しぬれば、斯かる德も有りけるにこそ。

書寫の上人は、法華讀誦の功積りて、六根淨に協へる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の幹を焚きて、豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、「疎からぬ己れ等しも、恨めしく我をば煮て、辛き目を見するものかな」と云ひけり。「焚かるる豆幹のはらはらと鳴る音は、我心よりする事かは。燒かるるは如何ばかり堪へ難けれども、力無き事なり。斯くな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

元應の淸暑堂の御遊に、玄上は失せにし頃、菊亭の大臣、牧馬を彈じ給ひけるに、座に著きて先づ柱を探られたりければ、一つ落ちにけり。御懷に續飯を持ち給ひたるにて附けられにければ、神供の參る程に、よく干て事故無かりけり。如何なる意趣か有りけん、物見ける衣被の寄りて放ち、本のやうに置きたりけるとぞ。

名を聞くより、やがて面影は推し測らるる心地するを、見る時はまた豫て思ひつるままの顏したる人こそ無けれ、昔物語を聞きても、此頃の人の家の、其處程にてぞ有りけんと覺え、人も今見る人の中に、思ひ比へらるるは、誰も斯く覺ゆるにや。また如何なる折ぞ、只今人の云ふ事も、目に見ゆる物も、我心の中も、斯かる事の何時ぞや有りしかと覺えて、何時とは思ひ出でねども、正しく有りし心地のするは、我ればかり

斯く思ふにや。

賤しげなる者居たる邊りに、調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に佛の多き、前栽に石草木の多き、家の内に子孫の多き、人に逢ひて詞の多き、願文に作善多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。

世に語り傳ふる事、眞は合無きにや。多くは皆虚言なり。有るにも過ぎて人は物を云ひなすに、況して年月過ぎ、境も隔たりぬれば、云ひたきままに語り成して、筆にも書き留めぬれば、やがて定まりぬ。道道の物の上手のいみじき事など、頑なる人の其道知らぬは、そぞろに神の如くに云へども、道知れる人は更に信も起さず。音に聞くと、見る時とは、何事も變るものなり。且つ顯はるるも顧みず、口に任せて云ひ散らすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。また我も眞しからず思ひながら、人の云ひしままに、鼻の程擂動めきて云ふは、其人の虚言には有らず。實實しく所所打おぼめき、善く知らぬ由して、然りながら、端端合せて語る虚言は恐ろしき事なり。我が爲め面目有るやうに云はれぬる虚言は、人甚く諍はず。皆人の興ずる虚言は一人「然も無かりしものを」と云はんも詮無くて聞き居たる程に、證人にさへ爲されて、いとど定まりぬべし。とにも斯くにも虚言多き世なり。唯だ常に有る珍しからぬ事のままに心得たらん、萬づ違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚く事のみ有り。貴き人は怪しき事を語らず。斯くは云へど、佛神の奇特、權者の傳記、然のみ信ぜざるべきにも有らず。是れは世俗の虚言を懇ろに信じたるも迂愚がましく、餘も有らじな

ど云ふも詮無ければ、大方は眞しく會釋ひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ、南北に走る。貴き有り、賤しき有り、老いたる有り、若き有り、行く所有り、歸る家有り、夕に寢ねて、朝に起く。營む所何事ぞや。生を貪り、利を求めて止む時無し。身を養ひて何事をか待つ。期する所唯だ老と死とに有り。其の來ること速かにして、念念の間に留まらず、是れを待つ間、何の樂みか有らん。惑へる者は是れを恐れず。名利に溺れて、先途の近き事を顧みねばなり。愚かなる人は、また是れを悲ぶ。常住ならん事を思ひて、變化の理を知らねばなり。

徒然侘ぶる人は如何なる心ならん。紛るゝ方無く、唯だ一人あるのみこそ好けれ。世に隨へば、心の外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交はれば、言葉餘所の聞きに隨ひて、然ながら心に有らず。人に戯れ、物に爭ひ、一度は怨み、一度は喜ぶ。其事定まれる事無し。分別妄りに起りて、得失止む時無し。惑ひの上に醉へり、醉の中に夢を成す。走りて忙はしく、惚れて忘れたる事、人皆此くの如し。未だ眞の道を知らずとも、緣を離れて、身を靜かにし、事に與らずして、心を安くせんこそ、暫く樂むとも云ひつべけれ。「生活、人事、技能、學問等の諸緣を止めよ」とこそ、「摩訶止觀」にも侍れ。

世の信望華やかなる邊りにも、歎きも喜びも有りて、人多く往き訪らふ中に、聖法師の交りて、云ひ入れ佇ずみたるこそ、「然らずとも」と見ゆれ。然るべき故ありとも、法師は人に疎くこそ有りなん。

世の中に其頃人の持て扱かひ種に云ひ合へる事、關與ふべきには有らぬ人の、能く案内知りて、人にも語

り聞かせ、問ひ聞きたるこそ受けられね。殊に遍頗なる聖法師などぞ、世の人の上は、我が如く尋ね聞き、如何で斯ばかりは知りけんと覺ゆるまでぞ云ひ散らすめる。

今樣の事どもの、珍しきを云ひ廣めもてなすこそ又受けられね。世に事舊りたるまで知らぬ人は心にくし。今更の人などの有る時、此處許に云ひ附けたる言種、物の名など心得たるどち、片端云ひ交し、目見合せ笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はする事、世慣れず、好からぬ人の必ず有る事なり。

何事も入り立たぬ樣したるぞ好き。貴き人は、知りたる事とて然のみ知り顏にやは云ふ。片田舍より差し出でたる人こそ、萬づの道に心得たる由の差し答はすれ。然れば世に恥かしき方も有れど、自らもいみじと思へる氣色、頑なり。善く辨へたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは云はぬこそいみじけれ。

人毎に我身に疎き事をのみぞ好める。法師は兵の道を立て、夷は弓引く術知らず。佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜み合へり。然れど愚かなる己れが道より、猶人に思ひ侮られぬべし。法師のみにも有らず、上達部、殿上人、上ざままで、押竝べて武を好む人多かり。百度戰ひて百度勝つとも、未だ武勇の名を定め難し。其故は、運に乘じて敵を碎く時、勇者に有らずと云ふ人無し。兵盡き矢窮まりて遂に敵に降らず。死を易くして後初めて名を顯はすべき道なり。生けらん程は武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近き擧動其家に有らずは、好みて益無き事なり。

屏風、障子などの、繪も文字も頑なる筆樣して書きたるが、見惡きよりも、宿の主人の拙なく覺ゆる

なり。大方持てる調度にても、心劣りせらるる事は有りぬべし。然のみ好き物を持つべしとにも有らず。損ぜざらん爲めとて、品無く見惡き樣に爲成し、珍しからんとて用無き事ども爲添へ、煩はしく好みなせるを云ふなり。古めかしきやうにて、甚く事事しからず、費も無くて、物柄の好きが好きなり。

「羅の表紙は、疾く損ずるが侘しき」と人の云ひしに、頓阿が「羅は上下外れ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍るこそ、心勝りて覺えしか。一部と有る草紙などの、同じやうにも有らぬを、見惡しと云へど、弘融僧都が「物を必ず一具に調へんとするは拙なき者のする事なり。不具なるこそ好けれ」と云ひしも、いみじく覺えしなり。すべて何も皆事の調ほりたるは惡しき事なり。爲殘したるを、然て打置きたるは面白く、息延ぶるわざなり。「內裏造らるるにも、必ず造り果てぬ所を殘す事なり」と、或人申し侍りしなり。先賢の作れる內外の書にも、章段の闕けたる事のみこそ侍れ。

竹林院入道左大臣殿、太政大臣に上がり給はんに、何の滯りかおはせんなれども、「珍しげ無し。一の上にて止みなん」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、此事を甘心し給ひて、「相國の望おはせざりけり。亢龍の悔あり」とかや云ふ事侍るなり。月滿ちては缺け、物盛んにしては衰ふ。萬づの事前の詰まりたるは、破れに近き道なり。

法顯三藏の、天竺に渡りて故鄉の扇を見ては悲び、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「然ばかりの人の、無下にこそ心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ」と人の云ひしに、弘融僧都「優に情あり

ける三藏かな」と云ひたりしこそ、法師のやうにも有らず心にくく覺えしか。

人の心素直ならねば、僞り無きにしも有らず。然れど自ら正直の人、何どか無からん。己れ素直ならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、偶賢なる人を見て是れを憎む。「大きなる利を得んが爲めに、少し「囗きアリ」の利を受けず。僞り飾りて名を立てんとす」と謗る。己れが心に違へるに由りて、此嘲りを爲すにて知りぬ。此人は下愚の性移るべからず。僞りて小利をも辭すべからず、假にも愚を學ぶべからず。狂人の摸似とて大路を走らば則ち狂人なり。惡人の摸似とて人を殺さば惡人なり。驥を學ぶは驥の類ひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばんを賢と云ふべし。

惟繼中納言は風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經打爲て寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺燒かれし時、坊主に逢ひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺無ければ、今よりは法師とこそ申さめ」と云はれけり。いみじき秀句なりけり。

下部に酒飲まする事は心すべき事なり。宇治に住みける男、京に具覺坊とて、優雅きたる遁世の僧を小舅なりければ、常に申し睦びけり。或時迎ひに馬を遣はしたりければ、遙かなる程なり、口付きの男に「先づ一度爲させよ」とて酒を出だしたれば、さし受けさし受け「よよ」と飲みぬ。太刀打佩きて、甲斐甲斐しげなれば、頼もしく覺えて、召し具して行く程に、木幡の邊にて、奈良法師の、兵士數多具して逢ひたるに、此男立ち向ひて、「日暮れにたり、この山中怪しきぞ、留まり候へ」と云ひて、太刀を引き拔きければ、人

も皆太刀拔き矢矧げなど僞けるを、具覺坊、手を摩りて、「現し心無く醉ひたる者に候ふ、枉げて宥し給はらん」と云ひければ、各嘲りて過ぎぬ。此男、具覺坊に逢ひて、「御坊は口惜しき事し給ひつるものかな。已れ醉ひたる事侍らず。高名仕まつらんとするを、拔ける太刀、空しく成し給ひつる事」と怒りて、ひた斬に斬り落しつ。然て「山賊あり」と喧騷りければ、里人起りて出で合へば、「我こそ山賊よ」と云ひて、走り掛かりつつ斬り廻りけるを、數多して手負はせ打伏せて縛りけり。馬は血附きて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて男ども數多走らかしたれば、具覺坊は榎原に〔に不補〕呻吟び臥したるを、求め出でて舁き持て來つ。辛き命生きたれど、腰切り損ぜられて、不具に成りにけり。

或者、小野道風の書ける「和漢朗詠集」とて持ちたりけるを、或人、「御相傳、受くる〔不浮けるノ術〕事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かん事、時代や違ひ侍らん、覺束なくこそ」と云ひければ、「然候へばこそ世に有り難き物には侍りけれ」とて、いよいよ祕藏しけり。

「奧山に猫股と云ふもの有りて、人を食らふなる」と人の云ひけるに、「山ならねども、是れらにも猫の經上がりて、猫股に成りて、人取る事は有なるものを」と云ふ者ありけるを、某阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺の邊に在りけるが聞きて、獨り歩りかん身は心すべき事にこそと思ひける頃しも、或所にて、夜更くるまで連歌して、唯だ獨り歸りけるに、小川の端にて、音に聞きし猫股、過たず脚下へふと寄り來て、やがて搔き附くままに、頸の程を食はんとす。肝心も失せて防がんとするに、力も無く足も立た

ず、小川へ轉び入りて、「助けよや、猫股、よや猫股」と叫べば、家家より松どもに點火して、走り寄りて見れば、此邊りに見知れる僧なり。「こは如何に」とて、川の中より抱だき起したれば、連歌の賭物取りて、扇、小箱など懷に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたる樣にて、這ふ這ふ家に入りにけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて飛び附きたりけるとぞ。

大納言法印の召し使ひし乙鶴丸、やすら殿と云ふ者を知りて、常に行き通ひしに、或時出でて歸り來たるを、法印「何處へ行きつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿の許罷りて候ふ」と云ふ。「其やすら殿は、男か、法師か」と又問はれて、袖かき合せて、「如何が候ふらん、頭をば見候はず」と答へ申しき。何どか頭ばかりの見えざりけん。

赤舌日と云ふ事、陰陽道には沙汰無き事なり。昔の人是れを忌まず。此頃何者の云ひ出でて忌み始めけるにか。此日ある事、末通らずと云ひて、其日云ひたりし事、爲たりし事叶はず、得た〔原本ざ、今訂〕りし物は失ひつ、企てたりし事成らずと云ふ。愚かなり。吉日を撰びて爲したるわざの、末通らぬを數へて見んも、又等しかるべし。其故は、無常變易の境、有りと見る物も存せず、始ある事も終無し。志は遂げず、望は絶えず、人の心不定なり。物皆幻化なり。何事か暫くも住する。此理を知らざるなり。吉日に惡を爲すに必ず凶なり。惡日に善を行ふに必ず吉なりと云へり。吉凶は人に由りて日に由らず。

或人、弓射る事を習ふに、諸矢を手挾みて的に向ふ。師の云く、「初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後

の矢を恃みて、初めの矢に等閑の心あり。毎度唯だ得失無く、此一矢に定むべしと思へ」と云ふ。纔かに二つの矢、師の前にて、一つを疎略にせんと思はんや。懈怠の心自ら知らずと云へども、師是れを知る。此戒め萬事に亙るべし。道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、〔イ朝には夕あらん事を思ひてノ句アリ〕重ねて懇ろに修せん事を期す。況んや一刹那の中に於て懈怠の心ある事を知らんや。何んぞ只今の一念に於て直ちに爲る事の甚だ難き。

「牛を賣る者あり。買ふ人明日其價を遣りて牛を取らんと云ふ。夜の間に牛死にぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり」と語る人あり。是れを聞きて、傍なる者の云く、「牛の主眞に損ありと云へども、また大いなる利あり。其故は、生あるもの死の近き事を知らざる事、牛既に然かなり。人また同じ。計らざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりも重し。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありと云ふべからず」と云ふに、皆人嘲りて、「其道理は牛の主に限るべからず」と云ふ。又云く、「然れば人死を惡まば生を愛すべし。存命の喜び、日日に樂まざらんや。愚かなる人、此樂びを忘れて煩勞がはしく外の樂びを求め、此財を忘れて危く他の財を貪るには、志滿つこと無し。生ける間生を樂まずして、死に臨んで死を恐るるは、此道理あるべからず。人皆生を樂まざるは死を恐れざる故なり。死を恐れざるには有らず、死の近き事を忘るるなり。若し又生死の相に與らずと云はば、眞の道理を得たりと云ふべし」と云ふに、人いよいよ嘲る。

常盤井の相國出仕し給ひけるに、勅書を持ちたる北面逢ひ奉りて、馬より下りたりけるを、相國後に「北面某は、勅書を持ちながら下馬し侍りし者なり。斯程の者如何でか君に仕うまつり候ふべき」と申されければ、北面を放たれにけり。勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし。下るべからずとぞ。

「箱の刳形に緒を附くる事、何方に附け侍るべきぞ」と、或る有識の人に尋ね申し侍りしかば、「軸に附け、表紙に附くること兩說なれば、何れも難無し。文の箱は多くは右に附く。手箱には軸に附くるも常の事なり」と仰せられき。

豨薟と云ふ草あり。蝮に刺されたる人、かの草を揉みて附けぬれば即ち癒ゆとなん。見知りて置くべし。

其物に付きて其物を費し害ふもの數を知らず有り。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

尊き聖の云ひ置きける事を書き附けて、「一言芳談」とか名づけたる草紙を見侍りしに、心に合ひて覺えし事ども、

一爲やせまし、爲ずや有らましと思ふ事は、大樣は爲ぬは善きなり。

一後世を思はん者は、糂汰瓶一つも持つまじき事なり。持經、本尊に至るまで好き物を持つ、由無き事なり。

一遁世者は、無きに事缺けぬやうを計らひて過ぐる、最上の要にて有るなり。

一上﨟は下﨟に成り、智者は愚者に成り、徳人は貧に成り、能ある人は無能に成るべきなり。

一佛道を願ふと云ふは別の事無し。暇ある身に成りて、世の事を心に掛けぬを第一の道とす。

此外も有りし事ども覺えず。

堀川の相國は、美男の樂しき人にて、其事と無く過差「華奢」を好み給ひけり。御子基俊卿を大理に成して廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見苦しとて、めでたく造り改めらるべき由仰せられけるに、此唐櫃は上古より傳はりて、其始めを知らず、數百年を經たり。累代の公物、古弊を以て規模とす、容易く改められ難き由、故實の諸官等申しければ、其事止みにけり。

久我の相國は、殿上にて水を召「食」しけるに、主殿司、土器を奉りければ、「椀を參らせよ」とて、椀してぞ召「食」しける。

或人、任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記の持ちたる宣命を取らずして、堂上せられにけり。極まり無き失禮なれども、立ち返り取るべきにも有らず、思ひ煩はれけるに、六位の外記康綱、衣被の女房を語らひて、彼の宣命を持たせて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

尹大納言光忠入道、追儺の上卿を勤められけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けられければ、「又五郎男を師とするより外の才覺「學」候はじ」とぞ宣給ひける。彼の又五郎は、老いたる衛士の能く公事に馴れたる者にてぞ有りける。近衛殿著陣し給ひける時、膝突を忘れて、外記を召されければ、火を焚きて候ひけ

るか、「先づ膝突を召さるべくや候ふらん」と、忍びやかに呟きける。いとをかしかりけり。

大覺寺殿にて、近習の人ども、「謎謎」を作りて解かれける所へ、醫師忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、「我朝の者とも見えぬ忠守かな」と「謎謎」に爲られにけるを、「唐瓶子」「唐平氏」と解きて笑ひ合はれければ、腹立ちて退かり出でにけり。

荒れたる宿の人目無きに、女の憚る事ある頃にて、徒然と籠り居たるを、或人訪らひ給はんとて、夕月夜の覺束なき程に、忍びて尋ねおはしたるに、犬の事事しく咎むれば、下種女の出でて、「何處よりぞ」と云ふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心細げなる有樣、如何で過ごすらんと、いと心苦し。粗末しき板敷に、暫し立ち給へるを、もて靜めたる氣はひの若やかなる爲て、「此方」と云ふ人あれば、閉て開け所狹げなる遣戸よりぞ入り給ひぬる。内の樣は、甚く凄涼じからず、心にくく、灯は彼方に微かなれど、物の綺羅など見えて、俄かにしも有らぬ匂ひ、いと懷かしう住み成したり。「門善く鎖してよ。雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人は其處其處に」と云へば、「今宵ぞ安き睡は寢べかめる」と打私語めくも忍びたれど、程無ければ微聞ゆ。然て此程の事ども、細やかに聞え給ふに、夜深き鷄も鳴きぬ。來し方、行末掛けて、眞實なる御物語に、此度は鷄も華やかなる聲に打頻れば、「明け離るるにや」と聞き給へど、夜深く急ぐべき所の樣にも有らねば、緩怠み給へるに、隙白く成れば、忘れ難き事など云ひて、立ち出で給ふに、木末も庭も珍しく青み渡りたる卯月ばかりの曙、艶にをかしかりしを思し出でて、桂の木の大きなるが隱るるまで今

も見送り給ふとぞ。

北の屋陰に消え殘りたる雪の甚う凍りたるに、差し寄せたる車の轅も、霜甚く燦めきて、有明の月明亮なれども、隈無くは有らぬに、人離れなる御堂の廊に、尋常には有らずと見ゆる男、女と長押に尻掛けて、物語する樣こそ、何事にか有らん、盡きずまじけれ。頭、容貌など、いと好しと見えて、えも云はぬ匂ひの、さと香りたるこそをかしけれ。氣はひなど、端れ端れ聞えたるもゆかし。

高野の證空上人、京へ上りけるに、細路にて、馬に乘りたる女の行き逢ひたりけるが、口引きける男、惡しく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖いと腹惡しく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。斯くの如くの優婆夷などの身にて、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の惡行なり」と云はれければ、口引の男、「如何に仰せらるるやらん、えこそ聞き知らね」と云ふに、上人猶息卷きて「何と云ふぞ、非修非學の男」と荒らかに云ひて、極まり無き放言しつと思ひける氣色にて、馬引き返して逃げられにけり。尊かりける諍論なるべし。

女の物云ひ掛けたる返事、取り敢へず好き程にする男は、有り難きものぞとて、龜山院の御時、痴れたる女房ども、若き男達の參らるる毎に、「時鳥や聞き給へる」と問ひて試みられけるに、某の大納言とかやは、「數ならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり。堀川内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と仰せられけるを、「是れは難無し。數ならぬ身、煩かし」など定め合はれけり。すべて男をば、女に笑はれぬ樣に

生し立つべしとぞ。「淨土寺前關白殿は幼なくて安喜門院の善く教へ參らせさせ給ひける故に、御詞などの好きぞ」と人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「卑しの下女の見奉るも、いと恥かしく心遣ひせらるる」とこそ仰せられけれ。女の無き世なりせば、衣紋も冠も如何にも有れ、引き繕ろふ人も侍らじ。斯く人に恥ぢらるる女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆僻めり。人我の相深く、貪欲甚しく、物の理を知らず、唯だ迷の方に心も早く移り、詞も巧に、苦しからぬ事をも問ふ時は云はず、用意あるかと見れば、又あさましき事まで問はず語りに云ひ出でて、深く計量り飾れる事は男の智慧にも勝りたるかと思へば、其事後より顯るるを知らず、素直ならずして拙なきものは女なり。其心に隨ひて好く思はれん事は心憂かるべし。然れば何かは女の恥かしからん。若し賢女あらば、其れも物疎く凄涼じかりなん。唯だ迷を主人として、後に從ふ時、優しくも面白くも覺ゆべき事なり。

寸陰惜む人無し。是れ能く知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人の爲めに云はば、一錢輕し〔原文をし、〔不訂〕と云へども、是れを重ぬれば貧しき人を富める人と成す。然れば商人の一錢を惜む心切なり。刹那覺えずと云へども、是れを運びて止まざれば、命を終ふる期忽ちに至る。然れば道人は遠く日月を惜むべからず、只今の一念、空しく過ぐる事を惜むべし。若し人來りて、「我が命明日は必ず失はるべし」と告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか頼み、何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞ其時節に異ならん。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行步、止むことを得ずして多く時を失ふ。其餘りの暇、

幾ばくならぬ中に、無益の事を爲し、無益の事を云ひ、無益の事を思惟して、時を移すのみならず、日を消し、月を亘りて、一生を送る最も愚かなり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀ぜしかば、惠遠、白蓮の交はりを許さざりき。暫くも是れ無き時は死人に同じ。光陰何の爲めにか惜むとならば、内に思慮無く、外に世事無くして、止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。

高名の木登りと云ひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに、いと危く見えし程は云ふ事も無くて、下るる時に、軒長ばかりに成りて、「過ちすな、心して下りよ」と言葉を掛け侍りしを、「斯ばかりに成りては、飛び下るるとも下りなん、如何に斯く云ふぞ」と申し侍りしかば、「其事に候ふ。目眩めき、枝危き程は、己れが恐れ侍れば申さず、過ちは安き所に成りて必ず仕まつる事に候ふ」と云ふ。卑しき下臈なれども、聖人の戒めに恊へり。鞠も難き所を蹴出だして、後ろ安く思へば必ず落つると侍るやらん。

雙六　上手と云ひし人に、その手段を問ひ侍りしかば、「勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり。何れの手か疾く負けぬべきと案じて、其手を遣はずして、一目なりとも、遲く負くべき手に附くべし」と云ふ。道を知れる教、身を修め國を保たん道も亦然かなり。

「圍棋、雙六を好みて明し暮す人は、四重五逆にも勝れる惡事とぞ思ふ」と或聖の申しし事、耳に留まりて、いみじく覺え侍る。

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心靜かに爲すべからん事をば人云ひ掛けてんや。俄かの大事をも營

み、切に歎く事も有る人は、他の言聞き入れず、人の愁喜をも問はず。問はずとて何どやと恨むる人も無し。然れば年もやうやう長け、病にも纏はれ、況んや世をも遁れたらん人、また是れに同じかるべし。人間の儀式、何れの事か去り難からぬ。世俗の默し難きに隨ひて、是れを必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇も無く、一生は雜事の小節に障へられて空しく暮れなん。日暮れ途遠し、吾生已に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ。此心を得ざらん人は、物狂とも云へ、現無し情無しとも思へ、譏るとも苦まじ、譽むるとも聞き入れじ。

四十にも餘りぬる人の、色めきたる方、自ら忍びて有らんは如何がはせん。言に打出でて、男女の事、人の上をも云ひ戲るるこそ、似氣無く見苦しけれ。大方聞き惡く見苦しき事、老人の若き人に交はりて、興有らんと物云ひ居たる、數ならぬ身にて、世の信望ある人を隔て無き樣に云ひたる、貧しき所に、酒宴好み、客人に饗應せんと燦めきたる。

今出川の大殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川の邊りに、水の流れたる所にて、齋王丸、御牛を追ひたりければ、足掻の水、前板までささと掛かりけるを、爲則、御車の後に侯ひけるが、「希有の童かな、斯かる所にて御牛をば追ふものか」と云ひたりければ、大殿、御氣色惡しく成りて、「己れ車遣らん事、齋王丸に勝りてえな〔团知〕らじ、希有の男なり」とて、御車に頭を打當てられにけり。此高名の齋王丸は太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。此太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は特槌、一人は胞腹、一人は乙牛と附けられけり。

宿河原と云ふ所にて、梵論梵論多く集まりて、九品の念佛を申しけるに、外より入り來る梵論梵論の「若し此中に、いろをし坊と申す梵論やおはします」と尋ねければ、其中より「いろをし此處に候ふ。斯く述給ふは誰そ」と答ふれば、「白梵字と申す者なり。己れが師某と申す人、東國にていろをしと申す梵論に殺されけりと承りしかば、其人に逢ひ奉りて、恨み申さばやと思ひて、尋ね申すなり」と云ふ。いろをし、「ゆゆしくも尋ねおはしたり。然る事侍りき。此處にて對面し奉らば道場を汚し侍るべし。前の河原へ參り合はん。あなかしこ、脇差達、何方をも助勢ぎ給ふな、數多の煩ひに成らば、佛事の妨げに侍るべし」と云ひ定めて、二人河原に出で合ひて、心行くばかりに貫き合ひて、共に死ににけり。梵論梵論と云ふ者、昔は無かりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字など云ひける者、其始めなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執深く、佛道を願ふに似て鬪諍を事とす。放逸無慚の有樣なれども、死を輕くして、少しも拘泥まざる方の、潔く覺えて、人の語りしままに、書き附け侍るなり。

寺院の號、然らぬ萬づの物にも、名を附くる事、昔の人は少しも求めず、唯だ有りのままに易く附けけるなり。此頃は深く案じ、才覺「學」を顯はさんとしたるやうに聞ゆる、いと煩かし。人の名も目馴れぬ文字を附かんとする、益無き事なり。何事も珍しき事を求め異說を好むは、淺才の人の必ず有る事なりとぞ。

友とするに惡ろき者七つ有り。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病無く身強き人、四には酒を好む人、五には武く勇める人　六には虛言する人、七には慾深き人。善き友三つ有り。一には物く

るる友、二には醫師、三には智慧ある友。
鯉の羹食ひたる日は、鬢亂けずとなん。膠にも造る物なればねばりたる物にこそ。鯉ばかりこそ御前にても切らるる物なればノ句ヲ脫ス「今補」やんごとなき魚なり。鳥には雉雙無き物なり。雉、松茸などは、御湯殿の上に掛かりたるも苦しからず。其外は心憂き事なり。中宮の御方の御湯殿の上の黑御棚に、雁の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせ給ひて、やがて御文にて、「斯樣の物、然ながら其姿にて御棚に居て候ひし事、見習はず、樣惡しき事なり。はかばかしき人候はぬ故にこそ」など申されたりけり。
鎌倉の海に鰹と云ふ魚は、彼の境には、雙無き物にて、此頃もてなす物なり。其れも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「此魚己れ等若かりし世までは、はかばかしき人の前へ出づる事侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りし物なり」と申しき。斯樣の物も、世の末に成れば上ざままでも入り立つわざにこそ侍れ。
唐の物は藥の外は無くとも事缺くまじ。書どもは此國に多く廣まりぬれば、書きも寫してん。唐土船の容易からぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狹く渡しもて來る、いと愚かなり。「遠き物を寶とせずとも、また得難き寶を尊まずとも」と譜にも侍るとかや。
養ひ飼ふ物には馬、牛、繫ぎ苦むるこそ痛ましけれど、無くて協はぬ物なれば如何がはせん。犬は守り防ぐ務め、人にも勝りたれば、必ず有るべし。然れど家每に有る物なれば、殊更に求め飼はずとも有りなん。其外の鳥獸、すべて用無き物なり。走る獸は檻に籠め、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れら

れて、雲を戀ひ、野山を思ふ愁へ止む時無し。其思ひ我身に當りて忍び難くば、心有らん人是れを樂まんや。生を苦めて目を歡はしむるは桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂ぶを見て、逍遙の友と爲き。捕へ苦めたるに有らず。「凡そ珍らしき鳥、怪しき獸、國に育はず」とこそ書にも侍るなれ。

人の才能は、文明かにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手書く事、旨とする事は無くとも是れを習ふべし。學問に便り有らん爲めなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝の務めも醫に有らずは有るべからず。次に弓射、馬に乘る事、六藝に出だせり。必ず是れを窺ふべし。文武、醫の道、眞に缺けては有るべからず。是れを學ばんをば徒らなる人と云ふべからず。次に食は人の天なり、善く味を調へ知れる人、大いなる徳とすべし。次に細工萬づに用多し。此外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧みに、絲竹に妙なるは幽玄の道、君臣是れを重くすとは云へども、今の世には、是れを以ちて世を治むる事、漸く疎かなるに似たり。金は勝れたれども、鐵の益多きに如かざるが如し。

無益の事を爲して時を移すを、愚かなる人とも僻事をする人とも云ふべし。國の爲め君の爲めに止むことを得ずして爲すべき事多し。其餘りの暇幾ばくならず、思ふべし。人の身に止む事を得ずして營む所、第一に食物、第二に著る物、第三に居所なり。人間の大事、此三つには過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に侵されずして、靜かに過ぐすを樂びとす。但し人皆病あり。病に侵されぬれば、其愁忍び難し、醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つの事求め得ざるを貧しとす。此四つ缺けざるを富めりとす。此四つの外を求め營むを

奢とす。四つの事倹約ならば、誰の人か足らずとせん。

是法法師は、淨土宗に恥ぢずと雖も學匠を立てず。唯だ明暮念佛して、安らかに世を過ぐす有樣、いと有らまほし。

人に後れて、四十九日の佛事に、或聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、皆人涙を流しけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、「何時よりも殊に今日は尊く覺え侍りつる」と感じ合へりし返事に、或者の云く、「何とも候へ、あれ程唐の狗に似候ひなん上は」と、云ひたりしに、哀れも醒めて可笑しかりけり。然る導師の譽めやうやは有るべき。また「人に酒勸むるとて、己れ先づ飮べて、人に強ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たる事なり。二方に刃附きたる物なれば、持上ぐる時、先づ我頭を斬る故に、人をば斬らぬなり。己れ先づ醉ひて臥しなば、人は餘も召さじ」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや。いとをかしかりき。

博奕の負極まりて、殘り無く打ち入れんとせんに遇ひては、打つべからず。立ち返り續けて勝つべき時の至れると知るべし。其時を知るを良き博奕と云ふなり。「と或者申しき。ノ句[イ]ニアリ」

改めて益無き事は、改めぬを善しとするなり。

雅房大納言は、才賢く、好き人にて、大將にも爲さばやと思しける頃、院の近習なる人、「只今あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房は鷹に飼はんとて、生きたる犬

の足を切り侍りつるを中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、疎ましく憎く思召して、日頃の御氣色も違ひ、昇進も爲給はざりけり。然ばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は跡無き事なり。虚言は不便なれども、斯かる事を聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心は、いと尊き事なり。大方生ける物を殺し、痛め鬪はしめて遊び樂まん人は、畜生殘害の類ひなり。萬づの鳥獸、小さき蟲までも、心を留めて有樣を見るに、子を思ひ親を懷しくし、夫婦を伴ひ、嫉み、怒り、欲多く、身を愛し、命を惜める事、偏に愚痴なる故に、人よりも増さりて甚し。彼に苦しみを與へ、命を奪はん事、如何でか痛ましからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心無からんは人倫に有らず。

顔回は、志、人に勞を施さじとなり。すべて人を苦め物を虐ぐる事、賤しき民の志をも奪ふべからず。また幼き子を賺し嚇し、云ひ辱しめて興ずる事あり。大人しき人は、眞ならねば事にも有らず思へど、幼なき心には、身に沁みて恐ろしく、恥かしく、あさましき思ひ、眞に切なるべし。是れを惱まして興ずる事、慈悲の心に有らず。大人しき人の、喜び、怒り、悲び、樂むも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身を破るよりも心を痛ましむるは、人を害ふこと猶甚し。病を受くる事も多くは心より受く。外より來る病は少なし。藥を飲みて汗を求むるには、驗無き事あれども、一旦恥ぢ恐るる事あれば、必ず汗を流すは、心の業なりと云ふ事を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人と成りし例無きに有らず。

物に爭はず、己れを枉げて人に從ひ、我身を後にして人を先にするには如かず。萬づの遊びにも、勝負を

好む人は勝ちて興あらん爲めなり。己れが藝の勝りたる事を喜ぶ。然れば負けて興無く覺ゆべき事また知られたり。我れ負けて人を歡ばしめんと思はば、更に遊びの興無かるべし。人に本意無く思はせて、我心を慰めんこと、徳に反けり。睦まじき中に戯るるも、人を謀り欺きて、己れが智の勝りたる事を興とす。是れまた禮に有らず。然れば初め興宴より起りて、長き恨を結ぶ類ひ多し。是れ皆爭ひを好む失なり。人に勝たん事を思はば、唯だ學問して、其智を人に勝らんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、儕輩に爭ふべからずと云ふ事を知るべき故なり。大いなる職をも辭し、利をも捨つるは、唯だ學問の力なり。

貧しき者は財を以つて禮とし、老いたる者は力を以つて禮とす。己が分を知りて、及ばざる時は速かに止むを智と云ふべし。許さざらんは人の誤なり。分を知らずして強ひて勵むは己れが誤なり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病を受く。

鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の號には有らず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えける由、李部王の記に侍るとかや。

夜の御殿は東御枕なり。大方東を枕として、陽氣を受くべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿の設飾、或は南枕、常の事なり。白河院は北首に御寢なりけり。北は忌む事なり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を御後にせさせ給ふ事如何にと人申しけり。但し太神宮の遙拜は巽に向はせ給ふ、南には有らず。

高倉院の、法華堂の三昧僧、某の律師とかや云ふ者、或時鏡を取れて、顔をつくづくと見て、我が容貌の

醜くあさましき事を、餘りに心憂く覺えて、鏡さへ疎ましき心地しければ、其後長く鏡を恐れて、手にだに取らず、更に人に交はる事無し。御堂の勤めばかりに逢ひて、籠り居たりと聞き侍りしこそ有り難く覺えしか。賢げなる人も、人の上をのみ量りて、己れをば知らざるなり。我を知らずして外を知ると云ふ道理あるべからず。然れば己れを知るを物知れる人と云ふべし。容貌醜けれども知らず、心の愚かなるをも知らず、藝の拙なきをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の侵すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、況して外の譏を知らず。但し容貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る、我身の事知らぬには有らねど、爲べき方の無ければ、知らぬに似たりとぞ云はまし。容貌を改め、齡を若くせよとには有らず。拙なきを知らば何ぞ「やがて退かざる。老いぬと知らば何ぞ靜かに身を安くせざる。行ひ愚かなりと知らばノ句ヲ脱ス。〔日補〕」何ぞ是れを思ふこと是れに在らざる。すべて人に愛樂せられずして、衆に交はるは恥なり。容貌醜く心劣れにして出で仕へ、無智にして大才に交はり、不堪の藝を持ちて堪能の座に列り、雪の頭を戴きて盛りなる人に並び、況んや及ばざる事を望み、協はぬ事を憂へ、來らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥に有らず。貪る心に引かれて、自ら身を辱むるなり。貪る事の止まざるは命を終ふる大事、今茲に來れりと確かに知らざればなり。

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、「吾主の問はれん程の事、何事なりとも答へ申さざらんや」と云はれければ、具氏、「如何が侍らん」と申されけるを、「然らば諍ひ給へ」と云はれ

て、はかばかしき事は片端も學び知り侍らねば、尋ね申すまでも無し。何と無き漫言の中に覺束なき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「況して此處許の淺き事は何事なりとも明らめ申さん」と云はれければ、近習の人人、女房なども「興ある諍ひなり、同じくは御前にて爭はるべし、負けたらん人は供御を設けらるべし」と定めて、御前にて召し合はせられたりけるに、「具氏、幼くより聞き習ひ侍れど、其心を知らぬ事侍り。『うまのきつりやう、きつにのをか、なかくぼれいり、くれんどう』「馬退きつ、狐の丘、中凹れ入り、くれんどう」と申す事は、如何なる心にか侍らん、承らん」と申されけるに、大納言入道、はたと詰りて、「是れは漫言なれば、云ふにも足らず」と云はれけるを、「本より深き道は知り侍らず、漫言を尋ね奉らんと定め申しつ」と申されければ、大納言入道負けに成りて、所課嚴しくせられたりけるとぞ。

醫師あつしげ、故法皇の御前に侍ひて、供御の參りけるに、「今參り侍る供御の色色を、文字も功能も尋ね下されて、空に申し侍らば、「本草」に御覽じ合せられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける。時しも六條の故内府參り給ひて、「有房、序に物習ひ侍らん」とて、「先づ「しほ」「鹽、塩、塷」と云ふ文字は、何れの扁にか侍らん」と問はれたりけるに、「土扁に候ふ」と申したりければ「才の程既に顯はれにけり、今は然ばかりにて候へ、ゆかしき所無し」と申されけるに、響動に成りて退り出でにけり。

花は盛りに、月は隈無きをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、垂れ籠めて春の行方知らぬも、猶哀れに情深し。咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけ

るに、早く散り過ぎにければ」とも、「障る事ありて罷らで」なども書けるは、「花を見て」と云へるに劣れる事かは。花の散り月の傾くを慕ふ習ひは然る事なれど、殊に頑なる人ぞ、此枝、かの枝散りにけり、今は見所無しなどは云ふめる。萬づの事も、始め終りこそをかしけれ。男女の情も、偏に逢ひ見るをば云ふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、徒なる契を歎ち、長き夜を獨り明し、遠き雲居を思ひ遣り、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色好むとは云はめ。望月の隈無きを千里の外まで眺めたるよりも、曉近く成りて待ち出でたるが、いと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、打時雨れたる村雲隱れの程、又無く哀れなり。椎柴、白樫などの濡れたるやうなる葉の上に燦めきたるこそ、身に沁みて、心有らん友もがなと、都戀しう覺ゆれ。すべて月花をば然のみ目にて見る物かは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。好き人は偏に好ける樣にも見えず、興ずる樣も等閑なり。片田舍の人こそ色濃く萬づは持て興ずれ。花の下には、ねぢ寄り立ち寄り、傍見もせず瞻りて、酒のみ、連歌して、果ては大きなる枝、心無く折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡附けなど、萬づの物、外ながら見る事無し。然樣の人の祭見し樣、いと珍らかなりき。「見事いと遲し、其程は桟敷不用なり」とて、奧なる屋にて酒のみ物食ひ、圍棊、雙六など遊びて、桟敷には人を置きたれば、渡り候ふと云ふ時に、各肝潰るるやうに爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張り出でて押し合ひつつ、一事も見漏さじと瞻りて、と有り斯かりと、物毎に云ひて、渡り過ぎぬれば、又渡らんまでと云ひて下り

ぬ。唯だ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゆしげなるは、眠りていとも見ず。若く末末なるは、宮仕に立ち居、人の後ろに侍ふは、様悪しくも及び掛からず、理無く見んとする人も無し。何と無く葵掛け渡して、艶めかしきに、明け離れぬ程、忍びて寄する車どものゆかしきを、其れか彼れかなど思ひ寄すれば、牛飼、下部などの見知れるも有り。をかしくも、綺羅しくも、様様に行き交ふ、見るも徒然ならず。暮るる程には、立て並べつる車ども、所無く並み居つる人も何方へ行きつらん、程無く稀に成りて、車どもの亂がはしさも濟みぬれば、簾、疊も取り拂ひ、目の前に寂しげに成り行くこそ、世の例も思ひ知られて哀れなれ。大路見たるこそ祭見たるにては有れ。彼の棧敷の前を、許多行き交ふ人の見知れるが數多あるにて知りぬ、世の人數も、然のみは多からぬにこそ。此の人皆失せなん後、我身死ぬべきに定まりたりとも、程無く待ち付けぬべし。大きなる器物に水を入れて、細き孔を明けたらんに、滴ること少なしと云ふとも、怠る間無く漏り行かば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日は有るべからず、一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、然らぬ野山にも、送る數多かる日は有れど、送らぬ日は無し。然れば棺を鬻ぐ者、造りて打置く程無し。若きにも由らず、強きにも由らず、思ひ掛けぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは不思議なり。暫しも世を長閑かには思ひなんや。繼子立と云ふ物を、雙六の石にて造りて立て並べたる程は、取られん事何れの石とも知らねども、數へ當てて一つを取りぬれば、其外は免れぬと見れど、又又數ふれば、彼れ是れ間拔き行く程に、何れも免れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近き事を知り

て、家をも忘れ、身をも忘る。世を背ける草の庵には、靜かに水石を翫びて、是れを餘所に聞くと思へるは、いとはかなし。靜かなる山の奥、無常の敵競ひ來らざらんや。其死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ。

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、或人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色も無く覺え侍りしを、貴き人の爲給ふ事なれば、然るべきにやと思ひしかど、周防内侍が、「掛くれども効無き物は諸共に御簾の葵の枯葉なりけり」と詠めるも、母屋の御簾に葵の掛かりたる枯葉を詠める由、家の集に書けり。古き歌の詞書に、「枯れたる葵に挿して遣はしける」とも侍り。「枕草紙」にも、「來し方戀しき物、枯れたる葵」と書けるこそ、いみじく懷かしう思ひ寄りたれ。鴨長明が「四季物語」にも、「玉簾に後の葵は留まりけり」とぞ書ける。己れと枯るるだにこそ有るを、名殘無く如何が取り捨つべき。御帳に掛かれる藥玉も、「九月九日菊に取り替へらるる」と云へば、菖蒲は菊の折までも有るべきにこそ。枇杷皇太后宮崩れ給ひて後、古き御帳の内に、菖蒲、藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「折ならぬ根を猶ぞ掛けつる」と辨の乳母の云へる返事に、「菖蒲の草は有りながら」とも江の侍從が詠みしぞかし。

家に有りたき木は、松、櫻。松は五葉も好し。花は一重なる好し。八重櫻は奈良の都にのみ有りけるを、此頃ぞ世に多く成り侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆一重にてこそ有れ。八重櫻は異樣の物なり。いと煩たく妖媚けたり、植ゑずとも有りなん。遲櫻また荒涼じ。蟲の附きたるも煩かし。梅は白き、薄紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の匂めでたきも、皆をかし。遲き梅は、櫻に咲き合ひて、覺え劣り、

氣壓されて、枝に萎み付きたる、心憂し。一重なるが先づ咲きて散りたるは、心疾くをかしとて、京極入道中納言は、猶一重梅をなん軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。柳またをかし。卯月ばかりの若楓、すべて萬づの花紅葉にも勝りてめでたき物なり。橘、桂、何れも木は物古り大きなる、好し。草は山吹、藤、杜若、瞿麥。池には蓮。秋の草は荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、木香、刈萱、龍膽、菊。黄菊も。蔦、葛、朝顔、何れもいと高からず、細小やかなる垣に繁からぬ、好し。此外世に稀なる物、唐めきたる名の聞き惡く、花も見馴れぬなど、いと懷かしからず。大方何も珍しく有り難き物は、好からぬ人の持て興ずる物なり。然樣の物無くて有りなん。

身死して財遺る事は、智者の爲ざる所なり。好からぬ物蓄へ置きたるも拙なく、好き物は心を留めけんと、はかなし。煩たく多かる、況して口惜し。「我れこそ得め」など云ふ者ども有りて、跡に爭ひたる樣、惡し。後には誰にと心ざす者あらば、生けらん中にぞ讓るべき。朝夕無くて協はざらん物こそ有らめ、其外に何も持たでぞ有らまほしき。

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかや。雙無き武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、「東人こそ云ひつる事は頼まるれ。都の人は言承のみ善くて、眞實無し」と云ひしを、聖、其れは然こそ思すらめども、己れは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心柔かに情ある故に、人の云ふ程の事、明斷けく否び難くて、萬づ云ひ放たず、心弱く言承しつ。僞りせんとは思はねど、

乏しく協はぬ人のみ有〔二字身なカ〕れば、自ら本意通らぬ事多かるべし。東人は我方なれど、げには心の色無く情遅れ、偏に剛直なる者なれば、初めより否と云ひて止みぬ。賑ひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし」と、理られ侍りしこそ、此聖、聲打訛み、荒荒しくて、聖教の細やかなる道理、いと辨へずもやと思ひしに、此一言の後、心にくく成りて、多かる中に寺をも住持せらるるは、斯く和ぎたる所ありて、其益も有るにこそと覺え侍りし。

心無しと見ゆる者も、善き一言は云ふものなり。或る荒夷の恐ろしげなるが、傍の人に逢ひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「然ては物の哀れは知り給はじ、情無き御心にぞ物し給ふらんと、いと恐ろし。子故にこそ萬づの哀れは思ひ知らるれ」と云ひたりし。然も有りぬべき事なり。恩愛の道ならでは、斯かる者の心に慈悲ありなんや。孝養の心無き者も、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。世を捨てたる人の、萬づに單身無物なるが、なべて羈絆多かる人の、萬づに諂ひ望深きを見て、無下に思ひ下すは僻事なり。其人の心に成りて思へば、眞に悲しからんや「イ無シ」親の爲め妻子の爲めには、恥をも忘れ、盗みもしつべき事なり。然れば盗人を縛め、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産無き時は恒の心無し。人窮りて盗す、世治らずして凍餒の苦み有らば、科の者絶ゆべからず。人を苦め法を犯さしめて、其れを罪なはん事不便のわざなり。然て如何がして人を惠むべきとならば、上の奢り費す所を止め、民を撫で農を勸めば、下に利あらんこと疑ひ有る

べからず。衣食世の常なる上に、僻事せん人をぞ、眞の盜人とは云ふべき。

人の終焉の有様のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、唯だ靜かにして亂れずと云はば、心にくかるべきを、愚かなる人は、奇しく異なる相を語り附け、云ひし言葉も振舞も、己れが好む方に譽め成すこそ、其人の日頃の本意にも有らずやと覺ゆれ。此大事は、權化の人も定むべからず。博學の士も測るべからず。己れ違ふ所無くば、人の見聞くには由るべからず。

栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、「足、足」と云ひければ、上人立ち止まりて、「あな尊とや、宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。如何なる人の御馬ぞ、餘りに尊く覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」と答へけり。「此はめでたき事かな、阿字本不生にこそ有なれ。嬉しき結緣をも爲つるかな」とて、感涙を拭はれけるとぞ。

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり、能く能く愼み給へ」と云ひけるを、いと眞しからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと人思へり。然て「如何なる相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、此相を負せ侍りき。何時かは申し誤りたる」とぞ云ひける。

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「己れ若し兵仗の難や有る」と尋ね給ひければ、相人、「眞に其相おはします」と申す。「如何なる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐れおはしますまじき御身にて、假にも斯く思

し寄りて尋ね給ふ。是れ既に其危みの兆なり」と申しけり。果して矢に中りて失せ給ひにけり。

灸治あまた所に成りぬれば、神事に穢ありと云ふ事、近く人の云ひ出だせるなり。「格」、「式」等にも見えずとぞ。

四十以後の人、身に灸を加へて、三里を燒かざれば上氣の事あり。必ず灸すべし。

鹿茸を鼻に當てて嗅ぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて、腦を食むと云へり。

能を附かんとする人、善く爲ざらん程は、「憖に人に知られじ。内内善く習ひ得て差し出でたらんこそ、いと心にくからめ」と常に云ふめれど、斯く云ふ人、一藝も習ひ得る事無し。未だ堅固不備なるより、上手の中に交りて、譏り笑はるるにも恥ぢず、冷然く過ぎて嗜む人、天性其骨無けれども、道に泥まず、妄りに爲ずして、年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、德長け、人に許されて、雙び無き名を得る事なり。天の下の物の上手と云へども、初めは不堪の聞えも有り、無下の瑕瑾も有りき。然れども其人、道の掟正しく、是れを重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師と成る事、諸道異るべからず。

或人の云く、年五十に成るまで上手に至らざらん藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末も無し。老人の事をば人も笑はず、衆に交はりたるも合無く見苦し。大方萬づの爲業は止めて、暇あるこそ目安く、有らまほしけれ。世俗の事に關係はりて生涯を暮すは下愚の人なり。ゆかしく覺えん事は學び聞くとも、其趣を知りなば、覺束なからずして止むべし。本より望む事無くして止まんは第一の事なり。

西大寺靜然上人、腰屈まり眉白く、眞に德長けたる有樣にて、內裏へ參られたりけるを、西園寺內大臣殿、「あな尊との氣色や」とて、信仰の氣色ありければ、資朝卿是れを見て、「年の寄りたるに候ふ」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛剝げたるを引かせて、「此氣色尊く見えて候ふ」とて、內府へ參らせられたりけるとぞ。

爲兼大納言入道、召し取られて武士ども打圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一條邊にて是れを見て、「あな羨まし、世に在らん思出、斯くこそ有らまほしけれ」とぞ云はれける。

此人、東寺の門に雨宿せられたりけるに、不具者どもの集まり居たるが、手も足も捩ぢ歪み打返りて、何處も不具に異樣なるを見て、取り取りに類ひ無き曲者なり、最も愛するに足れりと思ひて、凝視り居ける程に、やがて其興盡きて、醜く悒せく覺えければ、唯だ素直に珍しからぬ物には如かずと思ひて、歸りて後、此間植木を好みて、異樣に曲折あるを求めて、目を喜ばしめつるは、彼の不具者を愛するなりけりと、興無く覺えければ、鉢に植ゑられける木ども、皆掘り棄てられにけり。然も有りぬべき事なり。

世に從はん人は、先づ機嫌「譏嫌」を知るべし。時機惡しき事は、人の耳にも逆ひ、心にも違ひて、其事成らず。然樣の折節を心得べきなり。但し病を受け、子生み、死ぬる事のみ、機嫌を計らず、時節惡しとて止む事無し。生住異滅の移り變る眞の大事は、猛き河の漲り流るるが如し。暫しも滯らず、直ちに行ひ行くものなり。然れば眞俗に附けて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌を云ふべからず。とかくの用意無

く、足を踏み止むまじきなり。春暮れて後夏に成り、夏果てて秋の來るには有らず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青く成り、梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむには有らず、下より萌し熟るに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ち取る時機甚だ早し。生老病死の移り來る事、また是れに過ぎたり。四季は猶定まれる時機あり。死期は時機を待たず、死は前よりしも來らず、豫て後ろに迫れり。人皆死ある事を知りて、待つ事而かも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の滿つるが如し。

大臣の大饗は、然るべき所を申し受けて行ふ、常の事なり。宇治左大臣殿は、東三條殿にて行はる。内裏にて有りけるを、申されけるに由りて、餘所へ行幸ありけり。然せる事の緣故無けれども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

筆を取れば物書かれ、樂器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤打たん事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも不善の戲れを爲すべからず。假初に聖教の一句を見れば、何と無く前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事も有り。假に今此文を廣げざらましかば此事を知らんや。是れ則ち觸るる所の徳なり。心更に起らずとも、佛前に在りて數珠を取り經を取らば、怠る中にも善業自ら修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理本より二つならず。外相若し反かざれば、内證必ず熟す。強ひて不信と云ふべからず。仰ぎて是れを尊むべし。

杯の底を捨つる事は、「如何が心得たる」と或人の尋ねさせ給ひしに、「凝當と申し侍れば、底に凝りたるを捨つるにや候ふらん」と申し侍りしかば、「然には有らず、魚道なり。流を殘して、口の着きたる所を滌ぐなり」とぞ仰せられし。

「美奈結びと云ふは、絲を結び重ねたるが、蜷と云ふ貝に似たれば云ふ」と或るやんごとなき人仰せられき。「にな」と云ふは誤なり。

門に額掛くるを「打つ」と云ふは善からぬにや。勘解由小路二品禪門は、「額掛くる」と述給ひき。見物の「棧敷打つ」も善からぬにや。「平張打つ」などは常の事なり。「棧敷構ふる」など云ふべし。「護摩焚く」と云ふも惡ろし、「修する」、「護摩する」など云ふなり。行法も、「法の字を清みて云ふ、惡ろし。濁りて云ふ」と清閑寺僧正仰せられき。常に云ふ言に、斯かる言のみ多し。

花の盛りは、冬至より百五十日とも、時正の後七日とも云へど、立春より七十五日、大様違はず。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひ付けて、堂の中まで餌を撒きて、戸一つ開けたれば、數も知らず入り籠りける後、己れも入りて、立て籠めて捕へつつ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草刈る童聞きて、人に告げければ、村の男ども起りて入りて見るに、大雁ども狼狽き合へる中に法師交りて、打伏せ捩ぢ殺しければ、此法師を捕へて、所より使廳へ出だしたりけり。殺す所の鳥を頸に掛けさせて、禁獄せられけり。基俊大納言別當の時になん侍りける。

太衡の太の字、點打つ、打たずと云ふ事、陰陽の徒輩、相論の事ありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿に有り。點打ちたるを書きたり」と申しき。

世の人相逢ふ時、暫くも默止する事無し、必ず詞あり。其事を聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他の爲めに失多く得少なし。是れを語る時、互の心に無益の事なりと云ふ事を知らず。

東の人の都の人に交はり、都の人の東に行きて身を立て、また本寺、本山を離れぬる顯密の僧、すべて我が俗に在らずして、人に交はれる、見苦し。

人間の營み合へる業を見るに、春の日に雪佛を作りて、其爲めに金銀珠玉の飾りを營み、堂塔を建てんとするに似たり。其構を待ちて、能く安置してんや。人の命ありと見る程も、下より消ゆること、雪の如くなる中に、營み待つこと甚だ多し。

一道に携はる人、有らぬ道の莚に臨みて、「あはれ我が道ならましかば、斯く外に見侍らじものを」と云ひ、心にも思へる事、常の事なれど、世に惡ろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨ましく覺えば、「あな羨まし、何どか習はざりけん」と云ひて有りなん。我が智を取り出でて人に爭ふは、角ある物の角を傾け、牙ある物の牙を咬み出だす類ひなり。人としては善に誇らず、物と爭はざるを德とす。他に勝る事の有るは、大いなる失なり。種性の高さにても、才藝の勝れたるにても、先祖の譽にても、人に勝れりと思へる人は、たとひ詞に出でてこそ云はねども、內心に若干の咎あり。愼みて是れを忘るべし。迂愚にも見え、人にも云ひ消た

れ、禍をも招くは、唯だ此慢心なり。一道にも眞に長じぬる人は、自ら明らかに其非を知る故に、志常に滿たずして、終に物に誇ること無し。

年老いたる人の一事勝れたる才能ありて、此人の後には誰にか問はんなど云はるるは、老の方人にて、生けるも徒らならず。然は有れど、其れも廢れたる所の無きは、一生此事にて暮れにけりと拙たく見ゆ。今は忘れにけりと云ひて有りなん、大方は知りたりとも、漫ろに云ひ散らすは、然ばかりの才には有らぬにやと聞え、自から誤も有りぬべし。「分明にも辨へ知らず」など云ひたるは、猶眞に道の主とも覺えぬべし。況して知らぬ事、爲たり顔に、大人しく反調きぬべくも有らぬ人の云ひ聞かするを、然も有らずと思ひながら聞き居たる、いと佗し。

「何事の式と云ふ事は、後嵯峨の御代までは云はざりけるを、近き程より云ふ詞なり」と、人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内裏住したる事を云ふに、「世の式も變りたる事は無きにも」と書きたり。

然したる事無くて、人の許行くは善からぬ事なり。用ありて行きたりとも、其事果てなば疾く歸るべし。久しく居たる、いと煩かし。人と對ひたれば詞多く、身も草臥れ、心も靜かならず。萬づの事障りて時を移す、互の爲め益無し。厭はしげに云はんも惡ろし。心調和無き事あらん折は、なかなか其由をも云ひてん。同じ心に對はまほしく思はん人の、徒然にて「今暫し、今日は心靜かに」など云はんは、此限りには有らざ

るべし。阮籍が青き眼、誰も有るべき事なり。其事と無きに人の來りて、長閑かに物語して歸りぬる、いと好し。また文も「久しく聞えさせねば」などばかり云ひおこせたる、いと嬉し。

貝を被ふ人の、我が前なるをば置きて、餘所を見渡して、人の袖の蔭、膝の下まで目を配る間に、前なるをば人に被はれぬ。善く被ふ人は、餘所まで理無く取るとは見えずして、近きばかり被ふやうなれど、多く被ふなり。碁盤の隅に石を立てて彈くに、向ひなる石を凝視りて彈くは中らず。我が手元を善く見て、此處なる聖目を直ぐに彈けば、立てたる石必ず中る。萬づの事、外に向きて求むべからず。唯だ此處許を正しくすべし。清獻公が言葉に、「好事を行じて前程を問ふこと勿れ」と云へり。世を保たん道も斯くや侍らん。内を愼まず、輕く欲しき儘にして濫りなれば、遠國必ず反く時、初めて謀を求む。「風に當り濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚かなる人なり」と醫書に云へるが如し。目の前なる人の愁を止め、惠を施し、道を正しくせば、其化遠く流れん事を知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師を班して德を布くには如かざりき。

若き時は血氣、内に餘り、心、物に動きて、情欲多し。身を危めて碎け易き事、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて財を費し、是れを捨てて苔の袂に窶れ、勇める心盛りにして物と爭ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日日に定まらず。色に耽り、情に愛で、行ひを潔くして、百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全く久しからん事をば思はず、好ける方に心引きて、長き世語とも成る。身を過まつ事は若き時

の爲業なり。老いぬる人は精神衰へ、淡く疎かにして、感じ動く所無し。心自から靜かなれば、無益の行爲を爲さず。身を助けて愁無く、人の煩ひ無からん事を思ふ。老いて智の若き時に勝れる事、若くして形態の老いたるに勝れるが如し。

小野小町が事、極めて分明ならず。衰へたる樣は「玉造」と云ふ書に見えたり。此書清行が書けりと云ふ説あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和の初めに歿れ給へり。小町が盛りなる事、其の後の事にや。猶覺束なし。

小鷹に良き犬、大鷹に使ひぬれば、小鷹に惡ろくなると云ふ。大に就き小を捨つる道理、眞に然かなり。人事多かる中に、道を樂ぶより氣味深きは無し。是れ眞の大事なり。一度道を聞きて、是れに志さん人、何れの業か廢れざらん、何事をか營まん。愚かなる人と云ふとも、賢き犬の心に劣らんや。

世には心得ぬ事の多きなり。とも有る毎には先づ酒を勸めて、强ひ飮ませたるを興とする事、如何なる故とも心得ず。飮む人の顏いと堪へ難げに、眉を顰め、人目を計りて捨てんとし、逃げんとするを捉へて、引き留めて、漫ろに飮ませつれば、端麗しき人も忽ちに狂人と成りて迂愚がましく、息災なる人も目の前に大事の病者と成りて、前後も知らず倒れ臥す。祝ふべき日などはあさましかりぬべし。明くる日まで頭痛く、物食はずに醉ひ臥し、生を隔てたる樣にして、昨日の事覺えず、公私の大事を缺きて煩ひと成る。人をして斯かる目を見する事、慈悲も無く、禮儀にも反けり。斯く辛き目に逢ひたらん人、妬たく口惜しと思は

ざらんや。他の國に斯かる習ひ有りと、此國に無き他人事にて傳へ聞きたらんは、怪しく不思議に覺えぬべし。人の上にて見たるだに心憂し。思ひ入れたる樣に、心にくしと見し人も、思ふ所無く笑ひ喧騒り、詞多く、烏帽子歪み、紐外し、脛高く褰げて用意無き氣色、日頃の人とも覺えず。女は額髮晴れらかに掻き遣り、目映からず、顏打仰上げて打笑ひ、杯持てる手に取り附き、好からぬ人は肴取りて口に差し當て、自らも食ひたる樣惡し。聲の限り出だして、各歌ひ、舞ひ、年老いたる法師召し出だされて、黒く穢き身を肩脱ぎて、目も當てられず圍繞りたるを、興じ見る人さへ疎ましく憎し。或るはまた我身いみじき事ども、かたはら痛く云ひ聞かせ、或るは醉ひ泣きし、下樣の人は罵り合ひ諍ひて、あさましく恐ろし。恥がましく、心憂き事のみ有りて、果ては許さぬ物ども押し取りて、縁より落ち、馬、車より落ちて過ち爲つ。物にも乘らぬ際は、大路を蹌踉ひ行きて、築地、門の下などに向きて、えも云はぬ事ども爲散らし、年老い袈裟掛けたる法師の、小童の肩を押へて、聞えぬ事ども云ひつつ蹌踉きたる、いと可哀ゆし。斯かる事を爲ても、此世も後の世も、益あるべき業ならば如何がは爲ん。此世には過ち多く、財を失ひ、病を設く。百藥の長とは云へど、萬づの病は酒よりこそ起れ。憂を忘ると云へど、醉ひたる人ぞ過ぎにし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ、善根を燒くこと火の如くして、惡を増し、萬づの戒を破りて、地獄に墮つべし。「酒を取りて人に飮ませたる人、五百生が間、手無き者に生るる」とこそ佛は説き給ふなれ。

斯く疎ましと思ふ物なれど、自から捨て難き折も有るべし。月の夜、雪の朝、花の下にても、心長閑かに物

語して坏出だしたる、萬づの興を添ふるわざなり。徒然なる日、思ひの外に友の入り来て取り行ひたるも、心慰む。馴馴しからぬ邊の御簾の中より、御菓物、御酒など、好きやうなる氣はひして、差し出だされたる、いと好し。冬、狭き所にて、火にて物煎りなどして、隔て無きどち差し向ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅の假屋、野山などにて、「御肴何」など云ひて、芝の上にて飲みたるもをかし。甚う痛む人の強ひられて、少し飲みたるもいと好し。貴き人の取り分きて、「今一つ、上少なし」など宣給はせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひしひしと馴れぬる、また嬉し。然は云へど上戸はをかしく、罪宥さるる者なり。醉ひ草臥れて朝寝したる所を、主人の引き開けたるに、狼狽ひて、呆れたる顔ながら、細き髻差し出だし、物も着敢へず抱き持ち、引きしろひ逃ぐる掻取姿の後手、毛生ひたる細脛の程、をかしく調和し。

黒戸は、小松の帝位に即かせ給ひて、昔常人におはしましし時、正無事せさせ給ひしを忘れ給はで、常に營ませ給ひける間なり。御薪に煤けたれば、黒戸と云ふとぞ。

鎌倉中書王にて御鞠ありけるに、雨降りて後、未だ庭の乾かざりければ、如何がせんと沙汰有りけるに、佐佐木隠岐入道、鋸の屑を車に積みて、多く奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土の煩ひ無かりけり。「取り溜めけん用意有難し」と、人感じ合へりけり。此事を或者に語り出でたりしに、吉田中納言の「乾砂子の用意やは無かりける」と遣給ひたりしかば、恥かしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、卑しく異様の事なり。庭の儀を奉行する人、乾砂子を儲くるは故實なりとぞ。

或所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人に語るとて、「寶劍をば其人ぞ持ち給へる」など云ふを聞きて、内裏なる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御劍にてこそ有れ」と、忍びやかに云ひたりし、心にくかりき。其人舊き典侍なりけるとかや。

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅の邊り、燒野と云ふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。其聖の申されしは、「那蘭陀寺は大門北向なりと、江帥の說とて云ひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず、更に所見無し。江帥は如何なる才覺にてか申されけん、覺束なし。唐土の西明寺は、北向勿論なり」と申しき。

三ぎちやうは、正月に打ちたる毬杖を、眞言院より神泉苑へ出だして燒き上ぐるなり。法成就の池にこそと囃すは、神泉苑の池を云ふなり。

「降れ降れ粉雪、丹波の粉雪」と云ふ事、米搗き篩ひたるに似たれば粉雪と云ふ。「溜れ粉雪」と云ふべきを、誤りて、「たんばの」とは云ふなり。「垣や木の股に」と歌ふべしと、或る物知り申しき。昔より云ひける事にや、鳥羽院の幼なくおはしまして、雪の降るに斯く仰せられける由、讃岐典侍が日記に書きたり。

四條大納言隆親卿、乾鮭と云ふ物を供御に參らせたりけるを、「斯く卑しき物參るやう有らじ」と、人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭と云ふ魚參らぬ事にて有らんにこそ有れ、鮭の素干何でふ事か有らん。鮎の素干は參らぬかは」と申されけり。

一人突く牛をば角を切り、人食ふ馬をば耳を切りて其標とす。標を附けずして人を傷らせぬるは、主の科なり。人食ふ犬をば養ひ飼ふべからず。是れ皆科あり。律の禁めなり。

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事有りけるに、煤けたる明障子の破ればかりを、禪尼手づから、小刀して切り廻しつつ張られければ、兄人の城介義景、其日の經營して候ひけるが、「賜はりて、某男に張らせ候はん、然樣の事に心得たる者に候ふ」と申されければ、「其男、尼が細工に餘も勝り侍らじ」とて、猶一間づつ張られけるを、義景「皆を張り替へ候はんは、遙かに容易く候ふべし。斑に候ふも見苦しくや」と、重ねて申されければ、「尼も後はさわさわと張り替へんと思へども、今日ばかりはわざと斯くて有るべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと、若き人に見習はせて心づけん爲めなり」と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす、女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を、子にて持たれける、眞に常人には有らざりけるとぞ。

城陸奧守泰盛は、雙無き馬乘なりけり。馬を引き出でさせけるに、足を揃へて閾をゆらりと超ゆるを見ては、「是れは勇める馬なり」とて、鞍を置き替へさせけり。また足を延べて閾に蹴當てぬれば、「是れは鈍くして過ち有るべし」とて乘らざりけり。道を知らざらん人、斯ばかり恐れなんや。

吉田と申す馬乘の申し侍りしは、「馬毎に剛き物なり、人の力爭ふべからずと知るべし。乘るべき馬をば先づ能く見て、強き所、弱き所を知るべし。次に轡、鞍の具に危き事や有ると見て、心に掛かる事あらば、

其馬を馳すべからず。此用意を忘れざるを馬乘とは申すなり。是れ秘藏の事なり」と申しき。

萬づの道の人、たとひ不堪たりと云へども、堪能の非家の人に並ぶ時、必ず勝る事は、撓み無く愼みて、輕々しく爲ぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみに有らず、大方の振舞、心遣も、愚かに愼めるは得の本なり。巧にして縱なるは失の本なり。

或者、子を法師に成して、「學問して因果の道理をも知り、說經などして世を渡る便ともせよ」と云ひければ、敎のまゝに說經師にならん爲めに、先づ馬に乘り習ひけり。輿、車持たぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能無きは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌と云ふ事を習ひけり。二つのわざ漸う境に入りければ、いよいよ能く爲たく覺えて嗜みける程に、說經習ふべき隙無くて年寄りにけり。此法師のみにも有らず、世間の人なべて此事あり。若き程は諸事に付けて身を立て、大いなる道をも成し、能をも附き、學問をも爲せんと、行末久しく豫期す事どもを、心には掛けながら、世を長閑かに思ひて打怠りつつ、先づ差し當りたる目の前の事にのみ紛れて月日を送れば、事々成す事無くして身は老いぬ。終に物の上手にも成らず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取返さるる齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。然れば一生の中に、主と有らまほしからん事の中に、何れか勝ると能く思ひ較べて、第一の事を案じ定めて、其の外は思ひ捨てて、一事を勵むべし。一日の中、一時の中にも數多の事の來らん中に、少

しも益の勝らん事を營みて、其外をば打捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心に取り持ちては、一事も成るべからず。たとへば碁を打つ人、一手も徒らにせず、人に先だちて小を捨て大に附くが如し。其れに取りて三つの石を捨てて、十の石に附く事は易し。十を捨てて、十一に附く事は難し。一つなりとも勝らん方へこそ附くべきを、十まで成りぬれば惜しく覺えて多く勝らぬ石には替へ惡し。是れをも捨てず、彼れをも取らんと思ふ心に彼れをも得ず、是れをも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着きたりとも、西山に行きて、其益勝るべき事を思ひ得たらば、門より返りて、西山へ行くべきなり。此處まで來着きぬれば、此事をば先づ云ひてん。日を指さぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠即ち一生の懈怠と成る、是れを恐るべし。一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも痛むべからず、人の嘲りをも恥づべからず。萬事に替へずしては、一つの大事成るべからず。人の數多ありける中にて或る者「ますほの薄、まそほの薄など云ふ事あり。渡邊の聖此事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師其座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠や有る、貸し給へ。彼の薄の事習ひに、渡邊の聖の許尋ね罷らん」と云ひけるを、「餘りに物騷がし、雨止みてこそ」と人の云ひければ、「無下の事をも仰せらるるものかな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に、聖も亡せなば、尋ね聞きてんや」とて、走り出で行きつつ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゆしく有難う覺ゆれ。「敏き時は則ち功あり」とぞ、論語と云ふ書にも侍るなる。此薄を訝かしく思ひけるやうに、一大事

の因縁をぞ思ふべかりける。

今日は其事を爲さんと思へど、有らぬ急ぎ先づ出で來て紛れ暮し、待つ人は障り有りて、頼めぬ人は來り、頼みたる方の事は違ひて、思ひ寄らぬ道ばかりは協ひぬ。煩はしかりつる事は事無くて、安かるべき事はいと心苦し。日日に過ぎ行くさま、豫て思ひつるには似ず。一年の中も斯くの如し、一生の間もまた然かなり。豫ての豫想、皆違ひ行くかと思ふに、自ら違はぬ事も有れば、いよいよ物は定め難し。不定と心得ぬるのみ、眞にて違はず。

妻と云ふ者こそ男の持つまじきものなれ。何時も獨住にてなど聞くこそ心にくけれ。誰がしが壻に成りぬとも、また如何なる女を取り居ゑて、相住むなど聞きつれば、無下に〔イ心アリ〕劣りせらるるわざなり。異なる事無き女をよしと思ひ定めてこそ添ひ居たらめと、卑しくも推し量られ。好き女ならば、此男をぞ、らうたくして、吾が佛と守り居たらめ、譬へば然ばかりにこそと覺えぬべし。況して家の內を行ひ治めたる女、いと口惜し。子など出で來て、愛護き愛したる、心憂し。男亡く成りて後、尼に成りて年寄りたる有樣、亡き跡まであさまし。如何なる女なりとも、明暮添ひ見んには、いと心調和無く憎かりなん。女の爲めも半空にこそ成らめ。餘所ながら時時通ひ住まんこそ、年月經ても絶えぬ中らひとも成らめ。假初に來て泊り居などせんは、珍しかりぬべし。

夜に入りて物の映無しと云ふ人、いと口惜し。萬づの物の綺羅飾り、色節も、夜のみこそめでたけれ。晝は

は事削ぎ、長熟けたる姿にても在りなん。夜は燦らかに、華やかなる裝束いと好し。人の氣色も、夜の火影ぞ好きは好く、物云ひたる聲も暗くて聞えたる、用意ある心にくし。匂ひも物の音も、唯だ夜ぞ一際めでたき。さして異なる事無き夜、打更けて參れる人の、淸げなる樣したる、いと好し。若きどち心留めて見る人は、時をも分かぬものなれば、殊に打解けぬべき折節ぞ、褻晴無く引き裝ろはまほしき。好き男の日暮れて洗髮し、女も夜更くる程にすべりつつ、鏡取りて顏など裝ろひ出づるこそをかしけれ。

神佛にも人の詣でぬ日、夜參りたる、好し。

暗き人の人を忖度りて、其智を知れりと思はん、更に當るべからず。拙なき人の棊打つ事ばかりに敏く巧なるは、賢き人の此藝に疎かなるを見て、己れが智に及ばずと定めて、萬づの道の巧み、我道を人の知らざるを見て、己れ勝れたりと思はん事、大いなる誤なるべし。文字の法師、暗證の禪師、互に忖度りて己れに如かずと思へる、共に當らず。己れが境界に有らざるものをば爭ふべからず、是非すべからず。

達人の人を見る眼は、少しも誤る所あるべからず。譬へば、或人の、世に虛言を構へ出だして、人を謀る事あらんに、素直に眞と思ひて、云ふままに謀らるる人あり。餘りに深く信を起して、猶煩はしく虛言を心得添ふる人あり。また何としも思はで、心を附けぬ人あり。また聊か覺束なく覺えて、頼むにも有らず、頼まずも有らで案じ居たる人あり。また眞しくは覺えねども、人の云ふ事なれば然も有らんとて止みぬる人もあり。また樣樣に推し心得たる由して、賢げに打點頭き、微笑みて居たれど、つやつや知らぬ人あり。また

推し出だして、あはれ然るめりと思ひながら、猶誤もこそ有れと怪む人あり。また異なる樣も無かりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。また心得たれども、知れりとも云はず、覺束ながらぬは、とかくの事無く、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。また此虚言の本意を、初めより心得て、少しも欺かず、構へ出だしたる人と同じ心に成りて、力を合はする人あり。愚者の中の戯れだに知りたる人の前にては、此さまざまの得たる所、詞にても顔にても隱れ無く知られぬべし。况して明らかならん人の、惑へる我等を見ん事、掌の上の物を見んが如し。但し斯樣の推測にて、佛法までを準らへ云ふべきには有らず。

或人、久我繩手を通りけるに、小袖に大口着たる人、木作の地藏を田の中の水に押し浸して、懇ろに洗ひけり。心得難く見る程に、狩衣の男二三人出で來て、「此處におはしましけり」とて、此人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。世の常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、此殿、大將にて先を追はれけるを、土御門相國、「社頭にて警蹕如何が侍るべからん」と申されければ、「隨身の振舞は兵仗の家が知る事に候ふ」とばかり答へ給ひけり。然て後に仰せられけるは、「此相國、北山抄を見て、西宮の説をこそ知らざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るる故に、神社にて、殊に先を追ふべき道理あり」とぞ仰せられける。

諸寺の僧のみにも有らず、定額の女孺と云ふ事、「延喜式」に見えたり。すべて數定まりたる公人の通號にこそ。

揚名介に限らず、揚名目と云ふものも有り。「政事要略」に有り。

横川の行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の國なり、律の音無し。和國は單律の國にて、呂の音無し」と申しき。

呉竹は葉細く、漢竹は葉廣し。御溝に近きは漢竹、仁壽殿の方に寄りて植ゑられたるは呉竹なり。

退凡下乘の卒都婆、外なるは下乘、內なるは退凡なり。

十月を神無月と云ひて、神事に憚るべき由は、記したる物無し。本文も見えず。但し當月諸社の祭無き故に、此名あるか。此月萬づの神達、太神宮へ集まり給ふなど云ふ說あれども、其本說無し。然る事ならば伊勢には殊に祭月とすべきに、其例も無し。十月諸社の行幸其例も多し。但し多くは不吉の例なり。

勅勘の所に靫掛くる作法、今は絕えて知れる人無し。主上の御惱、大方世の中の騷がしき時は、五條の天神に靫を掛けらる。鞍馬に靫の明神と云ふも、靫掛けられたりける神なり。看督長の負ひたる靫を、其家に掛けられぬれば、人出で入らず。此事絕えて後、今の世には封を付くる事に成りにけり。

犯人を笞にて打つ時は、拷器に寄せて結ひ附くるなり。拷器の樣も、寄する作法も、今は辨へ知れる人無しとぞ。

比叡山に大師勸請の起請と云ふ事は、慈惠僧正書き始め給ひけるなり。起請文と云ふ事、法曹には其沙汰無し。古の聖代、すべて起請文に附きて行はるる政は無きを、近代此事流布したるなり。また法令に

は水火に穢を立てず、入物には穢れ有るべし。

徳大寺右大臣殿、検非違使の別當の時、中門にて使廳の評定行はれける程に、官人章兼が牛離れて、廳の内へ入りて、大理の座の濱床の上に上りて、齝打噛みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師の許へ遣はすべき由、各申しけるを、父の相國聞き給ひて、「牛に分別無し、足あれば何處へか上らざらん。尩弱の官人、たまたま出仕の微牛を捕らるべきやう無し」とて、牛をば主に返して、臥したりける疊をば替へられにけり。あへて凶事無かりけるとなん。「怪しみを見て怪まざる時は、怪しみ却りて壞る」と云へり。

龜山殿建てられんとて、地を引かれけるに、大きなる蛇、數も知らず凝り集まりたる塚ありけり。此所の神なりと云ひて、事の由申しければ、「如何が有るべき」と勅問ありけるに「舊くより此地を占めたるものならば、左右無く掘り捨てられ難し」と皆人申されけるに、此大臣一人、「王土に居らん蟲、皇居を建てられんに、何の祟をか爲すべき。鬼神は邪無し、咎むべからず。唯だ皆掘り捨つべし」と申されたりければ、塚を崩して、蛇をば大井川に流してけり。更に祟り無かりけり。

經文などの紐を結ふに、上下より襷に交へて、二筋の中より、わなの頭を横ざまに引き出だす事は常の事なり。然樣にしたるをば、華嚴院弘舜僧正解きて直させけり。「是れは此頃樣の事なり。いと醜し。端麗しくは、唯だくるくると卷きて、上より下へわなの先を差し挟むべし」と申されけり。舊き人にて、斯樣の事

知れる人になん侍りける。

人の田を論ずる者、訴に負けて妬さに、「其田を刈りて取れ」とて人を遣はしけるに、先づ道すがらの田をさへ刈りもて行くを、「是れは論じ給ふ所に有らず、如何に斯くは」と云ひければ、刈る者ども、「其所とても刈るべき道理無ければ、僻事せんとて罷る者なれば、何處をか刈らざらん」とぞ云ひける。道理いとをかしかりけり。

喚子鳥は春の物なりとばかり云ひて、如何なる鳥とも分明に記せる物無し。或る眞言書の中に、喚子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり。是れは鵺なり。「萬葉集」の長歌に「霞立つ長き春日の」など續けたり。鵺鳥も喚子鳥の事様に通ひて聞ゆ。

萬づの事は頼むべからず。愚かなる人は深く物を頼む故に、怨み怒る事あり。勢ありとて頼むべからず、剛き物先づ滅ぶ。財多しとて頼むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて頼むべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとて頼むべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも頼むべからず、誅を受くる事速かなり。奴従へりとて頼むべからず、反き走る事あり。人の志をも頼むべからず、必ず變ず。約をも頼むべからず、信ある事少なし。身をも人をも頼まざれば、是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右廣ければ障らず、前後遠ければ塞がらず。狭き時は壓し裂け碎く。心を用ふる事少しきにして、嚴しき時は、物に逆ひ、爭ひて敗る。寛くして柔かなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地は限る所無し。人の性何ぞ異ならん。寛大

にして窮まらざる時は、喜怒是れに障らずして、物の爲めに煩はず。

秋の月は限り無くめでたき物なり。何時とても月は斯くこそ有れとて、思ひ分かざらん人は、無下に心憂かるべき事なり。

御前の火爐に火を置く時は、火箸して挾む事無し。土器より直ちに移すべし。然れば轉び落ちぬやうに心得て、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣を著て、手にて炭を挿されければ、或る有識の人、「白き物を著たる日は、火箸を用ふる、苦しからず」と申されけり。

想夫戀と云ふ樂は、女、男を戀ふる故の名には有らず。本は相府蓮、文字の通へるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せし時の樂なり。是れより大臣を蓮府と云ふ。廻忽も廻鶻なり、廻鶻國とて、夷の強き國あり、其夷、漢に伏「服」して後に來りて、己れが國の樂を奏せしなり。

平の宣時朝臣、老の後、昔語りに、「最明寺入道或宵の間に呼ばるること有りしに、「やがて」と申しながら、直垂の無くてとかくせし程に、また使來りて、「直垂などの候はぬにや、夜なれば異樣なりとも、疾く」と有りしかば、萎えたる直垂、内内の儘にて罷りたりしに、銚子に土器取り添へて持て出でて、「此酒を獨り食べんが淋しければ申しつるなり。肴こそ無けれ、人は靜まりぬらん、然りぬべき物や有ると、何處までも求め給へ」と有りしかば、紙燭差して隈隈を求めし程に、臺所の棚に小土器に、味噌の少し着きたるを見出でて「是れぞ求め得て候ふ」と申ししかば、「事足りなん」とて、快く數獻に及びて、興に入られ侍

りき。其世には斯くこそ侍りしかと申さき。
最明寺入道、鶴岡の社參の序に、足利左馬入道の許へ、先づ使を遣はして立ち入られたりけるに、饗設けられたりけるやう、一獻に打鮑、二獻に蝦、三獻に搔い餠にて止みぬ。其座には亭主夫婦、隆辨僧正、主人方の人にて坐せられけり。「然て年毎に賜はる足利の染物、心もとなく候ふ」と申されければ、「用意し候ふ」とて、色色の染物三十、前にて女房どもに、小袖に調ぜさせて後に遣はされけり。其時見たる人の、近くまで侍りしが語り侍りしなり。
或る大福長者の云く、「人は萬づを差し置きて、一向に德を附くべきなり。貧しくては生ける効無し、富めるのみを人とす。德を附かんと思はば、須らく先づ其心遣ひを修行すべし。其心と云ふは他の事に有らず、人間常住の思に住して、假にも無常を觀ずること勿れ。是れ第一の用心なり。次に萬事の用を叶ふべからず。人の世に有る自他に附けて所願無量なり。欲に從ひて志を遂げんと思はば、百萬の錢ありと云ふとも暫くも住すべからず。所願は止む時無し。財は盡くる期あり。限り有る財を持ちて、限り無き願に從ふ事得べからず。所願心に萌す事あらば、我を亡ぼすべき惡念來れりと、堅く愼み恐れて、小用をも爲すべからず。次に錢を奴の如くして、遣ひ用ふる物と知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神の如く畏れ尊みて、從へ用ふること勿れ。次に恥に臨むと云ふとも、怒り恨むること勿れ。次に正直にして約を堅くすべし。此義を守りて利を求めん人は、富の來る事、火の燥けるに就き、水の下れるに從ふが如くなるべし。錢

積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を成ぜざれども、心長久に安く樂し」と申しき。抑も人は所願を成ぜんが爲めに財を求む。錢を財とする事は願を協ふるが故たり。所願あれども協へず、錢あれども用ひざらんは、全く貧者と同じ、何をか樂びとせん。この掟は唯だ人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲を成して樂びとせんよりは、如かじ財無からんには。癰疽を病む者、水に洗ひて樂びとせんよりは、病まざらんには如かじ。ここに至りては、貧富分く所無し。究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり。

狐は人に食ひ附くものなり。堀川殿にて、舍人が寢たる足を狐に食はる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛び掛かりて食ひ附きければ、刀を拔きて是れを防ぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。法師は數多所食はれながら、事故無かりけり。

四條黄門命ぜられて云く、「龍秋は道に取りてはやんごとなき者なり。先日來りて云く、『短慮の至り、極めて荒涼の事なれども、横笛の五の孔は、聊か訝しき所の侍るかと、私かに是れを存ず。其故は干の孔は平調、五の孔は下無調なり。其間に勝絶調を隔てたり。上の孔雙調、次に鳧鐘調を置きて、夕の孔黄鐘調なり。其次に鸞鏡調を置きて、中の孔盤渉調、中と六との間に神仙調あり。斯樣に間間に皆一律を偸めるに、五の孔のみ上の間に調子を持たずして、然かも間を配る事等しき故に、其聲不快なり。然れば此孔を吹く時は、必ず除く。除け敢へぬ時は物に合はず、吹き得る人難しと申しき。料簡の至り眞に興あり。先達後

生を恐ると云ふ事、此事なりと侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、「笙は調おほせて持ちたれば、唯だ吹くばかりなり。笛は吹きながら息の中にて、且つ調べもて行く物なれば、孔毎に口傳の上に、性骨を加へて、心を入るる事、五の孔のみに限らず。偏に除くとばかりも定むべからず。惡しく吹けば何れの孔も快からず。上手は何れをも吹き合はす。呂律の物に協はざるは人の咎なり、器の失に有らず」と申しき。

「何事も邊土は卑しく頑なれども、天王寺の舞樂のみ都に恥ぢず」と云へば、天王寺の伶人の申し侍りしは、「當寺の樂は能く圖を調べ合せて、物の音のめでたく調はり侍る事、外よりも勝れたり。故は、太子の御時の圖、今に侍るを博士とす。謂はゆる六時堂の前の鐘なり。其聲黃鐘調の最中なり。寒暑に從ひて上がり下がり有るべき故に、二月の涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。祕藏の事なり。此一調子を以ちて、何れの聲をも調へ侍るなり」と申しき。凡そ鐘の聲は、黃鐘調なるべし。是れ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鐘調に鑄らるべしとて、あまた度鑄替へられけれども、協はざりけるを、遠國より尋ね出だされけり。法金剛院の鐘の聲、また黃鐘調なり。

「建治弘安の頃は、祭の日の放免の附け物に、異樣なる紺の布四五端にて、馬を作りて、尾髮には燈心をして、蜘蛛の網書きたる水干に附けて、歌の心など云ひて渡りし事、常に見及び侍りしなども、興有りて爲たる心地にてこそ侍りしか」と老いたる道志どもの、今日も語り侍るなり。此頃は附け物、年を送りて過差〔華奢〕事の外に成りて、萬づの重き物を多く附けて、左右の袖を人に持たせて、自らは鉾をだにも持たず、

息づき苦む有様、いと見苦し。

竹谷乘願房、東二條院へ參られたりけるに、「亡者の追善には、何事か勝利多き」と尋ねさせ給ひければ、「光明眞言、寶篋印陀羅尼」と申されたりけるを、弟子ども「如何に斯くは申し給ひけるぞ、念佛に勝る事候ふまじとは、何ど申し給はぬぞ」と申しければ、「我宗なれば、然こそ申さまほしかりつれども、正しく稱名を追福に修して、巨益あるべしと說ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと重ねて問はせ給はば、如何が申さんと思ひて、本經の確かなるに附きて、此の眞言陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

鶴の大殿は、童名鶴君なり。鶴を飼ひ給ひける故にと申すは僻事なり。

陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて尋ね參うで來りしが、先づ差し入りて「此庭徒らに廣き事あさましく有るべからぬ事なり。道を知る者は植うる事を勤む。細道一つ殘して、皆畠に作り給へ」と諫め侍りき。眞に少しの地をも徒らに置かん事は、益無き事なり。食ふ物、藥種など植ゑ置くべし。

多久資が申しけるは、通憲入道舞の手の中に興ある事どもを撰びて、礒の禪師と云ひける女に敎へて舞はせけり。白き水干に鞘卷を差させ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞ云ひける。禪師が女靜と云ひける、此藝を繼げり。是れ白拍子の根源なり。佛神の本緣を歌ふ。其後源光行多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に敎へさせ給ひけるとぞ。

後鳥羽院の御時、信濃前司行長稽古の譽有りけるが、樂府の御論義の番に召されて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名を付きにけるを心憂き事にして、學問を捨てて遁世したりけるを、慈鎮和尙、一藝ある者をば下部までも召し置きて、不便に爲させ給ひければ、此の信濃入道を扶持し給ひけり。此行長入道「平家物語」を作りて、生佛と云ひける盲目に敎へて語らせけり。然て山門の事を殊にゆゆしく書けり。九郎判官の事は、詳しく知りて書き載せたり。蒲冠者の事は善く知らざりけるにや、多くの事どもを記し洩せり。武士の事、弓馬の技は、生佛、東國の者にて、武士に問ひ聞きて書かせけり。彼の生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

「六時禮讃」は法然上人の弟子安樂と云ひける僧、經文を集めて作りて勤めに爲けり。其後太秦善觀房と云ふ僧、節博士を定めて、聲明に成せり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より始まれり。法事讃も同じく、善觀房始めたるなり。

千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人是れを始められけり。

善き細工は、少し鈍き刀を使ふと云ふ。妙觀が刀は甚く立たず。

五條の內裏には妖物ありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども黑戶にて棋を打ちけるに、御簾を掲げて見る者あり。「誰そ」と見向きたれば、狐、人の樣に蹲居て差し覗きたるを、「あれ狐よ」と響動まれて、狼狽ひ逃げにけり。未練の狐、化け損じけるにこそ。

園別當入道は雙無き庖丁者なり。或人の許にていみじき鯉を出だしたりければ、皆別當入道の庖丁を見ばやと思へども、容易く打出でんも如何がと躊躇ひけるを、別當入道然る人にて、「此程百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきに有らず、枉げて申し受けん」とて切られける。いみじく調和しく興ありて人ども思へりけると、或人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「斯樣の事、己れは世に煩さく覺ゆるなり。切りぬべき人無くば賜べ、切らんと云ひたらんは猶善かりなん、何んでふ百日の鯉を切らんぞ」と述給ひたりし、をかしく覺えしと、人の語り給ひける、いとをかし。大方振舞ひて興あるよりも興無くて安らかなるが勝りたる事なり。賓客の饗應なども、時機をかしき樣に取り成したるも眞に善けれども、唯だ其事と無くて取り出でたる、いと好し。人に物を取らせたる、時機無くて「是れを奉らん」と云ひたる、眞の志なり。惜む由して乞はれんと思ひ、勝負の負けわざに託けなどしたる、煩かし。

すべて人は無智無能なるべき者なり。或人の子の見樣など惡しからぬが、父の前にて人と物云ふとて、史書の文を引きたりし。賢しくは聞えしかども、尊者の前にては然らずともと覺えしなり。

また或人の許にて、琵琶法師の物語を聞かんとて、琵琶を召し寄せたるに、柱の一つ落ちたりしかば、「作てり附けよ」と云ふに、或男の中に、惡しからずと見ゆるが、「舊き柄杓の柄ありや」など云ふを見れば、爪を生したり。琵琶など彈くにこそ。盲法師の琵琶、其沙汰にも及ばぬ事なり、道に心得たる由にやと、かたはら痛かりき。「柄杓の柄は、檜物木とかや云ひて、善からぬものに」とぞ或人仰せられし。若き

人は少しの事も、善く見え悪ろく見ゆるなり。

萬づの科あらじと思はば、何事にも誠ありて人を分かず、恭しく詞少なからんには如かじ。男女老少、皆然る人こそ善けれども、殊に悪くろ容貌好き人の言端麗しきは、忘れ難く思ひ附かるるものなり。萬づの科は、馴れたる樣に上手めき、所得たる氣色にして、人を輕蔑にするに在り。

人の物を問ひたるに、知らずしも有らじ、有りのままに云はんは、迂愚がましとにや、心惑はすやうに返事したる、善からぬ事なり。知りたる事も、猶分明にと思ひてや問ふらん。また眞に知らぬ人も何どか無からん。麗らかに云ひ聞かせたらんは、大人しく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、我が知りたるままに、「然ても其人の事のあさましさ」などばかり云ひ遣りたれば、「如何なる事の有るにか」と推し返し問ひに遣るこそ心調和無けれ。世に舊りぬる事をも、自から聞き漏す事も有れば、覺束なからぬやうに告げ遣りたらん、悪しかるべき事かは。斯樣の事は物馴れぬ人の有る事なり。

主ある家には漫ろなる人、心のままに入り來る事無し。主人無き所には、道行人漫りに立ち入り、狐、梟やうの物も、人氣に塞かれねば、所得顔に入り棲み、木精など云ふ怪しからぬ〔んノ轉訛〕形も現はるるものなり。また鏡には色形無き故に萬づの影來りて移る。鏡に色形あらましかば映らざらまし。虚空善く物を容る。我等が心に念念の縱に來り浮ぶも、心と云ふ物の無きにや有らん。心に主あらましかば、胸の中に、若干の事は入り來らざらまし。

丹波に出雲と云ふ所有り。大社を遷してめでたく造れり。志太の某とかや領る所なれば、秋の頃、聖海上人、其外も人數多誘ひて、「いざ給へ、出雲拜みに、掻餅召させん」とて、具し持て往きたるに、各拜みて、ゆゆしく信起したり。御前なる獅子、高麗犬、背きて後ろ樣に立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや、此獅子の立ちやう、いと珍らし。深き故あらん」と、涙ぐみて、「如何に殿ばら、殊勝の事は御覽じ咎めずや、無下なり」と云へば、各怪みて、「眞に他に異なりけり、都の苞に語らん」など云ふに、上人猶ゆかしがりて、大人しく物知りぬべき顏したる神官を呼びて、「此御社の獅子の立てられ樣、定めて習ひ有る事に侍らん、ちと承らばや」と云はれければ、「其事に候ふ。不善き童部どもの仕まつりける、奇怪に候ふ事なり」とて、差し寄りて据ゑ直して往にければ、上人の感涙徒らに成りにけり。

柳筥に据うる物は、縱樣、横樣、物に由るべきにや。「卷物などは、縱樣に置きて、木の間より紙捻を通して結ひ附く。硯も縱樣に置きたる、筆轉ばず、善し」と、三條右大臣殿仰せられき。勘解由小路の家の能書の人人は、假にも縱樣に置かるる事無し、必ず横樣に据ゑられ侍りき。

御隨身近友が自讃とて、七箇條書き留めたる事あり。皆馬藝、然せる事無き事どもなり。其例を思ひて、自讃のこと七つ有り。

一、人數多伴れて花見歩りきしに、最勝光院の邊にて、男の馬を走らしむるを見て、「今一度馬を馳するものならば、馬倒れて落つべし。暫し見給へ」とて立ち留まりたるに、また馬を馳す。止むる所にて、馬を

引き倒して、乘る人泥土の中に轉び入る。其詞の誤まらざる事を、人皆感ず。

一、當代未だ坊におはしましし頃、萬里小路殿御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ、用ありて參りたりしに、「論語」の四五六の卷を繰り廣げ給ひて、「只今御所にて紫の朱奪ふ事を惡むと云ふ文を御覽ぜられたき事ありて、御本を御覽ずれども、御覽じ出だされぬなり。猶能く引き見よと仰せ言にて求むるなり」と仰せらるるに、「九の卷の其處其處の程に侍る」と申したりしかば、「あな嬉し」とて、持て參らせ給ひき。斯程の事は、兒どもも常の事なれど、昔の人は聊かの事をも、いみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、「袖と袂と、一首の中に惡しかりなんや」と、定家卿に尋ね仰せられたるに、「秋の野の草の袂か花薄穗に出で招く袖と見ゆらんと、侍れば、何事か候ふべき」と申されたる事も、「時に當りて本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なり」など、事事しく記し置かれ侍るなり。九條相國伊通公の欵状にも、異なる事無き題目をも書き載せて、自讃せられたり。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、鑄型に移させんとせしに、奉行の入道、彼の草を取り出でて見せ侍りしに、「花の外に夕を送れば、聲百里に聞ゆ」と云ふ句あり。陽唐の韻と見ゆるに、百里誤りと申したりしを、「善くぞ見せ奉りける。己れが高名なり」とて、筆者の許へ云ひ遣りたるに、「誤り侍りけり、數行と直さるべし」と返事侍りき。數行も如何なるべきにか。若し數歩の心か、覺束なし。

一、人あまた伴ひて、三塔順禮の事侍りしに、横川の常行堂の中、龍華院と書ける古き額あり。佐理、行成の間、疑ひありて未だ決せずと申し傳へたりと、堂僧事々しく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし、佐理ならば裏書あるべからず」と云ひたりしに、裏には塵積り、蟲の巣にて悒せげなるを、能く掃き拭ひて、各見侍りしに、行成、位署、名字、年號、分明に見え侍りしかば、人皆興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼聖談義せしに、八災と云ふ事を忘れて、「誰か覺え給ふ」と云ひしを、所化皆覺えざりしに、局の中より、「是れ是れにや」と云ひ出だしたれば、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて加持香水を見侍りしに、未だ果てぬ程に僧正歸りて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもを返して求めさするに、「同じ様なる大衆多くて、え求め逢はず」と云ひて、いと久しく出でたりしを、「あな佗し、其れを求めておはせよ」と云はれしに、返り入りてやがて、具して出でぬ。

一、二月十五日、月明き夜打更けて、千本の寺に詣でて、後ろより入りて、獨り顏深く隱して聽聞し侍りしに、優なる女の、姿、匂ひ、人より殊なるが分け入りて、膝に居寄れば、匂ひなども移るばかりなれば、便惡しと思ひて、すり退きたるに、猶居寄りて同じ様なれば立ちぬ。其後或る御所樣の古き女房の、漫言云はれし序に、「無下に色無き人におはしけりと、見貶し奉る事なん有りし。情無しと恨み奉る人なん有る」と述給ひ出だしたるに、「更にこそ心得侍らね」と申して止みぬ。此事後に聞き侍りしは、彼の聽聞の夜、御局の中より人の御覽じ知りて、侍ふ女房を傚裝り立てて出だし給ひて、「便善くは詞など掛けんも

のぞ。其有樣參りて申せ、興有らん」とて、謀り給ひけるとぞ。

八月十五日、九月十三日は婁宿なり。此宿淸明なる故に、月を翫ぶに良夜とす。

忍の浦の海人の見る目も所狹く、暗部の山も守る人繁からんに、理無く通はん心の色こそ淺からず哀れと思ふ節節の、忘れ難き事も多からめ。親兄弟許して、一向に迎へ据ゑたらん、いと目映かりぬべし。世に在り佗ぶる女の、似氣無き老法師、卑しの東人なりとも、賑はしきに附きて、「誘ふ水あらば」など云ふを、中人、何方も心にくき樣に云ひ成して、知られず知らぬ人を迎へもて來たらん合無さよ。何事をか打出づる言の葉にせん。年月の冷淡さをも、「分け來し端山の」なども、相語らはんこそ盡きせぬ言の葉にても有らめ。すべて餘所の人の取りまかなひたらん、憂たて心諧和無き事多かるべし。好き女ならんに付けても、品下り醜く、年も長けなん男は、「斯く卑しき身の爲めに、あたら身を徒らに爲さんやは」と人も心劣せられ、我身は向ひ居たらんも影恥かしく覺えなん、いとこそ合無からめ。梅の花香ばしき夜の、朧ろ月に佇み、御垣原の露分け出でん有明の空も、我身樣に忍ばるべくも無からん人は、唯だ色好まざらんには如かじ。

望月の圓かなる事は、暫くも住せず、やがて虧けぬ。心留めぬ人は、一夜の中に、然まで變る樣も見えぬにや有らん。病の重るも、住する隙無くして、死期既に近し。然れども未だ病急ならず、死に趣かざる程は、常住平生の念に習ひて、生の中に多くの事を爲して後、靜かに道を修せんと思ふ程に、病を受けて死門に臨む時、所願一事も成せず、云ふ効無くて、年月の懈怠を悔いて、此度若し立ち直りて命を全くせば、夜

を日に繼ぎて、此事、彼の事、怠らず爲してんと願を起すらめど、やがて重りぬれば、我にも有らず、取り亂して果てぬ。此類ひのみこそ有らめ。此事先づ人人急ぎ心得置くべし。所願を成じて後、暇ありて道に向はんとせば、所願盡くべからず。如幻の生の中に何事をか爲さん。すべて所願皆妄想なり。所願心に來らば、妄心迷亂すと知りて、一事をも爲すべからず。直ちに萬事を放下して道に向ふ時、障り無く所作無くて、心身永く靜かなり。

長久に逆順に使はるる事は、偏に苦樂の爲めなり。樂と云ふは好み愛する事なり。是れを求むる事止む時無し。樂欲する所、一には名なり。名に二種あり、行跡と才藝との譽なり。二には色欲、三には味なり。萬づの願、此三つには如かず。是れ顚倒の相より起りて、若干の煩ひあり、求めざらんには如かじ。

八つに成りし年、父に問うて云く、「佛は如何なる者にか候ふらん」と云ふ。父が云く、「佛には人の成りたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛には成り候ふやらん」と。父また、「佛の教に由りて成るなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば何が教へ候ひける」と。また答ふ、「其れもまた前の佛の教に由りて成り給ふなり」と。また問ふ、「其教へ初め候ひける第一の佛は如何なる佛にか候ひける」と云ふ時、父「空よりや降りけん、土よりや湧きけん」と云ひて笑ふ。「問ひ詰められて、え答へず成り侍りつ」と、諸人に語りて興じき。

正德二年仲夏上旬

書林　和泉屋茂兵衛梓行

昭和元年十二月二十八日印刷
昭和元年十二月三十一日發行
［非賣品］

日本古典全集第二回
徒然艸

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎
東京府北豐島郡長崎町一六二
發行者　長島豐太郎
東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷所　新樹製版印刷所
印刷者　高[illegible]清吉

東京府北豐島郡長崎町一六二
發行所　日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三一
電話小石川七〇九九

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03034 2497

PL
791
.6
T7
1926